

——いつね？ と、ユリイは窃に心を悸つかしつゝ、訊いた。
——昨日。

——さうでしたか。と、リヤリヤの様子を注意しながら、ユリイは云つた。彼は妹の前にあると、何だか彼女を瞞したやうで、耻しくも恐しくも感じた。リヤリヤは一寸立つて、心にもなく卓子の上の何かに手を觸れたが、やがて、進まぬやうに戸口の方へ行つた。

——俺は何をしたのだらう？ と、ユリイは心から氣の毒になつてさう考へた。そして遠去りゆく少女の足音に聽耳を立てた。

リヤリヤは悲しさうに身を硬くして途方に暮れながら座敷の方へ赴いた。彼女は暗い森の中で道に迷つたやうな心持で歩いた。鏡の前を通りすぎた時に、ふと自分の姿が映つたが、彼女の顔は、惱ましげに蹙れて見えた。

——さうだわ、きつと……あの人はこんな風な顔に私を見るんだわ。と、彼女は考へた。

リヤザンツエヴは食堂の中央に立つて待つてゐた。そして調子のいゝハキ／＼した聲で今しもニコライ・エゴロゴツチに何か云つてゐた。

——此發表は勿論大膽です。併し全く無害なので……。

彼れの聲をきくと、リヤリヤはゾツとして、胸も碎けるやうな氣がした。リヤザンツエヴは彼女の姿を見て、急に談話をやめ、ツカ／＼と彼女の傍へ近寄り、慎しやかな身振をしながら、双手を差出した。其身振は彼女だけに意味がわかるので、即ち彼女を抱きたいといふ謎であつた。

リヤリヤは彼れの顔の下の方だけを見た。彼女の唇は顫へた。で、物を云はず兩手を引放して、座敷を横ぎりざま、露臺の上の硝子屏を開いた。リヤザンツエヴはやゝ呆れたが、併し物靜かに彼女の後姿を見やつた。

——リウドミラ・ニコライエヴナさんは憤つてお出でになりますよ。と、彼は眞顔に又譁けたやうにニコライ・エゴロゴツチへ云つた。

ニコライ・エゴロゴツチはカラ／＼と笑つた。

——慰めてやつたらいいでせう。

——さうしなければなりませんまい。と、リヤザンツエヴは剽輕に溜息をついて、露臺の上へリヤリヤの跡を追つて行つた。

雨は依然として降つてゐた。單調な點滴の音は絶間なく空中に充ちてゐたが、今はもう薄明るくなつて、雲ぎれさへはじめた。

リヤリヤは鮮やかに濡れた柱に頬を押しつけて、頭を雨に曝してゐたが、髪は既に小さな點滴でキラ／＼してゐた。

——姫君は御機嫌がお悪いですな……リヤリチカさん！ と、リヤザンツエヴは彼女を自分の方へ引寄せて、いゝ匂のする其髪へ唇を掠めながら云つた。

この親しげな抱擁によつて、彼女の悲しさは胸の中で溶けて了つた。そして自分のした事を考へて見る暇もなく不思議な力に追立てられるやうに、彼女は許嫁の頸へ腕を巻きつけて、幾度も

長い接吻をしながら云つた。

——妾はもう／＼本當に貴兄の事を怒つてるのよ……貴兄は悪い人だわ。そして彼女が今迄考へた事は、自分の戀はもう取返しのかね悲しい情ないものになつて了つた、といふ考は彼女には今ばかり／＼しく思はれたのである。

何だつて自分はあるな事を心配したものであらう？ 彼女はたゞ一つの事ばかり冀つてゐたのであつた、かういふ大きな軀の美しい男と愛し愛されたいといふ事ばかり。

午飯の間、彼女は驚いたやうに自分の顔を見てゐる兄と對合ふのが耻しかつた。で、人の氣がつかぬ間を窃んで、憐ッばい聲で口籠つた。

——妾は醜いきこなのよ……。

ユリイはテレ隠しにニッコリした。實は、何もかも斯く圓滿に納つた事は、彼も内心満足ではあつたのだから、かうした市俗な幸福をば平凡に楽しむ有様などに對して彼は努めて侮蔑しようとしてゐた。

彼は自分の部屋へ退いて、夕方までポツリとしてゐた。晚霞ゆづりが空を明るく輝かす頃になると、彼は銃をとつて、昨日リヤザンツエツと一緒に往つた同じ場所へ獵に出かけた。彼は過去つた事など忘れて了はうと思つたのである。

雨あがりなので沼は水々してゐた。いろ／＼な物音がいかにも長閑に遠近から響いて來た。草は恰も身内に藏れた或魔力にでも動かされるもの、やうに戦いた。蛙も鳴いてゐた。鳥が一羽け

た、まじしい聲で、トルルル……トルルル……と鳴き立てた。と、その邊の髯草の中で、ガサガサ、鴨が飛び廻つたが、銃の達するあたりまで近よると、バツタリ鎮まつて了つた。ユリイは打つ氣がなくなつたので、再び銃を肩にすると、シンとした夕方の水晶のやうな物音をきながら、家路を指して立還つた。空は暗くなつたり明るくなつたりして彼の心を酔はした。

——い、天氣だ！ と、彼は考へた。何もかも皆い、人間だけは悪い……。

彼は遙か向ふの瓜畑の上に見覺のある光を認めた。ずつと近づくと、火の周圍に坐つてゐるクズマとサニンの顔があか／＼と目に這入つた。

——奴はあすこに泊つてゐるのか知らん？ と、ユリイは驚いて訝しく思つた。

クズマは何か話しながら、身振りをして笑つた。サニンも同じく笑つた。火の光は紅いといふよりは寧ろ薇薔色で蠟燭の焰のやうに輝いてゐた。星は高い空の上でやさしくキラめいた。新鮮な土の匂や濡れた草の匂が夜の暗に漂つてゐた。

なぜか知らぬが、ユリイは此男達に認められなくなつた。が同時に、彼は彼等に近づけない事を悲しくも思つた。そして自分と彼等との間には、架空な形のない、而も絶対に測るべからざる、大氣を奪去つた空間のやうな、云ひやうのない障物物が立つてゐるやうに感じたのである。

彼はたつた一人此世界のうちに、たつた一人透明の空のうちに、星の光のうちに、たつた一人黑暗の室に閉籠められたやうな、この物音のうちに、ポツリと立つてゐるやうな心持がして、さびしくて／＼我慢が出来なくなつた。で、白い水瓜がほの／＼と無數に押列んだ瓜畑を通りすぎ

た時に、其水瓜が平野に散亂した鬮體のやうに思はれたほど、それほど身にしみぐと彼は淋しさにたへかねたのである……。

十六

熱と光が迸つて、夏も真盛りとなつた。日に惱める地と青空との間には、黄金色の蒸發氣が紗のやうにぶる／＼と揺めいて見えた。この灼くが如き蜃氣樓のうちで、木々は暑さに疲れはて、その葉はジツと傾いたまゝ、恰も假眠をしてゐるやうであつた。短い透明な其影が乾き了つて埃だらけな草の間に、ぐつたりと横たはつてゐた。

が、部屋のうちは涼しかつた。庭から来る緑色の反射が天井にほの／＼いて、何もかも皆暑熱のうちで凝結したやうに見えてゐる間をば、物の影がさわやかに窓掛の上を動いた。

ザルデインは眞白な寢衣を袒けて、白く長い齒を露しつゝ、懶けたやうにシガレットを薫らしながら、緩やかな歩調で部屋の隅から隅へ歩いてゐた。タナロヴはたゞ襯衣と馬乗股衣を着けたまゝ、汗みづくになつて、安樂椅子の上へ臥そべつてゐた。彼はひどくソワ／＼してゐた。そして小さな黒い眼で、部屋の中を往來する戦友の姿を追廻してゐた。彼は差迫つて五十留^{ルツル}ほど入用であつた。もう二回までザルデインにそれを無心したのだが、三回とはその無心を云ひ出す氣にならないので、ザルデイン自身が其の事を憶出してくれるのを、彼は氣遣はしげに待つてゐたのである。ザルデインは實はもう其事なら憶出してゐただけけれど、先月中に賭博で七百留も負け

たので、それが爲に金が惜しかつたわけである。

——この男はもう俺に二百五十留も借金があるのだ。と、彼はタナロヴを見るうちに腹が立つて来て、さう考へた。甚だ面目に係はる次第だ！……お互ひの交誼から云つても、もうすこし遠慮したらよさゝうなものだ……少とも借金でもしようと思つたらなア……いや、俺はもう一文も貸すまい。と、彼は心の中でいゝ氣味だと思つた。

赤痣の散らばつた顔へモジヤ／＼蠶^{ムサビ}を生やした小男の従卒が一名、のそりと室内へ這入つて来た。彼は規則通りの姿勢をして生ぬるく不器用な調子でザルデインの顔を見ずに云つた。

——大尉殿に報告致します。大尉殿は麥酒をお命じになりましたが、麥酒はもうムいません。ザルデインは赫と眞赤になつて、思はずタナロヴを見つめた。

——これだ！ と、彼は考へた。怪しからん！ たうとうこの始末だ……一文もないくせに麥酒など命するのを知つてゐるのだ。

——ウオツカもお終ひになりました。と、兵卒は云ひ足した。ザルデインはます／＼赫となつて兵卒を睨みつけた。

——宜しい。馬鹿めが……貴様のところにはまだ二留残つてゐる筈だ……必要品を買つて來い。

——何も残つてはをりません、全く何も……。

——何もない？ なぜ嘘をつくか？ と、ザルデインは怒鳴つた。

——大尉殿は洗濯屋へ一留と七十哥^{コベック}拂へとお命じになりました。で、私はそれを洗濯屋へ拂ひました。又其殘餘の三十哥は、化粧室の卓子の上へ置きました、大尉殿……。

——あゝ、さうだ？ とタナロヴはわざと懶けた調子で云つたが、眞赤な顔をしてゐた。僕は昨日その事を此男に云つて置いたよ……あの女が一週間も附纏つてゐやがつて、不愉快でたまらなかつたからね……。

紅い斑點がザルデインの丁寧に剃つた顔の上へ露れた。と、肌理^{きめ}の細かな皮膚の下で顴骨をグリグリと動かして、彼は意地悪さうな獅噛面を拵へた。で、再び黙々と室内を歩きつゞけてゐたが、やがて不意とタナロヴの前へ立止まつて、

——おい、君、と、彼は怒氣を含んだ顫聲で云つた。どうかね、以來は僕の金を處分しないでもらひたいよ……。

タナロヴは赧くなつてモジ／＼した。

——いや……滑稽だ……こんなつまらん事なぞで、と、肩を聳かしながら、彼は口の中で云つた。

——つまらん問題なものか。と、ザルデインは何かタナロヴに復讐でもするやうな意地の悪い快さを感じながら續けた。而も根本問題だ……。

——僕は……と、タナロヴは切出さうとした。

——いや、君、とザルデインは依然として苛ついた調子でキツパリと遮つた。少くとも借るな

ら借ると一應僕に云つてくれたらいいだらう……君のやり方は甚だ面白くない。

タナロヴは唇を動かしたが、やがて下を向いてぶる／＼震へる指頭で、眞珠貝の小さな吸口をば玩弄にし出した。ザルデインは一寸の間彼れの返答を待つてゐたが、俄にクルリと脊中を見せ、鑰をガチャ／＼やりながら、抽斗の中を探しはじめた。

——さア、これを持つて……必要品を買つて來い。と、彼はまだ怒氣を帯びてゐたが、もう静まりかけた調子で云ひながら、兵卒へ百留の紙幣を差伸べた。

——承知しました！ と、答へて兵卒は半ば右向けをしながら、出て行つた。

ザルデインは小匣の鍵をきこえよがしに鳴らして抽斗を閉ぢた。タナロヴはチラリと其小匣を窺視したが、その中には彼れの入用な五十留が這入つてゐた。彼は溜息をついて、シガレットに火を點けた。で、甚だ侮辱されたやうな氣もしたが、ザルデインが尙怒りはせぬかと懼れて、見ないふりをした。

——奴にとつちや二留がどうしたといふのだ……と、彼は考へた。俺が金の入用な事は奴はよく知つてるのだ……。

ザルデインはムシヤ／＼しながら例の大股で室内を濶歩してゐた。が、だん／＼に心が和らいで、從卒が麥酒を持つて來た時などは、波々と注いだ、泡の立つ、冷たい一杯をば心地よげに傾けた。で、髭の端をチュウ／＼吸ひながら、彼はケロリと話し出した。

——僕はね、きのふも亦リドカの訪問を受けたよ……可愛い娘だよ、君……夢中になつて

接吻するんだ……。

タナロヴは面白くなって押黙った。

ザルデインは委細かまはず、憶出し笑ひを眼の中に湛へながら、悠々と室内を横ぎつてゐた。と、頑健な彼れの肉體がムン／＼熱くなつて、炎ゆるやうな、煮えくり返るやうな心持がムツついて來たので、彼は突乎にカラ／＼と笑つた、馬の嘶くやうな聲を出して笑つた。そしてピタリと立止まつた。

——ねえ、君……昨日は僕もやつつける氣だつたよ……彼は特殊な、卑猥な、又女にとつては辱かしい言葉を使つた——が、先生最初のうちは反抗したね……ねえ、君あの女は時々眼の中へ高慢くさい光を見せるだらう……。

タナロヴは今度は自分から氣色ぼんで、思はずニヤ／＼獸的な微笑を洩らした。

——けれど、それから跡は……僕自身が息のつまるほどな思ひをしたよ。と、ザルデインは強烈な追憶に身顛ひしながら結んだ。

——うまくやつたね！と、タナロヴは羨ましさうに絶叫した。

——ザルデイン君、ゐるかい？ と、イヴノヴの響く聲が往來からきこえた。這入つてもいゝかね？

ザルデインは不安らしく身を戦慄わなかした。彼は相變らずリダ・サニナの話を誰かにきかれはしなかつたかと恐れたのである。が、往來から聲をかけたイヴノヴの姿は、家を取巻く塀に隔てら

れて見えなかつた。

——ゐるよ、ゐるよ、と、ザルデインが叫んだ。

足音や笑聲が玄關に響いて、何だか陽氣な群集がどや／＼と家の中へ侵入したやうな物音であつた。と、間もなくイヴノヴとノギコヴと、騎兵隊長のマリノヴスキイ及其他兩名の士官と、それからサニンが這入つて來た。

——ウラア！ と、マリノヴスキイが耳も聳れるやうな聲で怒鳴つた。同時に、二タ束ねの裸麥よろしくといふ髭の、ぶる／＼と頬の顫へる、てら／＼と眞紅に光つた彼の顔が、入口の框へ現れた。戦友、今日は！

——あゝ、ばか／＼しい！……また二十五留の紙札が一枚飛んで了ふ！ と、ザルデインは眼をパチクリさせながら、忌々しく思つた。彼はどうかして札がのいゝ金持の戦友だといふ評判を落すまいといふ事にばかり浮身を窺してゐたのである。そこで鷹揚に微笑みながら叫んだ。

——や、お早う！ お揃ひでどこからお出でかね？……こら、チエレバノヴ！……ウオツカとそれからもつと何か持つて來い！ 又倶楽部へ行つて、麥酒一箱届けるやうに云ひつけて來い！……諸君、麥酒はどうです？……ばかに暑いですね……。

麥酒とウオツカの爲に騒ぎは盛になつた。素晴しく景氣をつけて、彼等は笑つたり、怒鳴つたり、わめいたり飲んだりした。が、ノギコヴばかりは鬱ぎ込んでゐた。そしていつも物柔らかな氣のない顔のうちへ、何か意地悪さうな表情をさへ湛へてゐた。

彼は今迄知らなかつた、町中で大評判の取沙汰をば、きのふはじめて知つたのである。そして屈辱と嫉妬の念が猛烈に彼れの心を引掻きまはしたのである。

——そんな事があるものか……ばか……しい……實に下らない。と、彼は先づ考へた。自分があんなに清い戀を獻げてゐた。あの尊大な、近づくべからざるリダが、自分よりは遙に劣つてゐるし又遙かに愚かでもあるときや考へられぬザルデインの傍なぞで、耻かしい卑猥な態度をしようとは、彼れの心では中々想像もつきかねたのである。と、殘虐な獸的な嫉妬が心の中の凡ゆる他の感情をば悉く壓倒したのである。彼は絶望した。そしてリダとザルデインに對して恐しい憎悪を感じた。これは彼れの物柔らかな平靜な心にとつては非常な事であつた。従つて此感情の吐き場が必要であつた。彼は夜もすがらマンジリともせず、自分自身を憐み明かした。又自殺といふ考が幾度も起つたが、朝方になると、さういふ考は消失せて、たゞザルデインに會ひたいといふ、煮えかへるやうな、云ひやうのない、烈しい慾望ばかりが残つたのである。

で、今、酒呑の喧囂を極めた中にゐて、彼はたゞ一人離れて、チビリ……麥酒を飲みながら、恰も猛獸が他の猛獸に躍びかゝらうとして既に身を伏せ、わざと平靜を裝つてゐる際のやうに、なが……と軀を伸ばして、ザルデインの一舉一動をば仔細に觀察してゐた……。

其白く光る齒や、其美貌や、又其笑聲や、ザルデインの一舉一投足は、ノギコヴには恰も開いた傷口へぐツと突込まれる刃のやうであつた。

——ザルデイン君。と、瘠せた丈の高い士官が、長い腕をだらしなくブラ……させながら云つ

た。我輩は君に書物を一冊持つて來たよ……。

あらゆる種類の叫喚を横ぎつて、ノギコヴは此「ザルデイン君」と云つた聲と、ザルデイン自身を耳にした。恰も其他の聲々が其聲を除いて皆な消失せて了つたやうに。

——何の書物かね！

——トルストイの「女について」さ。と、報告でもする時のやうな昂然たる聲で、丈の高い士官は答へた。人々は生色のない其の細長い顔の上に、トルストイを読み、トルストイについて語るといふ、此男の得意さ加減を見た。

——君はトルストイを澤山讀んだかね？ と、イヴノヴは此士官の得意らしい初心な表情を偷視ながら訊いた。

——フォン・ダイツ君は熱心なトルストイストさ。と、マリノヴスキイがカラ……と哄笑しながら酔拂つた聲で説明した。

ザルデインは紅い表紙の小冊子を取つて、二三枚バラ……と翻へしながら訊いた。

——面白いかね？

——まア、讀んで見たまへ。と、フォン・ダイツは恍惚として云つた。實に大思想だ……君自身のやうな氣がするに違ひないね……。

——が、何の爲に……ギクトル・セルガイエゴツチ君がトルストイを讀まなけりやならんでせう？ 女に關する獨特の定見を持つてお出でなさるのにね……と、ノギコヴは洋杯の上を見

ながら、低い聲で云つた。

——君はどこからさういふ結論を得たのですか？ と、ザルデインは本能的に或攻撃を豫知して用心深く訊いたがノギコヴの意のあるところは測り難かつた。

ノギコヴは押黙つてゐた。彼れの心中では百方から聲が起つて、あのザルデインの得々たる美貌を擲きつけ、それから突倒し、それから滅茶苦茶に蹂躪つて了へと絶叫したのである。けれども心中で考へた言葉は彼れの口からは出て來なかつた。彼は適切な言葉を見出しかねたのである。で、やけくそになつて、苦しみ悶へた揚句、あてつけにニヤ／＼微笑みながら口を切つた。

——君を見たゞけで充分ですよ……それが分るにはね。

彼れの聲の脅かすやうな奇怪な調子が喧囂の中を貫いて響いたので、一同は恰も暗殺事件にでも際會したやうにビタリと鳴を鎮めた。イヴノヴは何事が起つたかと推測した。

——僕にはさう思はれるが、恰も……と、ザルデインは冷然と受けた。彼れの顔色はサツと變つたが、彼はすぐそれを壓殺して了つた。

——おい、兩君、兩君、どうしたわけだ？ と、イヴノヴが叫んだ。

——ほつて置いてなぐり合ひをさせるが、よ。と、ニツコリしながらサニンが云つた。

——さう思はれるばかりぢやない。さうなのだ……と、ノギコヴは相變らず洋杯に目を据ゑて、同じ調子で云つた。

罵る聲、突出す腕、齒を露出す顔、それから和める言葉などが、恰も生きた壁のやうに、二人

の間へ浮上つた。フォン・ダイツとマリノヴスキとがザルデインを押隔てた。イヴノヴと今一人とがノギコヴを引退けた。タナロヴは注いでは飲み、注いでは飲み、誰へいふとはなく、大聲で何か叫んでゐた。このわざとらしい騒動を見て、ノギコヴは續ける氣がなくなつて了つた。彼は唇を窄めて苦笑しながら、彼を慰めようとしてゐる、イヴノヴと士官の方へ願向いた。そして呆れはてたやうに考へた。

——一體俺は何をするのだ……殴ればいゝのだ……殴れば……サツと寄つて、シャツ面を打踏（ちのめ）してやればいゝのだ……でなけりや、お笑ひ草だ……俺が事を起したのを奴等はもう

チャンと察してゐるのだ……。

が、打踏す代りに、彼は聽耳を立て、面白さうな振をしながらフォン・ダイツとイヴノヴとの議論をきいてゐた。

——女の見方に關しては、我輩はトルストイと同意見ぢやない。と、士官が云つてゐた。
——女は依然として雌さ。要點はそこだよ。と、イヴノヴが答へてゐた。男のうちにはまだ尊敬するに足る人間はある。無論千人に一人だ。けれども女のうちにはさういふ人間は一人だつてありはせぬ……奴等は薇薔色をした、愛嬌のある、裸體の猿だ。そして尾がないだけさ……それだけさ。

——そりや甚だ面白い！ と、フォン・ダイツは賛成した。

——全くだ。と、ノギコヴはにが／＼しげに、さう思つた。

——さうさ、君！ と、イヴノヴはフォン・ダイツの鼻先で先縦横に腕を振廻しながら續けた。「男の顔を凝視する女は其心中既に姦淫を行ふものなり」と。さういふ事を人々に云つて見たまへ。さうすると、多くの人々は生まれて初めて非常に面白い事でもきいたやうな氣がするにきまつてゐる……。

フォン・ダイツは皺枯聲で犬の遠吠のやうにカラ／＼と笑つた。彼にはイヴノヴの洒落はわからぬのであつたが、さうした文句を自分自身が云はなかつた事を残念に思つた。

と、ノギコヴが不意と手を彼に差伸べたのである。

——もうかね？ と、フォン・ダイツは其手をジツと見つめながら、呆れて訊いた。

ノギコヴは答へなかつた。

——どこへ？ と、サニンが訊いた。

ノギコヴは黙つてゐた。もう一分そのまゝであつたら、彼れの胸に込上つた溜涙は、忽ち外へ溢れ出たであらう。

——君の心持はわかつてゐる……頭から唾を吐きかけてやれ！ と、サニンが云つた。

ノギコヴは憐みを乞ふやうな眼光で彼を見たが、其唇は顫へた。と、漠然たる身振をして、誰にも挨拶せず出て了つたが、この自分の意久地なさにたまらなく心を苦しめられて、それを鎮める爲に、彼はかう考へた。

——あの陋劣な紳士面を打踏して見たところが何だといふのだ？ 下らぬ鬭争にすぎないぢや

ないか……手を汚す必要はなからう。

で、充たされざる嫉妬心と自分の無氣力の嘆かはしさとに附纏はれたまゝ、ノギコヴは悶へながら家へ歸つた。そして寢臺の上へ身を投げかけ、枕に頭を埋めて、終日どうすることも出来ずに、たゞ苦しみ明かした。

——マカオを一番やらうぢやないか。と、マリノヴスキイが云つた。

——よからう。と、イヴノヴが同意した。

從卒が賭博の卓子を開くと、凡ての眼は愉快さうに緑色の毛氈の方へ向けられた。でマリノヴスキイが指先でハタ／＼と叩きながら骨牌を配りはじめた頃になると、人々は陽氣になつた。雑色の札は整然と列をなして擴げられた。露貨は畫面から畫面へチャリン／＼と轉つた。と、蜘蛛のやうに儂んだ指先が其銀貨を拾集めた。口早な皺枯聲がきかれたが、それはいつも同じやうな満足と不満足の絶叫であつた、恰も人々は其言葉の外は何も知らなかつたやうに。ザルデインは運が悪かつた。彼は逆上せかへつて、自分の掛金をば五十留まで引上げた。が、いつもそれは他人の物になつた。腹立たしげな斑点が彼れの美しい面上に散つた……先月彼は七百留失つたが、今はそれどころではなく、それ以上に失敗した。彼はもう自分の失敗を考へて見る氣もなくなつた。又彼れの不快な氣分は他の人々にまで及んだのである。フォン・ダイツとマリノヴスキイとは烈しい言葉を換はしはじめた。

——我輩は翼の上へ乗つたものさ。フォン・ダイツはイラつきながらも控目勝に云つた。彼は

かの粗大な酒癖の悪いマリノヴスキイが、氣のきいた高尚な彼フォン・ドイツに向つて、喧嘩など吹掛けはせぬがと鮮からず怖毛を震つたのである。

——君は吾輩を胡魔化すつもりか？ と、マリノヴスキイが怒鳴つた。糞ッ……我輩が勝つ時は、人は我輩をば翼に乗じてをると云つた。又我輩が負る時は……。

——要するに、許したまへ！ と、フォン・ドイツは、腹の立つ時にはいつもきまつた、をかしな、露西亞的でない發音で叫んだ。

——我輩は許さんぞ……やり直せ……いや、やり直せ……。

——我輩は云ふが……と、フォン・ドイツは金切聲で絶叫した。

——兩君、兩君……そりやいかん……甚だいかん。と、ザルデインは不意に骨牌を叩きつけて一喝した。

と、同時に、或新しい顔が一ツ、ヌツと入口の框へ現はれた。ザルデインは自分自身の聲にギョツとした。そして自分を取巻く醉漢どもや、机上に散つた骨牌や、罐やそれから俗悪な軍隊的の牛飲馬食などが耻しくなつた。

それは薄い眞白い廣やかな服装をした丈の高い紳士であつた。彼は頗る高い頗る狭い折襟をつけてゐた。が呆れて敷居の上に突立ちながら、眼でザルデインの居所を探した。

——やア、バエル・リヴオギツチ君！ どうした風の吹き廻しです？ と、ザルデインは眞赤になつて、ツカ／＼と其人の方へ足早に歩み寄りながら叫んだ。

紳士は室内へ這入る前に躊躇した。と、凡ての眼は麥酒罍や栓や潰れた吸殻などの中を行つたり來たりする其人の白靴の方へ、期せずして顧向けられた。

其人は眞の煙りのうちに、酔拂つた充血した凡ての人々の中に、いかにも白く、いかにも清楚と、いかにも匂ひゆかしかつた。彼れの軀が若し虚弱でなかつたら、矮少で且つ衰へてゐなかつたら、又彼の顔が瘦せてゐなかつたら、又彼の齒が疎らな赤髭の下で腐つてゐなかつたら、彼は恐らく泥中の白百合に譬へられたであらう。

ザルデインは彼れの手を握つた。

——どこからお出で、すか？ 彼得堡^{ピートル}をお出掛けになつてから餘程になるですか？ と、彼はどきまぎして訊いた。そしてベエテルブルグの事をばピイトエルなどと云つたのが若しや無禮な言方ではなかつたかと、相手の顔色を窺と覗つた。

——私は昨日着きました。と、白い紳士はハツキリした聲で答へた。が、其聲は息の窒るやうな雄鶏のそれに似てゐた。

——諸君。と、ザルデインは紹介した。フォン・ドイツ君、マリノヴスキイ君、タナロヴ君、サニン君、イヴノヴ君……バエル・リヴオギツチ・ヴオロシン君です。

ヴオロシンは軽く身を屈めた。

——我々はよく覺えて置かう？ と、サルデインをビク／＼させながら、酔拂つたイヴノヴが答へた。

——さア、バエル・リヴオギツチ君、どうか座つて下さい……葡萄酒はいかゞです？ それとも麥酒ですか？

ヴオロシンは用心深くフオテイユ脇掛椅子の上へ身を落した。と、彼の眞白な服装が蠟引布の上へハゴ暈をつ

——どうか、騒がずに置いて下さい……私はたゞ一寸来たばかりですから！ と、彼はジロジロ室内を見廻しながら侮蔑したやうな冷然たる調子で云つた。

——いや、いや……どう致して……直に白葡萄酒を取寄せます……君は白葡萄酒が大好きでしたよ。さうでせう？ と、ザルデインはわく／＼して云つたが、玄關の方へ駈けて行つた。

——かういふ厄介物がけふ丁度やつて來やがるのだ！ と、彼は腹立たしく思ひながら、從卒に命じて白葡萄酒を取りにやつた。あのヴオロシンの奴、俺がもう相當な家へ足踏みの出來ぬやうな、いろんな事をば、ビイトエルで觸れ歩くにきまつてゐる。

と、其間、ヴオロシンは公然と好奇的の眼を恃てながら、又かゝる連中よりは自分の方がずつと立優つた人間だと考へながら、ジロジロ周囲を観察してゐた。灰色に曇つた小さな彼れの眼は珍しい不思議な動物でも見るやうな面白さうな光を湛へた。就中、サニンの丈の高い軀や著しい筋骨やゴツ／＼した肩や、それから其服装などが彼の注意を牽いた。

——面白い典型だ……奴は腕力があるにちがひない！ と、彼はかの弱い小男が逞しい大男に對して感ずる初心な嘆美の情を以つて考へた。ヴオロシンはサニンに話しかけようと思つて口

を開いたが サニンは窓に胸を寄せかけて庭を見てゐた。

ヴオロシンは云ひかけた言葉をハタと切つた。自分の聲の力のない皺枯れた調子が自分ながら快くなかつたのである。

——無頼漢ども！ と、彼は考へた。

と、其時、ザルデインが部屋の中へ歸つて來た。彼はヴオロシンの傍へ座つて、ベエトルブルグ彼得堡の事や、ヴオロシンの所有してゐる工場の事や、又この新來者がいかに金持ちであるか、又いかに信用あるかを、他の者どもに分らせるやうな、さまざまの事を訊きはじめた。逞しい獸的な彼の美貌が陋しい奇怪な満足の表情を示した。

——すべて従前の通りです。君の知つて居らるゝ通りですよ。と、ヴオロシンは無造作に答へた。で、君自身はどうですか？

——私ですか？ 私はたゞ生きてゐるといふばかりです。と、ザルデインは溜息をつきながら答へた。

ヴオロシンは侮蔑したやうに天井を見ながら黙つてゐた。天井には庭の緑色の反射が音もなく動いてゐた。

——我々は爰でたゞ一寸一杯やつてゐるだけの話です。と、ザルデインは例の鷹揚らしい身振りをして、フテル躑や骨牌や來客を指示しながら續けた。

——さう………な………と、ヴオロシンの聲は不明瞭に長く響いた。ザルデインは其聲のうち

に、「君もさうなんだらう？」といふ意味が含まれてゐるやうに思つた。

——私はもう出掛けなければならんです。私は並木街ナギキマチの旅館ホテルに泊まつてゐます………またお目に懸れませう。と、ヴオロシンは立上りながら云つた。

從卒が丁度這入つて來た。そしてだらけた動作で規則通りの姿勢をとつた。

——大尉殿、令嬢がお出でになつてをります………。

ザルデインはギクリとした。

——なに？ と、彼は訊いたが、不器用ながらさそくに受けた。

——あゝ、さうか………わかつとる………と、そしておどくして室内を見廻したが、何となく不氣味でたまらなかつた。

——リドカまで來るとは！ 思ひもよらない！ と、彼は狼狽してさう思つた。

ヴオロシンの眼は好奇心に充ちた光を湛へたが、白い寛やかな衣服の下で、其軀全體が動いた。

——さう………では、いづれ又！ と、ニツコリしながら彼は云つた。君は、君は相變らずらしいね！………。

ザルデインは得意さうに又白ばつくれたやうに傍からニツコリした。

二人は部屋の外へ出た。ヴオロシンは白靴をキユウキユウ鳴らしながら、鋭い眼で仔細かろりに四周を見廻した。ザルデインは彼に伴れ立つて出たが、やがて立ち歸つた。

——諸君………續けよう………骨牌を續けよう………タナロヴ君、君は僕の代りに Banque を

引受けたまへ………僕はすぐ歸つて來る。と、彼はそゝくさ云つて、眼をバチ／＼やつた。

——ごーまーかーすーなツ………と、マリノヴスキイはへゞれけになつて唸つた。いかなる令嬢が來たか、我々はチャンと知つとるぞツ。すると、タナロヴが肩で彼を捉へて、卓子の傍へ座らせた。他の人々はザルデインを見向きもせず銘々の席へ着いた。サニンも同様に座つたが、其笑顔は眞顔に代つた。

彼はザルデインを待つてゐるのはリダに違ひないと推した。そして自分の美しい妹に對して、既に不幸な身の上となつた妹に對して、嫉妬と同情との漠然たる或る感情を覺えざるを得なかつた。

十七

ザルデインの寢臺の上へ身を斜にして、窮屈さうに座りながら、リダ・サニナは途方に暮れて布帛フナマキを揉苦茶にしてゐた。彼女の身に起つた激變には、ザルデインですら驚いたのである。かの傲慢な、美しい、丈夫さうな乙女の面影は、今どこへか消え失せて了つて、彼の前には、身を屈した、弱々しい、惱ましげな、憐れな女が一人座つてゐた。彼女の顔は蒼白く落窪んで、其黒い眼はおどく／＼震へてゐた。ザルデインが室内に這入つて來た時、其眼はチラリと男の顔を見上げたが、すぐ下を向いて了つた。ザルデインはリダが恐がつてゐるのに氣がついた。と、猛烈な腹立たしさがむら／＼と心の底から込上つて來た。彼は扉をガタリト閉めて、彼女の膝かたへ擦寄りさま、荒々しい聲で極めつけた。

へ填め込まれたやうな感じがした。この感じは彼を傷けた。同時に又彼を反抗させた。彼は斷乎として彼女は何事をも彼に要求する権利はないのだと絶叫したかつたであらう。が、さう絶叫する代りに、卑怯な恐怖心が彼れの心臓をどきどきさせて、かういふ場合には全く時宜を得ざる、自分ながら明らかに愚だといふ氣のする、思ひもよらぬ言葉が、彼れの唇を衝いて出た。

——あゝ、女よ、女よ……シエクスピアの云つたとほりだ……

リダはギョツとして彼を見つめた。と、無慈悲な鋭い光明が、忽ち彼女の心を照らしたのである。同時に彼女は取還しのつかぬ事をしてつたと思つた。いつまでも人に與へ得られる凡ゆる歡樂や凡ゆる美をば、彼女は自分には存在してゐない一人の男に與へてつたのである。花やかな彼女の生涯、彼女の清操、彼女の誇り、さういふ物をば彼女はすべて、陋しい卑怯な一箇の獸の足下に投じて了つたのである。そして其獸は與へられた快樂に對して彼女に感謝の意を表すどころではなく、却つて愚な薄暗い卑怯な行爲によつて彼女を汚したのである。絶望の極、手を擦つて歎きあげて、彼女は地に身を投げつけようとした。が、電光の間に、其絶望は復讐と憎惡の念に入替つた。

——貴兄は御自分の愚かな事がお分りにならないわねえ！ と彼女は齒を食ひしりながら、鋭い低い聲で云つた。

此ツケくとした言葉と其言葉に伴ふ意地悪さうな眼光とは、優雅な女らしい筈のリダにはいかにも適はしくなかつたので、ザルデインは思はずタヂくとなつた。が、その眼光の意味がス

ツカリ讀めなかつたので、彼は努めてそれを冗談にしてのけようとした。

——何といふ言方だ！ と、彼は眼を大きくして、肩を聳かしながら氣に觸つた様に云つた。

——妾は言方なんぞ擇んではゐられませんよ。と、リダは苦笑しげに答へて、手を擦つた。

——その悲劇はどうしたわけだね？ と、ザルデインは眉を擧めて云ひ返した。と、俄に沸騰するやうな心持になつて、彼の眼は無意識に情婦のポツチャリと丸々した腕や斜になつた肩の曲線をば見やつた。

リダの絶望した頼りなげな様子を見てとると、彼は自分の安全な事や又自分の方が一段立優つてゐる事などを感じた。恰も二人は衡の上へ載つてゐるやうなもので、一方が昇れば一方が降るのであつた。ザルデインは、何となく自分より勝れてゐると思つたゐた乙女が、又二人互に相抱く際ですら薄氣味悪く思はれた乙女が、今、自分の爲に、自分の意志のまゝに、憐れむべき賤しげな役を勤めてゐるのかと思ふと、それがたまらなく小氣味よかつた。彼の心は和らいだ。彼は優しくリダの垂れた手をとつて、ソツと自分の方へ牽きよせた。と、胸がどきどきして、息が窒まるやうな心持になつた。

——これ、さ、何も恐しい事なんぞありやしないよ。

——さう思へて？ と、リダは反語を弄して訊き返したが、この反語は幾分か氣力を恢復したので、彼女は異様な眼光をしながら、ジツと彼を見つめた。

——勿論さ。と、ザルデインは猥りがはしい熱烈な抱方をして緊めつけるやうにしながら云つ

た。その抱方の效力をば彼は心得てゐたのである。けれども、彼女は冷然として身動きもしなかつた。そして彼女の手は何の反應をも示さなかつた。

——おい、おい、……私の小猫は何だつて憤つてゐるんだらう？ と、彼は優しく叱るやうに呟いた。

——ほつといつて下さい……妾は……ほつといつて下さいッてば……。

リダは意地悪く突飛ばして彼の腕からすり脱けた。ザルデインは情慾の衝動が無効になつたので、具體的に腹が立つた。

——糞ッ！ と、彼は考へた……女どもと一緒にゐるがい……。

——全體どうしたんだ？ と、彼は憎々しく云つた。彼の顔には赤い斑點が浸出てゐた……。恰もこの間が突然自分の運命をは明瞭に示してもしたやうに、リダは忽ち両手で顔を蔽ひながら泣き崩された。彼女はまるで百姓女のやうに、手で顔を隠して、半身を前へ折つて、よゝとばかり歎き泣いて、泣いた。濡れた顔の上へ哀れに振りかゝる其長い髪の毛が、彼女を異様に醜くして見せた。ザルデインは全く困じはてた。彼はニツコリして見たが、若しやこの微笑が一層彼女を傷けはしないかと懼れた。で彼女の手を其顔から取除けようとしたが、リダは頑固に抵抗して止めどなく泣いた……。

——あゝ、情ない！ と、ザルデインは叫んだ。

彼は怒鳴りつけたくなつた。ムツと彼女を引摺んで、思ふさま毒づきたくなつた。

——何だつて喚くんだ？……さうさ、お前は私と一緒にゐたのさ……で、それから？

……不仕合せなんだ！ だが、けふにかきつて急に悲しくなつたのは、どういふわけだい？ お止めツたら！ と、彼は彼女の手を引寄せながら鋭い聲で叫んだ。

リダは濡れた顔や亂れた髪が激動しながらぶる／＼と顫へた。と、急に黙ると、彼女は顔から手を外して、子供のやうに怯へながら、下から上へジツと男を見やつた。萬一誰かゞ自分を打つたり蹴たりしはせぬかといふ狂氣じみた考が、ふと彼女の頭に浮んだのである……が、ザルデインは再び物柔らかな調子になつて、不確な猫撫聲で云つた。

——これさ、リドチカ、お止めよ……お前は自分で失策つたと思ふのだ……この爲體は、どうしたわけだよ？……そりや、なるほど、お前は大失策をしたさ。だが、それが爲に私達は非常に幸福だつたんぢやないか。私達はいつまでも忘れられやしない、あんな……。

リダ又歎きあげた。

——お止めツたら！ と、ザルデインは叫んだ。

彼は顫へる唇の上で髭を曳張りながら、室内を大股で歩いた。

四隣はシンと静まり返つてゐた。窓の外では灌木の細かな葉枝がゆさ／＼と動いた。恰も鳥が一羽その中へ棲つたかのやうに……ザルデインはまたむら／＼となつて、リダに近寄りざま、用心しい／＼彼女を抱緊めた。と、彼女はすぐ其抱擁から身を脱れたが、すりぬける際、思はず

曲げた臂で、したゝかに彼の顎を打った。彼の齒はガチ／＼と音を立てた。
 ——怪しからん！ と、ザルデインは其痛みに腹が立つて、又衝突した齒の不快な音に一層腹が立つて絶叫した。

リダは何も聴取らなかつたけれど、何となく滑稽な気がしたので、女性の残酷さを發揮して、
 ——なんて言方なんでせう？ と、彼の口真似をしながら云った。

——誰だつて辛抱が出来ん！ と、ザルデインは癩に觸つて云ひ返した。どうしたわけか、それさへ分つてありやアいゝのだが！

——貴兄にや分りませんよ！ と、リダは同じく皮肉に云った。
 靜になつた。

リダは執拗く彼を見まもつた。彼女の顔は熱してゐた。と、ザルデインが其眼光に出會つて、次第々々に灰色の薄衣にでも蔽はれてゆくやうに、眞蒼になりはじめたのは、丁度其時であつた。

——いゝわよ、黙つてるのねえ？ なぜ何にも仰しやらないの？ 仰しやいよ、慰めて頂戴よ……と、リダは鋭い聲で絶叫した。と、自分の聲が *Hysterique* ヒステリック な泣聲に變つてゐたので、彼女は自分ながらギョツとした。

——私は……と、ザルデインは心苦しうに口を開いたが、其下唇は顫へてゐた。
 ——さうよ、貴兄よ、外の人ぢやないわよ……貴兄よ、貴兄よ、……あゝ、情けない！

と、リダは忌はしげな絶望の涙をば眼に一杯溜めながら、殆ど泣きさうになつて叫んだ。

今まで二人の間に存在してゐた、優雅の、美の、溫柔の蓋布は、いつとなく裂けて、其蓋布に蔽はれてゐた狂暴な獸性が、ハッキリと姿を現はしたのである。

さまざまに錯雜つた考へが、電光の如き速力で、ザルデインの心中を通過した。最も強い一番最初の考へは、一刻も早くリダから身を脱れる事であつた。そして此事件の落着をつける爲に、金を與へて、説伏せて、彼女に墮胎させる事であつた。彼はそれが一番いゝ方法だとは思つたけれども、道に口へ出しては云はなかつた。

——全く思ひもよらなかつた。と、彼は口の中で云つた。

——思ひもよらない？ と、リダは残忍な聲で絶叫した。どうして貴兄には思ひもよらないであられるのでせう？

——リダ、私は何でもない……と、ザルデインは云はうとした事を自分で懼れながら、又どうあつても云はなければならぬと感じながら、さう口籠つた。

けれども、其言葉を待たず、リダには彼の心が讀めた。絶望と恐怖とが彼女の美貌を痙攣させた。彼女はグタリと手を落して、寢臺の上へ腰かけた。

——妾はどうしたらいいんでせう？ と、彼女は獨言を云ふやうに、妙に思ひつめた調子で云つた。身を投げるの？

——これ、これ……なぜそんな事を云ふんだ？……

——でも、ギクトル・セルゲイエビツチさん！ と、リダはジツと彼れの眼を見つめながら云

つた。私が身を投げたつて、貴兄は多分不足にも思はないでせうよ。
彼女の眼のうちや又其可愛い口の痙攣のうちには、物哀れな、悲しげな何物か、あつたので、ザルデインは思はず眼を外向けた。

リダは立上つた。彼女が彼を唯一人の救世主と仰いで、永遠に彼と共棲の出来るものと思つてゐた考は、今や彼女には信すべからざる忌はしいものとなつた。彼女は手を振つて、彼に侮蔑の意を示したいと思つた。彼女の受けた屈辱に對して、彼に復讐をしたいと思つた。が同時に自分が若し物を云へば、きつと聲を立て、泣出すに違ひないから、一層侮蔑を受ける事になるであらうなどといふ心持もした。と、かの美しい強壯なリダの名残なる——最後の誇りが彼女をしてジツと涙を恠へさせた。彼女は自分自身にも又ザルデインにも思懸ない如何にも侮蔑した言方でキツパリと云つた。

——けだもの！

と、彼女は入口の方へ身を躍らして行つたが、^{かきかぬ}蹶へ着物を引懸けたので、袖のレースがビリ、と裂けた。

全身の血がサツとザルデインの頭へ上つた。彼女が若し彼に向つて「賤しい奴」とか「卑怯者」とか罵つたものならば、彼はその侮辱をば平然と恠へたであらう。けれども、「けだもの」といふ言葉はいかにも醜であつた。彼が平生自ら拵上げてゐた自分の姿をば亂離骨灰に打壞して餘りあつた。で、彼はたゞ呆然としてそのまゝ、そこへ立慄んで了つた。そして眼の中の白いところまで

眞紅にした。が、彼はニヤ／＼して、肩を聳かしながら、襯着の釦を掛けたり外したりしてゐた。彼は正直のところ我身の上をば不幸に感じたのである。

と、同時に又、身軽になつたといふ感じが、だん／＼彼の心中にハッキリして來た。これで一切落着がついたわけである。

が、リダのやうな類の若い女は、もう二度とは手に入れるわけにもゆかないであらう、と、彼は又未練にも考へた。あれほど美しいあれほど好ましい情婦をば、ムザ／＼失つて了つたのかと思ふと、彼はたまらなく腹が立つた。けれども、其不満足はやがて侮蔑したやうな身振のうちに消えた。

——なんだ、下らない！ 女なんぞ幾干でもある！

と、彼は襯衣をチャンと整して、尙唇を顫はしながら、巻煙草へ火を點けた。そこで、又氣樂さうな表情をば面上へ取戻して、來客の方へ立歸つた。

十八

酔拂つたマリノヴスキを除いては、賭博に身を入れてゐる者は一人もなかつた。

ザルデインの許へ來た女は誰であるか、人々は其事にのみ好奇心を惹かれてゐた。それはリダ・サニナに違ひないと推した者たちは、心竊に土官を羨んだ。そして熱烈な彼等の想像力はザルデインの腕に靠れた彼女の裸體姿を心中に描いた。

サニンはやがて立上つて行つた。

——僕はもうやめる、さよなら！

——待てよ、君、どこへゆくのだ？と、イヴノヅは彼に訊ねた。

——そこで何をやつてるか見にゆくのか。と、サニンは閉鎖たぎられた扉へ指先を觸れながら答へた。

——馬鹿するなよ！ まア、坐つて飲め、と、イヴノヅが云つた。

——貴様こそ馬鹿だ！ と、サニンは答へて、平然として出て行つた。

蕁麻いらいの厚い叢茂が勝手に伸びてゐる狭い露地の裡で、サニンはザルデインの部屋の窓があるべき場所を考へて、用心深く塀へ近寄り、難なくそれを跳越えた。塀の上へ登つた時、彼は何の爲にそんなところへ攀上つたものか殆ど忘れて了つた。それほど庭の緑草の眺めや、衣服を徹して肌まで浸込む爽かな軟風の微觸が、彼には快かつたのである。同様に筋肉の緊張が長閑な歡喜を彼に興へた。

向側へ跳下りると、彼は攀上る時に摩剝いた箇所をば蕁麻の中で引きこすつて、それから庭を通りぬけて行つた。

と。丁度、リダが、

——貴兄にや分りませんよ！……と、云つてゐる際に、彼は窓の下へ達した。

妹の異様な聲によつて、何の話をしてゐるのか、彼には推察が出来た。彼は肩をビタリと壁へ

靠せて、庭の綠叢をまじく眺めながら、内から響いて来る、互に入亂れた、悲痛な、昂奮した聲をば、面白さうに聴いた。彼はかほどまでに屈辱を受けた美しいリダをば不惑に思つた。そして嬌治な其面影と「懷妊」などといふ、野鄙な、獸的な言葉とは、いかにも一致し難いやうに思つた。が、其會話よりは、室内で取換はず厭な言葉と庭の長閑な静けさとの間に生じた、奇怪な没趣味の對照が、彼には面白く感ぜられたのである。

白い蝶が一つ、日光を浴びて、たえず上つたり下つたりしながら、草の上をヒラ／＼と飛んでゐた。サニンは家の中の聲に聽耳を立てると同様の注意力を拂ひつゝ、其やさしげな蝶を見やつた。

恰も其時、

——けだもの！……と、リダが叫んだ。

サニンは心地よげに笑つた。そこで、もう人に見られるのも一向頓着せず、壁から離れて、彼は悠々と庭を横ぎつた。

と、途を突截つてスルリと走りすぎる蜥蜴が彼の眼についた。サニンは丈の高い草原を這つてゆく其なよやかな綠色の小さな軀をばいつまでも／＼見まもつてゐた。

十九

出は出たが、リダは家の方へはゆかなかつた。彼女は反對の方向をとつた。

往來には人通りがなかつた。空氣は燃ゆるやうであつた。恰も誇つた太陽の暑熱に征服せられたもの、やうに、壁や塀の足の下へ短い影が横たはつてゐた。

リダはたゞ習慣的に日傘で身を隠した。そして寒いのか暑いのか、又明るいのか暗いのか、一向氣がつかなくつた。彼女は埃まみれた草に取巻かれた塀に沿うて大忙ぎで歩いた。胸の上へ頭を傾けて、彼女はキラ／＼する乾いた眼で器械的に靴の先ばかりを見つめた。折々、暑さに咽んだ通行人に出會つたが、それは數へるほどもなかつた。そして眞夏の午後の壓付けるやうな静けさがこの町を引縮んでゐた。

小さな白犬が一疋、ひよいと出て来て、リダの裾を嗅いだだが、やがて彼女に従つて、後になつたり前になつたりした。彼は恰もこれから御一緒に参りませうと云ひたげに其小さな尾を掉つてゐた。唯ある往來の曲角で、リダは滑稽に肥つた腕白小僧に出會つた。彼は肌衣シヤツと股引ツボだけ着てゐたが、其小さな股引ツボの上端が後ろの方へ出てゐた。小僧は汚らしい頬を張らして、荊花きんぎょの莢をガリ／＼と噛んでゐた。

リダは小犬に領いて見せたり、小僧にニコリして見せたりしたが、彼女の心は結ばれてゐたのである。暗黒な或力が全宇宙から彼女を引離して、太陽を横ぎり、緑を横ぎり、生の善びを横ぎり、眞黒な深淵の方へ彼女を導いて行つたが、其深淵の近づく事は彼女も薄氣味悪く感じてゐた。

見知り越しの士官が一人通りすぎた。彼はリダを見つけると、馬の歩みを駐めた。褐色の馬は

汗に塗れた其鬣をば日にキラ／＼と輝かしてゐた。

——リダ・ペトロヴナさん、と、彼は元氣な朗らかな聲で叫んだ。このお暑いのにどこへお出なさる？

リダは茫然と其小さな軍帽を見やつた。其軍帽は半分白い濡れた額の上へ無造作に載つてゐた。彼女は黙つてたゞニコリしたが、それは例の *Coguetterie* であつた。

と、同時に、彼女は何と答へていゝか自分ながらよくわからぬので、

——本當に私はどこへゆくんだらう？ と自分の心へ訊いて見た。

彼女はもうザルデインの事は怒つても考へてもゐなかつた。彼女は何故かわからずにザルデインの許へ行つたものであつた。彼女には何となく、彼なしには生きてゐられないやうな、又自分一人きりでは自分の苦悶に耐へられないやうな氣がしたのであつた。が、今となつて見ると、過去は死んだものであつて彼女に屬してゐるものは、たゞ現在ばかりであつた。彼女は自分一人きりで慰安の道を求めなければならなかつたのである。

彼女の頭は不思議にはツきりして、明瞭に又熱烈に働いた。最も怖るべき事は、かの美しい氣位の高いリダが消失せて、其代りに凡ての人に侮蔑さるゝ憐れな少女が残る一事であつた。彼女は其誇と其美とを維持せずにはゐられなかつた。でそれが爲には泥土に汚さるゝ憂のないやうな或場所へ立退かなければならなかつたのである。

さて、さう詮じつめて來ると、彼女の周圍は忽ち空虚になつて了つた。太陽も生も人間も彼女

にはもう存在しなくなつた——彼女は唯一人となつた——一人ぼつちとなつた——そして身を遁れるところはどこにもないやうな——死なねば——身を投げなければならぬやうな気がしたのである。

さういふ事が明確に心中に浮ぶと、恰も全宇宙から彼女を孤立にする爲に、一大石壁が彼女の四周へ湧出したやうな感じがした。

が、同時に、彼女はもう、或物が自分の身に生じて来る事について、恐しくも忌はしくも感じなくなつて了つた。それはまだ力のない微々たる物ではあつたが、而も生涯を破壊した或物であつた。彼女が懐妊したと気がついて以來、たえず其存在を感じてゐた或物であつた。

彼女の周囲には、死が輕侮さるゝより外には何も無い、沈痛な空虚が生じたのである。

——實際は單純な事なんですわ……何も要求する事なんぞありやしない！と、彼女は何も見ずに周囲を見廻しながら考へた。

彼女は足を速めた。殆ど駈出すやうにして歩いたのだが、廣やかな裳裾が邪魔になつて、彼女は一向先へ進まぬやうな心持がした。

——あの家を越さなければならぬ——それからもう一軒の緑い戸のある家も——それから又廣々した場所も……川も、——橋も、——又その邊になければならぬ筈のものも……リダの眼には一つも映つて來なかつた。そしてたゞ霧に包まれた斑點ばかりが見えた。恐らく一切の物が霧の中に没してゐたものであらう。

この精神状態は彼女が橋の上へ昇つた瞬間まで續いた。と、欄干へ靠れて、其下を流るゝ朦朧たる緑色の水を見た時に彼女の決心は俄に消滅した。そして恐怖の念とそれからもつと生きたいといふ欲望とが、犇々と彼女の軀中に充ち溢れて來た。

今、周囲の一切は彼女には再び生還つたやうに見えた。彼女は聲を——雀の轉る聲をきいた。彼女は日の光を見た草の中なる白菊を見た。それからリダを爾來正統の主人ときめたやうな小さな白犬をも見た。小犬は前肢を折疊んで彼女の面前に座つてゐたが、砂の上に滑稽な埃及文字を描きながら、其小さな尾を螺旋形に打掉つてゐた。

リダはジツと小犬を見つめたが、忽ち犇と抱緊めてやりたくなつた。と、大きな涙がポロ／＼と彼女の眼から零れ出た。こんなに美しい、こんなに愛すべき彼女の生活が、ムザ／＼と消失せて了ふのかと思ふと、彼女はたまらなく悲しくなつたのである。するとクラ／＼瞑眩がして來たので思はず欄干の端へ獅噛みついた。と、手套が一つ、彼女の手首からすりぬけて、水中へ落ちた。彼女はゾツとして其行先を見送つた。

手套はクル／＼空中を廻轉しながら、睡くなるほど滑らかな水面へ落ちて行つた。と、其周囲に波紋がいくつも／＼廣がつたが、それが消失せる際、リダは自分の眞黄ろな手套が褐芭に濡れて、徐ろに海のやうな深いところへ沈んでゆく姿を見た。手套は恰も腕き苦しむやうに、一度二度身を返して、靜かに波紋を描きながら、水底へ沈んだ。リダは眼を据ゑて、音もなく深淵の中へ消失せる前に、尙一度二度姿を現した手套を凝視した……水は再び滑らかな睡たくなる薄黒

い身動きもせぬ姿に還つた……。

——お嬢様、どう遊ばしたのです？ と、女の聲が耳元にきこえた。

リダはギョツとして顧返ると、彼女の前には鼻の低い肥つた女が一人、氣の毒さうに又もの珍しさうに、まじく〜と彼女を眺めてゐた。

で、其女の同情はたゞ手套を失つた事ばかりに傾けられたのだが、リダには此肥つた女が自分の身の上をば、氣の毒に思つてくれたやうな氣がしたのである。そこで彼女は自分の生涯をば此女に打明けたくなつた。そして慰めてもらひたくなつた。けれども、自分ながら此無考な事に驚いて、リダはそれを思ひとまつたのであつた。彼女は赧くなつて、ぶる〜と慄へて、口の内で云つた。

——何でもないの……と、彼女は不揃な忙ぎ足でよろ〜と橋の上を立去つた。

——爰はいけない……人にわかるわ……と、彼女は考へたが、自分の頭がわれながら異様に空虚なやうに思はれた。

彼女は左の方へ川岸を指して行つた。で、川と唯ある庭の生垣の間に通ずる小徑を辿つた。其小徑は木苺や蓴麻や菊や澁い香のするニガヨモギなんどの間を分けて、通行人が自然とつけた路であつた。

その邊は恰も村のお寺のやうにシンとして長閑なものであつた。細長い葉の柳は夢見るやうに水面へ身を傾けてゐた。日光はさまざまな色を投げて、険しい岸をば點々と染めてゐた。又丈の

高い車前（おぼろ）が蓴麻の中に突立つてゐた。と、刺のある薊が乙女の裾を飾つたレースに引懸つた。灌木のやうに巨きな、葉の縮まつた草が、細かな眞白な花粉をば、彼女の軀へパツとふりかけた。

で、この先歩武を續けるには、リダは必死になつて、生きたいといふ、抵抗すべからざる内部の力を征服しなければならなかつた。が、其力は云ふ事をきかなかつた……。

——どうしても……どうしても……と、リダは心の中で繰返した。彼女の足は恰も一步毎にいろんな障碍物を蹂躪つてゆかなければならなかつたやうに無理に彼女を曳擦つてだん〜橋から離れ、リダが無意識に自分の終極と定めたらしい場所の方へ向いて行つた。

で、其場所へ達して、細い入組んだ川柳の枝越しに、懸崖をめぐる急流の、黒い、冷たい水を眺めた時、彼女は、自分の五體がいかにかに生を欲してゐるか、死がいかにかに恐るべきものであるか、と云ふ事を理解した。が、どうも此上生きてゐられないので、彼女はどうしても死なうと思つた。そこで、見向きもせず、手套と日傘とを草の上へ投げすて、小徑を外れると、いきなり荆棘の中へ分け入つた。

と、無量の思想が、無量の感慨が、こも〜彼女の心頭に迫つた。忽ち子供の時の信仰が、さまざまな新しい觀念に入替へられて、長い間ねむつてゐた信仰が、心の底で目をさました。彼女は幾度も神を畏る、純な祈禱を繰返した。

——神様、妾を助けたまへ……神様、妾を救ひたまへ……。

このころ練習したピアノの一曲が、どこかさう遠くないところから響いて來た。彼女はそれを

微吟した……と、ザルデインの事が憶ひ出された。が、それはホンの束の間にすぎなかつた……續いて、懐かしい可憐いとい母親の顔が見えた。この顔の追憶は更殊に彼女を水中へ追立てたものではあつたが……で、この時ほど彼女はこのリダを、自分を愛してゐるやうに見えた母親も其他の人々も、實は慾情や缺點までも引括めた本當の自分を愛してくれただけでなく、彼等がただ自分の姿を見たい爲ばかりで愛してゐたのだ、といふ事をば、これほど充分に理解した事はなかつた。そして彼女が斯く彼等の所謂唯一の正當な道から離れた今となると、その人々は就中彼女の母は、以前彼女を溺るゝほどに愛した其程度よりは、一層峻烈に彼女を苛責するのであつた。

と、一切の物が熱病の幻影のやうに錯亂した、恐怖、生きたいといふ慾求、避け難いといふ觀念、信仰がないといふ感情、何もかも終りだといふ確認、それにも拘らず、臆氣な或物に對する希望、絶望、自分の死ぬ場所は爰だといふ苦しい自覺……それから生垣を躍り越えて、忙て、彼女の方へ飛んで来る、彼女の兄によく似た男の姿……さういふものゝ一切が、昏迷した彼女の腦中で、輝いたり、現れたり、混亂したりした。

——それ以上の馬鹿な事をばお前は工夫する事が出来なかつたのだ！ と、息を勢ませたサニンの聲が叫んだ。

人間の腦髓では解釋のつかぬ思想と状態との連鎖によつて、リダは恰もザルデインの庭が行詰つたところへ來てゐたのであつた。それは彼女が、樹木の黑影で鮮明すぎるほどの月光を隱蔽された、ギゴチない不快な形に壊れかゝつた藪垣の上で、このごろ男に身を委した場所であつた。

サニンは遠くから彼女を見つけた。そして彼女が何をするつもりか推察した。彼れの最初の行動は彼女の爲すまゝにさせて置かうとする事であつた。が、彼女の激動した有様が彼れの心の憐憫の情を喚起したので、彼は腰掛や荆棘を飛越えんと、幕地にリダの方へ駆出したのである。兄の聲は彼女に非常な印象を與へた。この道德上の格闘によつて極度に緊張して彼女の神経は忽ち弛んだ。彼女はクラ／＼となつた。彼女の周囲の一切の物は、グル／＼と回轉しはじめて、彼女は果して水中にあるのか、岸の上にあるのか、それさへもう分らなくなつた。サニンは丁度川縁のところまで彼女が捕捉へる間に合つた。と、自分の膂力と其敏捷さとが大に彼を喜ばしたのである。

——こんなものだ！ と、彼は思つた。

彼はリダを籬の方へ連れてゆき、その上へ座らせ、さて不安な眼光をしながら周囲を見廻した。

——さア、此奴をどうしてくれよう？ と、彼は自分の心へ訊いて見た。

リダは我に還つた。彼女は蒼白く憔悴してゐた。と、苦がい涙がポロ／＼と其眼から溢れ出た。

——神様！ 神様！ と、彼女は子供のやうに引泣けた。

——お前は馬鹿だね！ と、サニンは優しく慰めた。

リダは其聲はきかなかつたけれど、サニンが動いたので、一層烈しく引泣げながら、ブル／＼身を慄かして、犛と兄の腕に縋りついた。

——妾は何をしてるんだらう！ と、彼女はギョツとして考へた。泣いてはならない。串戯に

してのけなけりやならない……でなければ、兄さんは何もかも悟つて了ふ。

——ねえ、何がそんなに辛いんだよ。と、サニンは彼女の肩を撫でてやりながら云つたが、こんな優しく妹に物云はれるのが、彼には楽しかつたのである。

リダは帽子の下から子供のやうにおづ／＼兄を見上げたが、不意と泣きやめた。

——私は何もかも知つてゐる……と、サニンは言葉を續けた。私はずつと前からこの経緯は残らず知つてゐたのさ……。

彼女とザルデインとの關係は、大抵の人は察してゐるだらうとは、リダも承知はしてゐたのだが、兄のこの言葉には少なからず脅やかされた。恰もサニンが彼女の顔をビシヤリと搏ちさうな氣がしたので、彼女は乾いた眼を大きく見開いて、ジツと兄を見つめながら、彼から身を引離した。と、狩に追ひつめられた毛物のやうな恐怖が彼女の面上に現れた。

——これさ、どうしたんだよ？ と、サニンはニツコリした。お前は何だか私に裾の上を踏まれたやうな鹽梅しきだね。と、指の下でブル／＼震へる。なよやかに丸々した彼女の肩をば、やんわりと抱へながら、再び藪垣の上へ座らした。

リダは柔順に元の場所へ戻つた。

——本當にさ、何がそんなに悲しいんだい？ と、サニンは續けた。私が何もかも知つてるからかい？……すると、お前はザルデインに身を委した事をば、白状しかねるほど、そんなに悪い行ひだと思つてゐたのかい？……それがどうも私にやわからない……お前とは結婚する氣

もないザルデインなんぢやないか……仕合はせにもね……お前も今はわかつてゐるさ……身を委す前だつてわかつてゐたのさ……奴はい、男で、惚れるにや持つて來いだが、下等な陋しい人間にすぎないのだ。といふ事はね……奴の戀はお前を幸福にする氣遣ひはなかつたのさ……お前だつて、たゞ奴がい、男だから、それだけの事で、奴を手に入れる氣になつたのさ。そしてお前は奴の美しいところを思ひ入れ弄んでやつたわけさ。私はさう思ふよ。

——弄んだのはあの人だわ……妾ぢやない事よ……あゝ、神様！

——今、お前は懐妊になつてるからね……。

リダは目を閉ぢて、肩の間へ深く首を引込めた。

——無論、そりや厭な事さ。と、サニンはもの柔らかな低い聲で續けた。第一ね、子供を産むといふのが、不潔な愚な、忌はしい事なんだが、殊に厭なのは……世間が容赦なくお前を苛めるに違ひない一事さ……お前が、即ちリドチカが、私の可憐なリダが、誰にも悪い事なんぞした覺はないのにねえ！——と、サニンは可愛くてたまらなくなつたので、一寸口を噤んだ。で、若しお前が一打も子供を産んだとしても、それが爲に苦しむのは、お前自身の外には誰もありやしないだらう……。

サニンは押黙つた。彼は物思はしげに髻を噛みながら、胸の上で兩腕を組んだ。

——私はお前がしなけりやならん事を云つてはあげられるけれどもね、私の意見に従ふには、お前はあんまり弱いよ、又あんまり愚かだよ……お前にはそれに必要な膽力がないだらう……

……が死なうといふのは愚な骨頂だよ……御覽よ、太陽は輝いてゐるぢやないか、水は靜に流れてゐるぢやないか……まア、考へて御覽な。お前が死んだ後で、世間の人達はお前の懐妊になつてゐた事をばすツかり知つて了ふだらう。ねえ、さうすれば、お前は何を苦しんでゐるのだ！……お前の死にたいと思ふのは、懐妊になつてゐる爲ぢやないのだ。人々の非難攻撃が恐いからなのだ。お前の不幸の怖い部分は、すべて不幸そのもの、中にあるのぢやないさ。お前がそいつをお前自身と世間との間へ置くからだよ……實際上、お前の生活には、何等の變化もないのだから……又、お前はお前を知らない人々を恐がつてゐるのぢやない。お前が知つてゐる人々にきまつてゐる……お前が自分きめに親愛だとしてゐる人々にきまつてゐる……そいつ等がお前の失策をば大目に見てはくれまいと思へばこそ、お前は恐がるのだ……奴等は、お前が婚姻の寢臺で身を委さず、森の中や草の上で身を委したので、それを恐しい事のやうに考へてゐるのさ……若し奴等がどうしてもお前の罪を罰する考なら、何だつてお前を愛するのさ？ 奴等がさ？……又、若し奴等がそんなにお前を愛するのなら、何の爲にお前を氣にするのか？……奴等は愚で、残忍で、意地悪だよ。そんな愚な、残忍な、意地悪な奴等の爲に、何だつてお前は苦しむんだい？ 何だつて死なうと思ふんだい？……

リダは彼れの方へ問はまほしげな大きな眼を上げた。と、サニンは其眼光のうちに或理解の閃きを讀んだ。

——では、どうしたらいいの？ ねえ、どうしたらよ？と、彼女は心配さうに訊いた。

——お前にとつては、逃路が二つある。一つは其子供からお前が身を脱れる事だね。其子供は誰も欲しいとは思はないのだ。又其子供が生まれたところで、お前に苦痛を與へるより外には、世の中にとつて何の利益をも齎しはしないのだ……

リダの眼には残忍な恐怖の色が現れた。サニンはキツパリと云つた。

——生の喜びや死の怖しさを理解する状態にある一箇の生物を殺すのは甚だ殘虐な事だけれども、一箇の胎芽、即ち無感覺な肉と血の小球を絶滅するのは……

名狀し難い感情がリダを動かした。それは第一に慄へきれぬほどの羞耻であつた。恰も悉く衣服を剥ぎとられて、その肉體の最も柔かな一部をば、野蠻な指先で探られたやうな心持がするほどの羞耻であつた。彼女は恐しくて兄を見る氣になれなかつた。若し眼を見交はしたら、恐らく二人とも耻しくて死ぬやうな思ひをするであらう、と思つたけれどもサニンの灰色の眼は朗らかに又物靜かに輝いてゐた。恰も單純な平凡な言葉を發したにすぎぬもの、やうに彼の聲音は少しも震へてはゐなかつた。と、其言葉の權威に壓せられて、羞耻の念は消失せて了つた。リダは今きいた言葉がいかにも眞理であると感じた。そして其言葉を心の中に繰返して見たが、もう恐しくも何ともなかつた。そこで彼女は自分ながら度胸が座つた事を自覺したがそれでも絶望したやうな様子をして、顚顚を抑へた。と、その上衣の軽らかな袖が、驚いた鳥の翼のやうに動いた。

——妾にや出來ないわ……妾にや出來ないわ……と、彼女は杜斷れ〜云つた……そりやそれに違ひないでせうよ……だけど、妾にや出來ないわ……恐いわ……

——さア、出来なけりや……其時は……と、サニンは彼女の前へ膝を突いて、其顔からそろりと手を引放しながら……其時は、我々は出来るだけそれを祕す工夫をするのだね……私
 はザルデインをこの町から立去らなけりやならぬやうにしてやるさ。そしてお前はノギコヴと結
 婚するのだ。結婚して幸福になるのだ……私にやわかつてるよお前が若しあの美しい士官の種
 馬の奴と知らなかつたら、お前はキツとノギコヴを愛したに違ひないといふ事はね……
 ノヴコヴの名をきくと、リダは心の中に當惑した一種の温情を感じた。ザルデインは彼女を不
 幸にしたけれども、ノギコヴならさうはしなかつたであらうといふ氣がしたので、さう思ふと同
 時に自分の失策も大した事ではなく、たゞ自分次第でそれを取返す事は出来るのだ、と彼女には
 思はれたのである……彼女は立上る事が……歩く事が……爛々たる日光の下を花々しく、
 彼女の前へ展開する人生に向つて、微笑む事が出来るのだ。彼女はもつと生きて……前よりは
 もつと深く……もつと清く愛する事が出来るのだ。ところが失策つたといふ自覺がすぐ又心へ
 歸つて来て、そんな事はもう出来ない、自分はもう汚れた身だ、價打のない軀だ、とばかり考へ
 られるのであつた……

と、臍氣に知つてゐるだけで、口へは嘗て出した事のない、非常に野卑な或言葉が、彼女の記
 憶のうちへ浮び上つた。彼女はその言葉をば、恰もビシヤリと頬を打たれでもした時に、ギョツ
 となるやうな、それほど心苦しい或種の歡樂に適用したのである。

——神様！ 妾はどうしてもそんな……者なのでせうか？……さうだわ、さうだわ、妾は

そんな……そんな……者なんだわ……

——貴兄は何を仰しやつて？ と、彼女は兄に私語いたが、自分の朗らかな美しい聲が自分な
 がら耻しかつた。

——何だつたらう？……と、サニンはその眞白な頸の上の、キラ／＼と日光に輝いて靡く、
 美しい髪の毛をば、まじ／＼と眺めながら訊返した。

一種の恐怖が不意と彼の心に浸徹つた。若しも彼が彼女を説き伏せる事が出来なかつたらどう
 であらうか？ 凡ゆる幸福をばいつまでも人に與へる事の出来る、この若い、美しい女は、わけ
 もなく無意義な空虚のうちへ消え失せて了ふであらう。

リダは途方に暮れて黙つてゐた。彼女は努めて生きたいといふ希望を隠さうとした。その希望
 は彼女の意志に反して、打顛ふ五體の爲に唆かされて生じたものである……もう何もかも
 過去つて了つた後で、生きる事ばかりでなく生を欲するなどといふ事は、いかにも耻を知らぬや
 うに、彼女には思はれた。けれども健康な、強壯な、日光に浸染した彼女の肉體は、さういふ恐
 るしい考をば、恰も飲みたくない毒藥のやうに、彼女の心から退けて了つたのである……

——なぜ黙つてゐるんだい？ と、サニスが訊いた。

——そんな事は出来ないわ……卑劣ですもの……妾は……

——さういふ下らん言葉はやめてもらひたいよ……と、サニンは辛抱しきれずに答へた。
 リダは祕密の願ひに充ちた、美しい涙の目を上げて、もう一度兄を視た。サニンは一寸口を噤

んだが、細い木の枝を一本取つて、それを齒の間でボキリと折り、やがて向ふへ投げすてた。

——卑劣かい……卑劣かい……と、彼は繰返した。お前は私の云つた言葉に驚かされたんだ……なぜといふとね……お前も私もかゝる問題に對して最後の決答を與へる事などは出来ないのだ……よし答へて見たところが、それは何の答にもなつてゐなからうさ……罪惡かい？ 罪惡とは何だ？……母親の生命に危険があるやうな分娩の際には、既に生きて、泣出しさうになつてゐる子供の頭をば、寸断したり、四分したり、或は鐵鉗で壓潰したりする事は罪惡ぢやないさ。不幸なる急務ネセシテだよ……けれども、無自覺な生理學上の進程を停止したり、まだ存在してゐない或物を滅却したり、化學的の或反應を起させたりする事は、罪惡だの、怖い事だのと呼ばれてゐる……ところがね、その怖い事を遂行するのは、母親の生命に關するからだよ。その生涯や、その幸福に關するよりはね……なぜそんな事をしなけりやならんのか？ それは誰も知らないのだ。けれども人は皆それを許してゐるよ。

サニンはニコリと笑つた。「あゝ、人間！ 人間！……彼等は規則や幻影や蜃氣樓を創造する。そしてたゞそれが爲にのみ苦悶してゐるのだ……然るに彼等は絶叫してゐる。人間は立派なものだ……偉大なものだ……尊嚴なものだ人間は王様だ！ 宇宙の主宰者だ！ そして一向主宰する機會を持たぬ王様なのだ！ 自分自身の影の前で、苦しんだり顫へたりしてゐる王様なのだ！」

——が、そんな事はどうでもいゝのだ。お前は卑劣だと云つたね……私は知らない……多

分さうだらう……がね、若し私かノギコヴにお前の失策を話したとしたら、奴は手酷しい打撃を蒙るにきまつてゐるさ……恐らく自殺するかも知らない……それでも奴はお前を愛さずには置きやしない……そして失策は自分の方にあるのだと思ふだらう。若し奴が實際に恰憫な人間だつたらね、お前が他人と寢たぐらゐな……野卑な言葉は許してくれ……ぐらゐな事は眼中に置かないだらうよ。お前の肉體もお前の精神も一向それが爲に悪くなる様な事はなかつたものね……いはゞさ、奴は都合よくも或後家さんと結婚したつて差支はないのだよ。して見りや、奴の名前をお前に與ふる事に就ては妨害になる事實なんぞはありやしないのさ。たゞ奴の頭の中はすつたもんだするだらうがね……ところでお前自身だ……若しね、生涯にたつた一度かきまつたものだらう……そいつは厭なこつた。不快なこつた。情ないこつた。ところが、それは本當ぢやないのだ。戀は幾度だつて同じやうに出来るものだよ。そして、いつだつて楽しいものだ。幸福なものだ……お前が若しノギコヴを愛する事が出来れば、萬事都合よくゆくさ……若し出来なけりや、ねえ、リドチカ、私と一緒にい出でよ。人間はどこへ行つたつて暮らされる。

リダは溜息をついた。彼女の心は一種の壓迫を感じたので、彼女は努めてそれを拂ひのけようとした。

——多分……きつと……何でもかんでもよくなるだらう……ノギコヴさんは……温良

しいわ……俊れた方だわ……そして……好男子だわ……さうぢやないかしら？……さうだわ……いや……妾にやわからない……

——ねえ、お前が身を投げたら、何の役に立つだらう？……お前が死んだところで、善い事や悪い事が殖えも減りもしないだらう……お前の軀が脹れて形が崩れて、泥の中に轉がりまはるだけさ……それから人々が曳上げて埋めるだけさ……それだけさ！

リダの眼の前には緑が、つた色の脅かすやうな水底が揺めいてゐた。彼女はネバ／＼する絲條や蛇のやうな曲線や胸の悪くなる泡沫などが自づと渦を巻く有様を見た……と、ゾツと總毛立つた。

——いや、いや、そんな事は決してしまい……不名譽を承へてる方がよッほどましだわ……ノゴゴザさん……思ひどほりにゆくかしら……ゆきさうもない……と、彼女は眞蒼になつて考へた。

——これさ、何だつてそんなにビク／＼懼がつてゐるんだい？ と、笑ひながらサニンが云つた。

リダは泣きながらニッコリした。と、其微笑が自分ながら未だ笑へるといふ自覺を生じたので、彼女は嬉しくなつた。

——どんな事が起つたつて、妾は生きるのだわ。と彼女は熱烈に又殆ど勝誇るやうに考へた。

——さア、そこだて！ と、嬉しさうにヒョイと跳上りながら、サニンが云つた。死ぬといふ

考ぐらゐる人に厭な心持をさせるものはないよ……ところで、若しさうした重荷がお前の肩で脊負ひきれるものだとしたらね……若しお前がライフといふものを感じたり認めたりする氣があるものとしたらね……宜しく、生きるさ！ 生きるさ！ わかつたかね？ わかつたら、そのお前の可愛い手をお貸し！ リダは手を差伸べた。と、そのおづ／＼した女らしい舉動のうちに、いかにも初々しい感謝の情が溢れてゐた。

——さうだ……お前はなんて綺麗な可愛い手を持つてゐるんだらう……

リダはニッコリしながら黙つてゐた。

が、彼女の心を納得させたのは、兄の言葉ばかりではなかつた。彼女の心には、執拗な、力強い、潑刺たる生が充ち實ちてゐた。彼女の経過した危機は、たゞ彼女の生氣をして恰も絃のやうに緊張せしめたに過ぎなかつた。で、もう一ト震動したら最後、絃は恐らく中斷したのであらう。ところが、その震動は起らずに、彼女の全心靈は確乎たる又騒然たる生の慾求に顛へたのである。リダはたゞ恍惚として、五體の全氣孔を通して呼吸し來る、かの一大歡喜をば、目に見たり耳に聴いたりした。と、その歡喜は八方から、日光の中に、綠草の中に、輝く水の中に、兄の物靜かな顔の上に、それから自分自身の魂の中に、その歌を唱つたのである。彼女は生れてはじめて物を見たり音を聴いたりするやうな思ひをした。

「生きるのだ？」と、耳も聳れるやうな、歡びに充ちた聲が、彼女の心中に鳴り響いた。

——さう……それで宜い。と、サニンが云つた。辛い目に會つた時にはね、いつでも私に頼

けさ……と、彼は返事に困つて、逡巡ひながら答へた。
 サニンは一寸彼を見やつた。で、旅行鞆の方へ眼を外らしたが、やがて又ジツと彼を見まもつた。と、相好を崩してカラ／＼笑ひ出した。ノギコヅは物をも云はず、小塚の一堆と長靴とを、機械的に荷造りしてゐた。彼は自分の悲しみに面と向つて、孤獨である事が苦しくてたまらぬのであつた。

——そんな荷造りの仕方なら、塚も靴も無くなつて了ふだらう。と、サニンは注意した。
 ——さうかね？。と、ジロリとサニンを見ながら、ノギコヅが云つた。が、放ツといってもらひたい。君は僕の苦しみがわからない。と、彼の眼は語つてゐた。

サニンはその眼光がわかつたので押黙つた。
 晩景の最初の影がはや窓の外に漾つてゐた。と、水晶のやうに透明な空が庭の淡緑の上に消えた。
 一寸間を置いてから、サニンが云つた。

——そんなわけのわからんところへ行くよりはね、一層リダと結婚した方がいゝぢやないか。僕はさう思ふよ。

ノギコヅはヒヨイと顧返つて、ブル／＼と震へた。

——そんな馬鹿な串戯はよしてくれたまへ。と、金屬的の聲で彼は叫んだ。

彼の聲音はシンと静まり返つた庭の中へ漂つて行つたが、そよとも動かぬ灌木越しに反響した。

た。

——ぢや、なぜそんなに慌て、出懸けるのだい？。と、サニンが訊いた。

——さア……と、ノギコヅが云つた。彼の眼は意地悪さうに圓くなつた。そして彼の顔はサニンの見馴れた善良なボンヤリした顔付とは似ても似つかなかつた。

——君はね、君とリダとの結婚が不幸なものだと思ふかい？。と、サニンは快活に續けた。彼の眼はニコ／＼してゐた。

——止したまへ。と、ノギコヅは泣かぬばかりの調子であつた。そして醉漢のやうにヨロ／＼しながら、匿さうとした汚い靴を引摺んで、サニンの方へズツと進み、彼の頭越しに我を忘れてそれを振回した。

——まア、氣を静めたまへ。何の事だ！。と身を退りながら、サニンが云つた。
 ノギコヅ忌はしさうに靴を抛出して、惱ましげに息をつきながら、立ちどまつた。

——このボロ靴で僕をどうかしようとしたんだね。と、サニンは頭を掉つて叱りつけた。彼はノギコヅが不慥でたまらなかつた。そしてその動作が彼には馬鹿々々しく思はれた。

——君が悪いのだ……と、ノギコヅはおど／＼しながら答へた。

が、彼はサニンに對して懐しい信頼の念を生じたのである。自分自身が情なくてたまらなく思はれた時、恰も子供が大人の友達に對する如く、彼に抱きついて、自分の小さな苦しみをば、彼に懇へたくなつたほど、それほどサニンが彼の眼には偉大にも落ちついて見えたのである。と、

その眼から眞珠のやうな涙がポロ／＼と零れた。

—胸が張裂けるやうな思ひをしてる僕の心を知つて呉れたら、君。と、どうかして泣くまいと努めて、彼はきれ／＼に叫んだ。

—あ、君、僕は何もかも知つてるのだよ。と、サニンは優しく答へた。

—いや／＼、君は知りやしない？ と、ノギコヴはサニンの傍へ坐りながら云つた。
こんな難しい自分の精神状態は、決して誰も知る事が出来る筈はないと、彼には考へられたのである。

—だがね、僕は知つてるのだよ。と、サニンは云つた。なんなら、誓つてもいいさ。若しね、君がもう僕に靴なんぞ打突けないと約束したら、僕はそれを君に證明しよう。約束するかね？

—約束する……免してくれたまへ、ヴオロディアさん。と、久しく使つた事のない通稱でサニンを呼んだほどそれほどノギコヴはどきまぎして眩いた。

これがサニンを喜ばした。そこで一切の始末をつけてやらうといふ念が一層堅くなつた。

—ねえ、君、お互ひに腹藏なく話さうよ。と、彼はノギコヴの膝の上へ親しげに手を置きながら口を切つた。君が出懸けようと決心したのは、リダが君の手を拒絶したからぢやないのだ。我々がザルデインの家へ行つた日にね、奴がリダの訪問を受たやうに、君には思はれたからさ。ノギコヴは胸の上へ頭を垂れた。苦痛極まるつひこの頃の傷口をば、彼はサニんに再び開かれたやうな氣がしたのである。

サニンは其様子をジツと見て考へた。

—何といふお人好しだ！

—僕はね、リダとザルデインとの間に何か起つたものかどうか、それを君に證據立てるつもりぢやないのだ。と、彼は聲高に續けた……それは僕にやわからない……少くとも僕はそんな事を考へない。と、ノギコヴの顔色が曇るのを見てとつたので、彼は口早に云ひ足した。

ノギコヴは臍氣な希望が出て來たやうにジロリと彼を見た。

—二人の關係はね、つひ近頃の話だ。だから奴等の間に眞面目な問題が起つて來る暇はないよ。と、サニンは説明した。殊にリダの性格を考へて見るとね……君はリダをよく知てる筈だ。

ノギコヴは自分の眼の前をば、自分が知つてゐたとほりの、又自分が愛したとほりの、乙女の姿が、まざ／＼と通過するやうな思ひをした。氣位が高くて且つ愛嬌ぶかい、時としては優しく、時としては嚴つい眼の、全體が圓光のやうな冷やかに又清らかな雰圍氣で取巻かれた其姿が……

彼は眼を閉ぢて、サニンの言葉を信じた。

—で、若しね、奴等の間に何事か成立つてゐたものとすれば、それは多分現在は済んで了つてる筈なのだ……要するに、まだ／＼自由な、幸福を得たがつてゐる、若い娘の方に、少しぐらゐな不都合があつたところで、君にとつて何の故障になるだらう？ 君自身の方ぢや、それほど古い事を考へ出して見たくなつて、それと同様なさもなくばそれよりは一層性の悪い

（女狂ひ）の十や二十を憶出す事が出来るだらうからねえ。

ノギコヅはサニンの方へ向きかへた。そしていかにも信用深さうに眼を輝かした。と、希望の芽ばへが彼の心中に萌きはじめた。が、それは一寸動いても又一寸ぞんざいな口をきいても、すぐ枯死して了ふ憂ひのあるほど、それほど、か弱い、それほど可憐なものであつた。

——君は知つてる、若し僕が……と、彼は吃つた。が、自分の云ひたい事を何と云ひあらはしていゝかわからなかつたので、そのまゝ黙つて了つた。と、甘い／＼感動の涙が胸を一杯にさせたのである。

——で、どうしたの？ と、サニンは眼をギロつかしながら、嚴然と云つた。僕は君に唯一つの事だけが明言出来る。ザルデインとリダとの間には何事もなかつたのだ……。

ノギコヅはギョツとして彼を見つめた。

——僕は……僕は考へてゐた……と、彼はサニンの言葉には信用が出来かねるやうに思ひながら口を開いた。

——君は馬鹿な事を考へてゐたのさ。サニンは赫として答へた。と、君はリダを知らなかつたのだね？ いつまでもぐ／＼してゐるやうな戀なら、どんな戀なんだい？

ノギコヅは喜ばしさに彼の口を見つめながら彼の手をとつた。

サニンはたまらなく腹が立つた。そして自分が一緒にならうと思つた女が、まだ誰にも身を委さなかつたのかと思ふと、それが嬉しくてたまらないといふ男の顔から、彼は暫く眼を離さなかつた。まだ苦悶と悲哀とに充たされてゐる、その善良な、人間らしい眼のうちには、爬蟲類のや

うにネバ／＼した、貪慾な、獸的な猛烈な嫉妬心が光つてゐた。

——あゝ！ と、サニンは立上りざまに薄氣味悪い聲で云つた。そこでだ。僕は君に云つて置くべき事があるのだ。リダはね、ザルデインを戀してゐたばかりぢやない。奴と或種の關係さへあつたのだ。そしてそれが爲に今妊娠してゐる。

部屋のうちはシンと靜まり返つた。ノギコヅは一種特別な微笑を洩らしながら、ジツとサニンを見て、さて両手を擦つた。彼の唇は動いた。で、その唇から微かながらも鋭い叫聲が出たが、すぐ消えて了つた。サニンは彼の前に突立つて、眞鞆に其眼を彼に差向けたが、其唇の小皺のよつた隅々が、いかにも暴虐の情を押へつけてゐるやうであつた。

——おい、なぜ何にも云はないんだい？ と、彼は訊いた。

ノギコヅは眼を上げたが、相變らず度を失つた微笑を洩らしながら、またすぐ眼目になつた。

——リダは物凄い戯曲を演じたのだ。と、サニンは恰も獨語を云ふやうに徐ろに口を開いた。若し僕が偶然奴と出會はさなかつたら、奴はもう今は生きてゐなからうよ。きのふまでは未だ美しい花のやうな乙女であつたものが、今はもう形が壞れて、泥に塗れて、鰻などに食はれて、河底のどこかに横はつてゐるだらうよ……が、死などはどうでもいゝのだ。人間は誰でも死ぬものだからね……けれども、たゞ、奴を取巻いた人々の爲に、奴がこの人生へ持つて來た限りのない歡喜が、奴と一緒に消滅して了ふのだよ……疑もなく、リダはたゞ一人のリダではないのだ……若し凡ゆる女性の青春が消失せたら、この世の中は墓場と化して了ふだらう……僕の如

きは、いつも人々の爲に不條理に追窮された乙女を見るたび、思はず罪惡を犯したくなる。そこで……君がリダと結婚しようが、惡魔のところへ行かうが、僕にとつちや全く同じことなのだ。が、僕は君に云はなきやならんよ、君は馬鹿な人間だと……若しね、君の腦中にたつた一つ健全な思想が生きてゐさへしたら、自由な一人の若い女が、誤つて自分に價打しない男に身を委し、たゞ性慾上の行爲を遂行したゞけで、再び自由の身の上となつた、といふ位な事實の爲に、自ら苦しんだり、他人を苦しめたりする事はなかつたらうよ……僕は君に云ふが、君にね……君ばかりが馬鹿だといふのぢやないのだ……さうした馬鹿者は世の中に澤山ある。この人生をば歡びもない光りもない一箇の耐へがたい牢獄に化して了ふやうな馬鹿者はね……さうだらう……君、君自身は犬のやうに小汚い、酔つぱらつた、愚な女の腹の上で、何遍轉がりまはつたか知れやしまい……リダの失策のうちには、詩があるよ、情熱があるよ、膽力があるよ。然るに君自身の行爲はどうだらう？……何の權利があつて、君はリダに背く事が出来るのか？ 精神と生活との間へ罅などを設ける事を欲しない、君自身、聰明な、わかつた人間だと信じてゐる君がさ！……リダの過去は君に何の影響があるだらう？ 君にね？……リダはそれが爲に美しさを減じたかい？ 歡樂の得させ方が少くなつたかい？……君は君自身で奴の童貞が得たかつたのかい……どうだい？……

——そんなわけぢやない事は君だつて知つてるさ……と、唇を顫はしながら、ノギコヴが云つた。

——實はそんなわけさ、と、サニンは叫んだ。でないとしたら、何だい？

ノギコヴは黙つた。彼の心は暗く又空虚になつた。が、眞黒な圃地はたぢを横ぎつて、微かな光を投げてゐる、遠く明るい窓のやうに、惱ましい幸福の光明が一寸筋、彼の腦中の夜の暗を照らした。宥恕と犠牲との觀念が、即ちその光明であつた。

サニンは彼を見まもつたが、彼れの心がスツカリ讀めたやうな氣がした。

——僕にはわかつてる、と、彼は同じく優しい聲で續けた。僕にはわかつてる、君が既に犠牲といふ事を考へてるのはね……又君が裏口から出ようとしてるのもね……「俺はあの女のところまで身を墮してやらう。そして衆愚に對してあの女を保護してやらう。そんな風にして」といふね……君の唱ふ refrain (疊句) はそこにあるのさ……君は恰も腐肉の中の蛆蟲のやうに見てゐるうちに大きくなるよ……が、そりや腔だ。腔にすぎない……なぜといふとね、君はいつだつて何事に對しても身を棄て、かゝつた事はないからね……若しリダが天然痘に罹つて顔が壞れたとして見たまへ。君は恐らく一生懸命になつて偉大な行動を取らうとするだらうよ。が、二日たつと君はその慈悲的行爲をば奴の不幸にしてすんだらう。運命を咀ひ、魂を咬み絶望にたへぬやうな身の上に、奴をしてすんだらう……そして現在君は自ら聖像イコナのやうに考へてゐるのだ……それ、君の顔は光り輝いてゐる。どこもかしこも、君は聖人だといふ事を語つてゐる……ところが、君の渴望してゐるものは、何もなくなつてゐはしないのだ。リダは同じ腕を持つてゐる……同じ脚を持つてゐる。同じ胸を持つてゐる。そして人生に對する同じ情熱を持

つてある……あゝ、聖人のやうな行爲をしてゐるものと夢想しながら、リダの肉體を弄ぶ事は、君には楽しい事だらうと、僕は思ふよ！ どうだね？
かういふ言葉の壓迫をうけて、ノギコヅの心中にあつた或物が、まるでへし潰された虫のやうに影をかくした。と彼自身に對する驚嘆の情が湧き出でて、もつと純なもつと眞面目な、新しい感情が、その代りに生まれた。

——君は僕が本當に悪いよりはもつと悪人だと思つてゐる。と、彼は悲しげに又吐るやうに云つた。僕は君が考へるほど馬鹿ぢやないよ……恐らくね……僕はこの問題について議論をしたくない。僕の心の中に先入してゐる考が強いからね。が、僕はリダ・ペトロヅナさん愛するよ……で、僕が若しリダさんに愛せられてゐると知つてゐたら、もつと前から其事について考へてもゐたらうよ……。

「其事について」といふ言葉を、彼はやつとの思ひで云つた。と、その言ひにくい事が又新に苦痛となつた。

サニンは不意と静かになつた。そして物思はしげに大股で室内を歩きはじめた。と、窓の側で立ちどまつたが、もう晩景の迫つて來た庭のうちを眺めながら、彼はやさしい聲で云つた。

——リダは今、戀の事など考へてはゐられない程、それ程不幸なのだ……僕はリダが君を愛するか、但しはまた愛してゐないか、それは知らない……が、僕は只かう思ふよ。若し君が奴のところへゆけば、奴の一時的の幸福を咀はない、全宇宙に於ける第二の人間となるに相違なから

う……で、それから跡は……誰にもわかりやしまい！

ノギコヅは夢見るやうに自分の前を見た。悲しみと喜びとが彼の心中に錯雜いりまじれた。消え失せてゆく夏の夕べの微妙な哀愁のやうな、胸に迫る脆弱な幸福を想はせながら。

——リダのところへ行きたまへ。と、サニンが云つた。たとへそれが何であらうと、野獸の鼻面を匿してゐる、假面を蒙つた奴ばかりの中で、人間の顔を見る事が、奴にとつてどのくらゐ慰めになるかわからんよ……君、君はかなり馬鹿だよ、全くさ。が、その馬鹿さ加減のうちにはね、何人も持つてゐない、何物かがあるのだよ……そしてさうした愚なものゝ上に、世界は昔しから幸福と希望とを築いてゐたわけさ……來たまへ。

ノギコヅはおつ／＼ニツコリして見せた。

——行かうよ……だが、リダさんにいゝ心持をさせるかしら？

——そんな事は考へたまふな。と、彼れの肩の上に手を置いて、サニンが云つた。やらうと思つたら……やつつけるさ……今にわかるさ……。

——ぢや、行かう？ノギコヅはキツパリと云つた。

扉の側で彼は立止まつた。そしてジロリとサニンを見やりながら、意外に勢ひのいゝ調子で云つた。

——で……ねえ、君……僕に出来るなら、リダさんを幸福にして上げたいよ……いかにも平凡な文句だけれど、僕は自分の感じてゐる事をその他の言葉では云へないのだ。

——それでいゝさ。と、サニンはにこやかに答へた。わかつてるよ。

二十一

夏は灼くが如くこの町の上を支配した。夜に入ると、まん圓な朗らかな月が、中空高く懸つた。重苦しい空氣は庭園の薰香と錯雜つて、たへがたいほどの懈怠さを惹起した。

晝間のうちは、人々は働いたり、政治や藝術に従事したり、食べたり、飲んだり、沐浴したり、お互に話し合つたりした。が、暑さが和いで、押蔽さるやうに重い塵埃が地に落ちて、眞黒な地平線の上へ月の謎めかした圓盤がさし昇る頃になると、又その神祕的な冷たい光が庭に漾ふ頃になると、凡ゆる活動は止んだ。そして恰も装つた衣服を脱ぎすてたもの、やうに、解放されたる昂奮したる人々は、眞の生活を營みはじめるのであつた。庭といふ庭には鶯の聲が充ちた。草といふ草は女の裳裙にそよると觸れて、彼等の小さな頭を揺がした。影といふ影は濃くなつた。戀の呼吸は匂はしい空氣のうちに、重苦しく漂つた。眼は夜の暗のうちに、輝いたり、曇つたりした。頬といふ頬は根くなつた。聲といふ聲は人の心をときめかした。

ユリイ・スヴロジツチはシヤフロヴと共に、政治の事や、團體の事や、オットエデユカシヨフ自働教育の事などに腐心してゐた。又最近の書物を朗讀したりした。さうした活動のうちに、自分の生活が眞に包括されたやうに思ふと、彼はそこに自分の不安と疑惑との慰めをば見出す事が出来たのである。が、その朗讀や團體組織の勤務にも拘らず、一切のものが彼には惱ましかつた。といふのは、彼れの

生活に炎が缺けてゐたからである。が、たまく／＼焰がもえ上る時があると、それは自分ながら壯健に感じて、女がほしくなる時であつた。

以前には、美しく若い女なら、すべて同様に彼を喜ばしたり、同様に彼を惱ましたのであるが、今は彼等のうちから、たつた一人の女を見分け出すやうになつた。そして恰も春の森の一隅なる若い一株の樺樹いばしぎのやうに、美しい愛らしい彼女のうちに、他の一切の女的美を集中させて了ふのであつた。

彼女は丈が高かつた。彼女の肉體は引緊つて逞しかつた。彼女の胸は一步毎に動いた。彼女は眞白な力強い頸の上へその愛嬌ぶかい頭をばスツキリと擡げてゐた。彼女は朗らかに笑つた。又美しく歌つた。彼女は非常に多く讀書して、聰明な思想を愛し、又詩なども作つたが、それが思はず五體に力が這入り、何かヘシツカリと胸を壓付け、手に全力を籠めて何物かを掴み、足で地面を踏みつけ、笑つたり、歌つたり、又は美男子の事を想つたりする時にかぎつて、彼女の五體は生の歡喜に顫へた。時として濃い空のたゞ中に、太陽が輝いたり、月が照つたりする際など、彼女は手早く衣服をかなぐりすて、丈の高い草の間を走りぬけたり、漣立つ川の、深い水中へ躍び込んだり、又は高らかに歌を唱ふやうな聲で、名を呼びながら、待人を探したりしたくなるのであつた。

彼女の姿はユリイを惱ました。そしてまだ人知れず眠つてゐて使用されなかつた力をば彼れの心中に喚起した。彼女の面前にあると、彼れの言語は活氣づいた。彼れの筋肉は緊張した。彼れ

の心は一層鋭くなつた。彼れの精神は一層敏くなつた。彼れは終日彼女を思ひ暮らした。そして夜になると、彼女を探しに出た。けれども其情緒の本來の性質に至つては、彼は自分自身の心深くへ窃に押藏してゐたのである。

彼れの心の底には、凡ゆる彼れの本能とは反對の方向をとつて、彼の力を腐蝕する、病的な或物があつた。一つの感情が心中へ生ずる毎に、彼はそれを扯き留めて、一々それを分析した。と、その感情は恰も霜に逢つた草花のやうに色褪せて凋むのであつた。で、何者が彼をカルサギナの方へ牽きつけるのかと、われと我心へ訊く毎に、彼はいつでも、「性慾的の牽引」と答へた。そしてなぜかわからず、其言葉がたへがたいほどの侮蔑を彼れの心へ惹起すのであつた。

ところが、二人の間には、既に或默契が成立つてゐたので、一方の動作は鏡にでも映るやうに今一方へ反射してゐた。

カルサギナの方では、彼女は心中を通過するものをば分析などはしなかつた。が、其感情は彼女にとつて嬉しいものであつた。彼女は其感情を恐れると同時に希がつた。そして彼をば自分一人ぎりのものにしたがひに、嫉妬ぶかい注意を拂ひながら、他の人々にはそれを匿してゐた。又、自分の愛する男の心身を通過する事が皆目わからないので、それが彼女には心苦しかつた。時々、二人の間には何の關係もないやうに思はれた。さういふ時には、彼女は恰も寶物でも失つたかのやうに泣いた。けれども、彼女は他の男達が接近したり見つめたりする事を平氣であるわけにはゆかなかつた。殊にユリイに愛せられてゐるといふ氣がして、許嫁の嬉しさをしみく味つた際

などには、彼女は他の男達を惱ました、男達のみならず、不可思議な ヒツシム の力によつて、自分自身さへ苦しみながら。

サニンが彼女に近寄つて、その廣やかな肩や、その朗らかに落ちついた眼や、そのテキパキした立居振舞が、彼女の眼に映じた時、一種特別の身震ひがゾット彼女の全身に浸透つた。カルサギナは動かされた。心が亂れた。そしてわれと我心の浮氣さ加減を罵つた。けれども、どうしても好奇の眼をもつてサニンを見ぬわけには、ゆかなかつたのである。

リダがあゝいふ怖しい危機を経過した日の、丁度その夕方であつた。ユリイとカルサギナとは圖書館で邂逅した。

二人は一寸目禮して、思ひくゝの仕事にかゝつた。カルサギナは書物を擇出した。ユリイは彼得堡から着いた新聞に目を通した。が、出て行く時には二人一緒になつた。そしてもう人通りのない月光の下の町々をば、二人はお互ひに押並んで歩いた。

四圍はシンと靜まり返つてゐた。時をきつては、夜警の憂鳴器が響いた。又其間々には、家禽飼養場で犬の遠吠がきこえた。並木街に達すると、ユリイもカルサギナも、そよとも動かぬ木々の下蔭に腰をかけた多勢の人間に氣がついた。二人は賑かな笑聲をきいた。又パツとついた巻煙草の光で、いろくゝな上髭や願髯を見た。

と、二人が通過した時に、男の聲で唱つた。

……美しきもの、心は
野のそよ風にも似たるよ……

二人は乙女の住居からさう遠くないところで、深い木蔭の蔽カサつた腰掛ベンチの上へ腰を卸した。そこから月に照らされてある大通りが見えた。又その端に寺の白い柵さくなども見えた。その寺の十字架は眞黒な菩提樹の上に星の如くキラキラと輝いてゐた。

——御覽なさいよ。なんて綺麗なんでせう？ と、手でその邊を指さしながら、歌を唱ふやうな聲で、カルサギナが云つた。

ユリイは相手の眞白な肩の上をチラリと竊視して嬉しい思をした。その肩は恰も小露西亞服の廣やかな新月形の襟の中でなよ／＼と輝いてゐたのである。と、彼女を自分の腕の中へ挿と締めつけて、半ば開いた其肉厚な唇へ、ピッタリ自分の口を糊着してやりたいといふ、たへがたい慾念が、むら／＼と彼の心中に起つて來た。彼は矢庭にさうしなければならぬやうな氣がした。なぜかといふと、彼女の方でも、恐るゝが如く又望むが如く、いかにもさうするのを待つてゐるものゝやうであつたから。

が、彼は機を逸したので、決心が鈍つて了つた。と、彼れの唇は自ら嘲けるやうに痙攣けいれんつた。

——何だつてお笑ひなさるの？ と、カルサギナが訊いた。

——なアに……何でもないのです……と、ブルブル顫へるのをジツと抑へつけながら、ユ

リイは答へた。あんなまどい、空ですから。

二人は押黙つた、暗い庭園から響いて來て、だん／＼に消えてゆく物音に、聽耳をすましながら。

——貴兄は今迄に戀をなさつた事があつて？ と、彼女は突然訊いた。

——え、……と、ユリイは徐に答へた。「今云はなけりやいけなから」と、半氣まどろが遠くなつて、彼は考へた。僕は現に戀してゐます。

——どなたに？ と、彼女はおど／＼した聲で訊いた。彼女には其答がわかつてゐるやうに思はれたので、それをきくのが恐かつたのである。

——無論、貴女にです！ と、努めて串戯まじにしてのけるやうに、ユリイは答へた。そして彼女の方へ身を傾けながら、眞靱まじに其眼の中を見つめた。と、其眼は暗隅まじの中で異様に光つてゐた。

彼女はチラリと彼を見たが、その嬉しいやうな又恐いやうな顔付は、いかにも何か期待してゐるやうであつた。

ユリイは抱緊めてやらうと思つた。彼女のなよ／＼とした鮮かな肩が既に自分の手の中で顫へてゐるやうに思はれた刹那、彼は恐くなつた。そして又候また機會を失つた。で、自分ながら思つた事をやつてのけるだけの力が無さ、うに感じられたので、彼は欠伸する風を装つた。

——擲擲つてるんだわ！ と、カルサギナは残念に思つた。と、侮辱を受けたやうな氣がしたので、彼女の心中にあるものは、忽ち一樣に冷たくなつた。彼女は泣くまいとして、齒をくひし

ばりながら、ブル／＼と身を煙撃させたほど、それほど苦がい思をしたのである。

——馬鹿ね。と、彼女は立上りざまに聲まで變へて口籠つた。

——僕は眞面目に云ひます。と、ユイリは不自然な調子で云つた……僕は貴女が好きですよ。信じて下さい。僕は熱心に貴女を戀してゐるのです。

カルサギナは返事もせず書物を取りあげた。

——なぜあんな事を云ふのかしら？……可の爲なんだらう？ と、彼女は面白くなく思つた。そして自分の方では打明けたのに、向きでは馬鹿にしたのが不平でならなかつた。

ユイリは落ちた書物を彼女に渡した。

——歸りませう……と、彼女は低い聲で云つた。

彼女と別れるのはいかにも殘惜しくて、ユイリは心苦しかつた。けれどもこの短い一幕は彼には成功で、根本的オシヤルで、美しく、且つぐつと平凡を超越したもの、やうに思はれたのである。彼は意味ありげな調子で答へた。

——では又。

で、カルサギナが彼に手をさしのべた時、ユイリは思はざ身を僂めて、その柔らかな温い手に接吻した。心をときめかす肉の香が彼れの面を掠めた。と、カルサギナは聲を立て、手を引いた。

——何をなさるのよ！

が、このなよ／＼とした清新な處女の肉と彼れの唇との接觸が、彼には強い／＼印象を與へた。

ユイリは有頂天になつて、馬鹿のやうになつて、たゞニヤ／＼笑つてゐるばかりであつた。そして遠去りゆく小刻みの忙ぎ足に聽耳を立て、ゝゝゝ。

と、戸がギイと鳴つた。ユイリは尙ほニヤ／＼笑ひながら、歩武を還すと、夜の新鮮な空氣をば咽喉一杯に吸ひ入れたが、何となく自身が健康で幸福であるやうな心持がした。

二十二

すが／＼しい廣々とした月光の下から、監房のやうな息のつまるわが部屋へ這入ると、結局、人生は退屈なところで、人間は淺猿しいもの、やうに、ユイリには考へられたのである。

——……俺はあの女に接吻したのだ！……何といふ幸福だ！ 何といふ heroisme ヘロイズムだ！ 全くな！ いかにも價値がある！ いかにも詩的だ！ 何もかも……月は輝いてゐる。英雄はその熱烈な言葉と接吻とで、處女を迷はす！……なんだ！ 下らない！……こんな見悪い、ちツぽけな穴の中で、人間は衰へてゆくばかりなんだ。

彼が大都會に住んでゐた時には、ユイリはいつもかう考へてゐた。田舎へ行つて、健康な鄙びた生活、百姓だとか日光の濛ふ圃地だとか、さういふもの、中へ身を投じたら、どんなに満足な事であらう。さうしたら、きつと生存上に意義もあるだらう、などと。が、今爰へ来て見ると、この田舎の小都會が彼には死んだ土地のやうに思はれるのであつた。そして人生といふものは、大都會に在つてのみ承認せらるべきもの、やうにも思はれた。

……大都會の政治機關……火花のやうな辯論……と、ユリイは我知らず調子づいて朗々と叫んだ。が、この子供らしい熱狂に自分ながら驚いて、今度は低い聲で云ひ直した。

——で、跡になつて見れば……どれもこれも俺にとつちや同じ事だ……政治だらうが、科學だらうが、何だらうが……離れて見てありや、すべて雄大にも理想的にも見えるけれど……箇々の生活として見りや、他の者同様一箇の職業にすぎないのだ。戦闘か……巨人的の努力か……それもさうだが、現代のやうな生活ぢや、それは殆ど不可能だ……俺は苦む。俺は戦ふ。俺は障礙物に打克つ……それがどうしたのだ？ その終極は何だ？ 争闘のどんづまりは自分の生活から外へ出るばかりだ……プロメテは人間に火を與へようとして、それを與へたのだ！ それは勝利だ！……ところが我々はどうか？……我々はたゞ燃やしもしない又消す事も出来ない其火へ持つて行つて、けちな木屑を添へるだけの話ぢやないか。

と、彼れユリイがプロメテでなかつたといふ事が、即ち自分の咎だといふ考が、不意と彼れの心中に湧上つた……この考は彼には面白くなかつた。で、それが爲に、彼は我を忘れて自分自身を責めた。

——すると、俺はどういふプロメテなんだらう？……たゞ俺自身の見地からばかり一切の物を考へてゐる俺はな……俺は俺だ。俺なんだ、依然として俺なんだ……俺は俺が侮辱して一切の奴等と同様に弱蟲だ。又やくざ者だ……

この平行線的の考が彼には甚だ不快であつた。そして何もかもわからなくなつて、暫くボカン

として自分の前を凝視めてゐた。が、彼は自ら辯護の道を求めたのである。

——いや、いや、俺は他人とは同じやない。と、彼はやつと安心して考へた……リヤザンツエヴだとか、ノギコヴだとか、サニンだとかいふ類の手合は、こんな風には考へやしない……奴等はいふ自己批評からはズツと懸離れてゐる。それどころか、奴等は恰もザラツウストラの勝誇つた豚のやうに満足してゐる……奴等にとつちや、一切の人生は顯微鏡的の奴等の「自我」に歸するのだ。そして奴等の俗悪な事によつて、俺はいつも毒せられてゐるのだ……狼と一緒にゐる者は、狼のやうに吼える事になる。それは自然だ。

ユリイは部置の中を行つたり來たりした。と、よくあるやうに、彼れの體の位置が變つた爲に彼れの考も從つて變つた。

——さて、と……それはそれでい……が、俺にはまだいろ／＼考へて見なくちやならん事が澤山ある……たとへば、カルサギナとの關係はどうなつてるのだ？……俺があんな女を愛しても愛さなくても、同じ事ぢやないか知らん。それがどうだといふのだ？……かに俺があんな女と結婚したとする。或は暫くの間あんな女と一緒にゐるとする……それが俺にとつて幸福か知らん？……あんな女を欺くのは罪だらう。そして若し俺があんな女を愛すれば、其時は……其時は、さう、あんな女に子供が出来るだらう……と、なぜかわからぬが、ユリイは眞赤になつて考へた……無論、悪い事なんぞありやしない。が、さうすると、俺の自由は永久に奪はれて了ふだらう……家庭の幸福！ 中流社會の歡喜！……いや、いや、そんな事は俺にとつちや下

らない……。——一、二、三……。と、一步毎に、自分の足が第二の板敷と第三の板敷との間へ落ちるやうに、努めて歩きながら、ユリイは空想に耽つた……。若し慥に子供が出来ないも
 のとしたら……。或は自分の生活を献げてもらふ、ぐらゐ子供を愛する事が出来たとしたら……。
 いや、どつちにしても、それは俗悪な事だ……。リヤザンツエヴだつて子供を愛するだらう……。
 さうして見りや、我々二人の間にどういふ差別があるだらう？……。生きて、犠牲となる……。
 眞の人生はそこにある……。さうさ、さうには違ひないが、誰の爲めに犠牲となるのか？……。
 どんな風に？……。俺はどんな道でもかまはず突進しなけりやならないだらう。どんな目的へで
 も向はなけりやならないだらう……。が、人間が自己の生活を献げてでも怨みのないやうな、さう
 いふ清浄な、確實な理想はどこにあるか知らん？……。いや、いや、俺が弱いのだ。さう
 人生は愛したり犠牲を献げたりするだけの価値のないところなのだ……。さうすると、何の爲に
 生きるのだらう？……。この結論はユリイの脳中へは依然としてハッキリ映つて來なかつた。
 卓子の上には一挺の短銃があつた。で、彼はそれに近づく度、そのピカピカした鋼鐵をばジッ
 と見つめた。

彼は武器を拿上げて、仔細にそれを點檢した。短銃は裝填せられた。ユリイはそれを顫顫へ宛
 がつて見た。

——さうだ……。こんな風に……。と、彼は考へた……。一度、パンとやりや……。それッき
 りだ……。自殺するのは馬鹿か慥巧か？……。自殺は卑怯だ……。俺は卑怯者だ……。

冷たい銃身と熱い顫顫とが相觸れると、それが彼には快い氣持でもあり、厭な氣持でもあつた。
 ——さうすると、カルサギナは？……。と、ユリイはふと自分の心へ訊いて見た。其時には、
 俺はあの女が得られないのだ。手中にある歡樂をばむぎ〜と他人へやつて了ふわけだ？

カルサギナの事を想ひ出すと、彼は思はず有頂天になつた。が、意志の力でジツとそれを押戻
 へた。そんなものはすべてたゞ下らん事にすぎぬので、今考へてゐたやうな、重大な且つ沈痛な
 思想などは、到底比較せらるべきものぢやないのだ、と、強ひて思はうとした。が、この克己
 が彼自身の心に復讐して、自分の拵へた憂愁によつて、凡ゆる生の歡樂が剝奪されて了つた。

——なぜいのかんのか？ と、彼はドギドギしながら、自分の心に訊いた。
 で、今度はもう自分の心にもない又自分の侮蔑してゐる棄鉢な氣になつて、再び短銃を顫顫へ
 宛がひ、前後を顧みず、撃鐵を引揚げた。

と、冷たい鋭い或物がゾツと彼れの身内を通過したやうな心持がした。そしてわな〜胴震ひ
 をした。忽ち耳がガンとして、部屋全體が恰も或る未知の力によつて持上げられたやうに、ユラ
 ユラと動いた。が、彈丸は出なかつた。そして金屬的な撃鐵の音ばかりがカチリと響いた。ユリ
 イは茫然として徐に武器を持つ手を卸した。と、軀中の筋肉はブル〜と顫へた。頭はグラグラ
 となつて、唇はパサ〜に乾き了つた。それから彼れの手は、卓子の上へ短銃を置かうとして、
 幾度もそれをガタ〜させたほど、それほど烈しく戦慄した。

——俺は俊れた人間だ！……。と、彼は考へた。そしてわれと我心をば抑へつけながら、姿見

の方へ行つて、そのピカ／＼した薄暗い表面にヒタと眼を据ゑた。
 ——俺は卑怯者か知らん？……なアに、と、彼は昂然として考へた。俺は卑怯者ぢやない……これは俺が悪いのぢやないのだ。彈丸が出なかつたばかりだ。
 彼自身の顔が姿見の中からジツと彼を見つめた。彼にはその顔が嚴格にも氣高くも見えた……彼は自分の行爲はそれほどの事でもないのだと、強ひて思ひながら、満足らしく舌を出した。そして姿見から離れた。

——運命がさうさせなかつたのだ！ と、彼は大きな聲で云つた。と、その言葉は彼を慰めたのである。

——誰も見やしなかつたかしら？ と、顧返つて見ながら、彼は自分の心へ訊いた。

が、四圍はシンと静まり返つてゐた。閉切つた扉の外では何も動かなかつた。すると、この部屋に限られた外にはもう何も存在してはゐないので、無際限な、空虚な、この全空間には、たゞ彼ばかりが生きて苦しんでゐるやうに、ユリイには思はれたのである。彼は洋燈を消した。そして雨戸の隙から這入つて来る薔薇色の曙光を見て驚いた。

彼は寢に就いた。と、睡てゐる間、巨きな、重たい、氣味の悪い、眞赤な光を放つ何者か、彼の上へ押蔽さるやうな心持がした。——悪魔だ！ といふ考が彼れの夢を横ぎつて過ぎた。

ユリイは身を脱れようとして死力を出したけれど、その眞赤なものは退かなかつた。彼は物も云はず、笑ひもせずたゞギリ／＼と齒ぎしりをした。それは同情か、或は皮肉か、彼にはどうし

てもわからなかつた。そして彼はたゞ苦しみ悶へるのであつた……。

二十三

窓の外には、草や花の薫香をば媚かしく漂はしつゝ、いとゞ静かに夕陽が傾いた。

サニンは卓子の前に腰をかけて、名残りの日の光で、氣に入つた小説を讀み耽つてゐた。その小説には、黄金や金剛石や十字架を鑲めた司祭服をつけたまゝ、香爐の烟の中で息たえた老司教の寂しい悲劇的の結末が取扱つてあつた。

室内は戸外と同様に涼しかった。黄昏の微風がそよ／＼と這入つて来て、サニンの強壯な胸を充たし、その髪の毛を揺がし、それから又その肩を撫でた。

彼は讀んだり、考へたり、唇を動かしたりして、恰も夢中になつて勉強してゐる大きな子供のやうに見えた。讀めば讀むほど、彼れの心はだん／＼に物悲しくなつた。どうして世の中には苦痛などといふものがあるのか。どうして人間は愚かなのか。又どうして彼は彼等人間どもから懸絶れてゐるやうに感じられるのか。

誰か部屋の戸を開けたので、サニンは顧返つた。

——今日は！ と云つて、彼は書物を片寄せた。さて、何か珍しい事があるかね？

ノギコヴはそツと彼れの手を握つた。そして悲しげな彼の顔が痙攣した。

——何にもないさ……何事もすべて以前のまんまだ！ と、窓へ近よりながら、彼は答へた。

サニンの場所からは、夕空の紅みがかつた背景の上へ、軽微な輪廓で截取らるゝ、丈の高いノギコヴの横向姿ばかりが見えた。彼は眼を据ゑて、その姿をばいつまでもく眺めてゐた。

彼が最初、苦しげにどきまぎするノギコヴをば、憐れに憔悴したリダのところへ連れて行つた時、二人はお互ひの心の底に觸れ合ふやうな話は一向しなかつた。打明ける事は二人にとつてさぞかし不幸な事であらうとは、サニンも承知してゐた。けれども若し打明けなかつたなら、それ以上に不幸を層ねるであらうとも、彼は考へたのである。

で、自分にとつてはこれほどわかりきつた話はないのだが、いろく苦しめぬいた上でなければ、恐らく二人にはのみ込みかねる事なのであらうと思つたので、彼は二人を勝手にさせて置いた。が、二人はいづれ、どうしても一緒にならなければならぬやうな、據どころない場合に立至るであらうとは、彼にはよくわかつてゐた。

さうだ……と、サニンは考へた。二人とも苦しむがいゝ。苦しめば心が軽くも清くもなる……恐らくな。

と、恰も今その時機が到来したやうに、彼には考へられたのである。

ノギコヴは黙々と沈みゆく日を眺めながら、窓の傍でジツとしてゐた。取回しがたい喪失の臍氣な惱ましさと、目前の幸福が待望まるゝ戦慄とが錯綜した、一種異様な感情が彼れの心を搔亂した。この媚るやうな物悲しい黄昏を通して、凡ゆる者に侮辱され傷つけられたリダの姿が、まざくくと彼の心に現れた。と、彼は彼女の前に跪いて、冷たい彼女の手を接吻し、慈悲深い無量

の彼れの愛によつて、新しい生活へ彼女を導いてやりたくて堪らなくなつたけれども、彼には彼女のところへ行く氣が出なかつたのである。

サニンはそれと察した。彼は徐に椅子から立上つて、頭を振りながら云つた。

——リダは庭にゐるよ……行かうぢやないか。

ノギコヴは幸福と哀愁とで心を緊めつけられるやうな心持がした。彼れの顔は拘攣つた。又彼れの手は髭を撫でながら顫へてゐた。

——おい……どうしたい？……行かうよ。と、サニンは繰返した。彼れの聲は、恰もお互ひに充分のみ込んでゐる重大事件を處理しに行くといつたやうな、決然たる調子であつた。

ノギコヴはサニンが自分の心にある事を察してゐてくれるのを承知してゐた。そしてそれが爲に大いなる慰藉と子供らしい恐怖とを感じた。

——來たまへ、來たまへ……と、サニンは優しく續けながら、彼れの肩を捉まへて、彼を戸の外へ推出した。

——うむ……僕は……と、ノギコヴは口籠つた。と、抑へがたい懐しさが彼れの心にこみ上つて来るやうな感じがした。彼はサニンに接吻したくなつた。けれどもそれはせず、涙にぬれた熱心な眼で、ジツとサニンの顔を見つめた。

庭は薄暗くて生暖い露が匂つてゐた。緑がかつた斷末魔の日の光が、峨特式の窓々をば浮かしつゝ、木々の幹の間々へ現れてゐた。色褪せた牧場の上には、最初の霧が蕭やかに漾つてゐた。

恰も目に見えぬ物靜かな呼吸でもあつて、それがシンとした小徑の中をば、無言の立木や足の下に身震ひする草の間をば、立迷つてゐるやうであつた。

岸の上はまだ明るかつた。夕方の紅みの色は空半分を蔽ひながら、黒い牧場の中央をば清らかなうね〜と流れてゐる、川の中へキラキラと反射してゐた。リダは水の縁へ坐つてゐた。彼女の白い纖弱な姿は、波紋の上へ身を傾けた、神祕めいた横向きのまゝで、草の上へ浮上つてゐた。彼女の靜かな聲が彼女の心を覺醒させたその確信は、生ずる間もなく消失せて了つた。彼女は再び耻辱と恐怖とに支配されたのである。幸福のみならず、人生にさへ、もういかなる権利をも持てない身であるといふ考が、彼女の心を暗くした。彼女は母の顔を見るに忍びないので、手に一冊の書物を持ち、終日庭へ行つてゐた。で、母は自分のライフにとつては何の關係もないのだと日に幾度となく思ひ直して見たけれど、母の前へ出ると、いつも彼女の聲は變り、彼女の眼はいかにも罪を犯してゐるやうなおど〜した色を湛へるのであつた。と、其おどついた様子や、其眞赤になる事や、其震へ聲などが、終ひには自然と母に心配させる種となつた。そして母が氣遣はしさうにいる〜な間をかけたたり、油斷のない眼で、つけつ廻しつするのが心苦しくて、リダは姿をかくし始めたのである。

この夕方も彼女は岸の上へ身動きもせず座りながら、不安な眼で靜かに沈みゆく日を見やつたり、いや増す胸の惱ましさに思入つたりしてゐた。

彼女には人生がわからないやうな氣がした。彼女の前には恰もネバネバする巨大な蛸のやうな、

洪大無邊な、考へやうのない、一種異様な何物か立つてゐた。

彼女の讀んだ書物の數々は、其結果として、彼女に大きな自由ないろ〜な思想をば覺醒させた。彼女の實行した事は自然であるのみならず、剩さへ美しいもの、やうに彼女には考へられた。若肉慾の快樂を人に與へ又自ら味はふ事について、彼女は何人に對しても悪い事をしなかつた。若し其快樂がなかつたなら、彼女は恐らく人生の幸福をば知らなかつたであらう。又彼女の青春は恰も晩秋の木の葉のやうに過されて了つたに違ひない。男と一緒にゐるのに、それが宗教によつて神聖にされない。非難すべきもの、やうにいふ考が、彼女には滑稽に思はれた。さういふ要求の基礎は自由な人間の精神によつて、もう餘程以前から搖動かされてゐたのである。従つて彼女は、恰も輝く朝日に花粉を投げる花のやうに、生を享樂すべき筈なのであつたが、而も心の底では苦しみ續けてゐた。彼女の生存の中には一大深淵が口を開いてゐたのである。彼女は寧ろ偉大なる原則とか動かざる眞理とかいふものをば心中に喚起すべき筈であつたが、さういふものはすべて、やがて來るべき不名譽の前には火に於ける蠟の如く融けて了つた。そして彼女の侮蔑してゐる人々を脚下に蹂躪する代りに、リダは彼等を避けようとした。又彼等を誤魔化さうとした。で、他の人々を前には涙を隠しながら、リダは恰も温い日光の方へ花が向ふやうにノギコヅの方へ赴かずにはゐられなかつた。彼が自分を救つてくれるだらうといふ考は、彼女には卑劣にも罪を犯してゐるやうにも思はれた。そして彼に縋らうといふ我とわが心に反抗して見たけれども自分の無力を自覺する心や人生を愛する心の方が、自尊心や反抗心よりは遙かに強かつた。人間

の愚な事と戦ふ代りに、彼女はそれに對して震へたのである。ノギコヅを眞柄に見つめる代りに、彼女は彼に對して奴隸の如く恐れたのである。で、この乙女のすべての振舞には、恰も翼を截取られてもう永久に飛べなくなつた小鳥の、頼りなげな動作のやうな、いかにも憐れッぽいものがあつた。

彼女の苦悶がどうしても我慢の出来なくなつたやうな時には、リダはいつも無垢な驚嘆の情を以つて兄の事を想出すのであつた。彼女の兄は神聖らしいものなど一向もつてゐなかつた。彼は彼女を、自分の妹たる彼女をば、男性が女性に對する眼光で見たりした。彼は不徳でもあり利己主義でもあつた。けれども彼女が根くもならず、屈辱をも覺えず、自分の生活の一番祕密な事をば自白の出来る人間は、たゞ彼ばかりであつた。彼れの面前へ出ると、凡ゆる物が彼女には單純になり威嚴を失ふやうに思はれた。彼女は妊孕ぢもちになつたのだ……で、それがどうしたのだ？ 彼女は一人の男と關係した？ 其男が自分の氣に入つたから、自分でそれを欲したのだ。人々が彼女を侮蔑したり凌辱したりする？ それが何だ？ 彼女の前には人生がある。太陽がある。廣い……世界がある。又人間は到るところにある……母親が苦しむ？ ナアに、それは母親の勝手だ……。

リダは母親の娘時代を知らなかつた。そして母親は死んで了へばもう彼女の監督は出来ないであらう。人生の途上で偶然邂逅し、一團になつて進んであるからと云つて、二人はお互に自分達の路筋をば邪魔し合ふ必要はないではないか？

リダは兄と同じやうに自由な振舞は出来ぬと思つた。若し今彼と同じやうな事を考へてゐたとすれば、それはたゞ、彼女が優しい驚嘆の眼で眺めてゐる、逞しい物靜かな、かの兄といふ人間の影響を受けたにすぎなかつた。と、自由な強い新思想が彼女の腦中に醗酵して來たのである。——若しこれが兄さんでなくて、知らない人だつたとしたら……と、彼女はビクビクしながら考へたが、この破廉耻な而も心を誘はるゝ假定はすぐ打消して了つた。

そこで彼女は再び又ノギコヅへ歸つた。そして奴隸のやうに身を屈して、只管彼れの宥恕と其愛とを希つた。

彼女は或魔力に捉はれてゐるやうな心持がした。そして結果のない戦闘の爲に心中なる最後の力と色彩とを失つて了つた。

と、足音が響いたので、彼女は顧返つた。

ノギコヅとサニンとが、高い草の上を一直線に踏みしだいて、黙々と近づいた。二人の顔は黄昏の中によく見えなかつたが、リダには恐しい時機が近よつた事が感じられた。彼女は、恰も生命が彼女を見棄てゝもしたやうに、眞蒼になつて、ハツと氣が遠くなつた。

——さア。と、サニンが云つた。ノギコヅを連れて來たよ。お前に言ひたいと思つてる事はね、この男が自分で云ふだらう。少しそこでジツとしてお出で。私はお茶を一杯のみに行つて來るか
ら。

彼はそゝくさと身を返して大股で立ち去つた。で、一寸の間、彼れの眞白な襯着が見えてゐた。

が、それがだん／＼に暗い方へ消えて行つて、やがて木蔭へかくれて了つた。と、四周は再びシ
ンとなつた。二人には何だか彼が立去らずに静かな木の蔭へでも匿れてゐるやうな心持がしたの
である。

ノギコヴとリダは彼を見送つたが、二人の間に話合ふべき事は、もうすべて云ひ盡されて了つ
てゐるので、跡はたゞ大きな聲でそれを繰返すにすぎぬやうな気がしてゐた。

——リディア・ペトロヴナさんと、ノギコヴは優しく云つた。彼れの聲音はいかにも悲しげで
あつた。いかにも心の底から迸り出るやうであつた。と、リダの心はもうなよ／＼となつてゐた
のである。

——この人もさうなんだわ。同病相憐むといふんだわね……………なんて氣の毒な方でせう……………
なんて善い方でせう……………と、嬉しくて悲しくて、乙女はさう思つた。

——リディア・ペトロヴナさん、僕は何もかも知つてゐます……………と、ノギコヴは自分自身の
行爲と惱しげな乙女の可憐な姿に對していとゞ愛撫の念を増すやうに感じながら續けた。けれど
も、僕は貴女を前と同様に愛してゐるのです……………多分……………貴女も一度は僕を愛して下さるで
せう……………貴女は僕の妻君になつて下さいますか？

「こんな事は無暗に云つちやいけない。と、彼は思つた……………俺がこの女の爲に犠牲となる事な
ぞは知らせるには及ばないのだ……………」

リダは黙つてゐた。二人の周圍には、靜寂の中をば、蘆荻の上に涓々たる音をさせて、水の女

神のさゝやく聲がきこえた。

——僕等は二人共不幸です。と、ノギコヴが云つた。と、この言葉は自分の心の底から出て來
たやうに、彼には感じられた。けれども、多分、僕等二人にとつては、この世の中は却つて樂し
いものになるでせう。

感謝の涙がつとリダの眼に迸しつた。彼女は彼れの方へ顔を上げて云つた。

——え……………多分……………

——神様は御存じです！ 妾は貴兄の良妻になります。そして貴兄を愛します。貴兄を尊敬し
ます……………と彼女の眼は語つてゐた。

ノギコヴはこの眼光を見たので、彼女の前に跪づいて、打顫うちふるふ彼女の手に接吻した。喜びにた
へぬ情緒が彼れの心中に込上つた。と、その情緒はサツとリダの心に傳はつて、耻かしいといふ
病的な意識は、忽ちどこへか消失せて了つた。

——これでいゝわ……………妾はまた幸福になれるんだわ……………可愛いお方、お氣の毒なお方……………
と、彼女は自分の幸福に咽び泣きをしながら考へた。彼女はノギコヴの手を曳きよせて、身を傾
けながら、平生から好きだと思つてゐた柔かい、絹のやうな彼れの髪の毛の上へ接吻した。と、
ザルデインの事がふと頭の中へ浮んですぐ消えた。

もう大抵話のついた頃だと思つて、サニンが立歸つた時には、リダとノギコヴが互に手を取交
して、ひそ／＼と仲善く話合つてゐる姿が目に入つた。ノギコヴはいつまでも變らずにリダを愛

すると云つてゐた。リダは今彼を愛すると答へてゐた。そして彼女は本當の事を云つてゐるのであつた、それは彼女が愛と幸福とに憬れてゐたからである。で、その愛と幸福とを彼によつて求めようとしてゐたからである。

こんな幸福な思ひをした事は曾てないやうに、二人には思はれた。二人は嬉しくも信用深くもあるやうな眼でどきまぎしながらサニンを見た。

——うむ、わかつてるよ。と、サニンは二人を見つめながら眞顔で云つた。神の恵みによつて……二人とも幸福になるが、……。

彼はまだ何か云はうとしたが、大きな聲で噓した。

——濕ッぽくなつた……感冒でも引くといけない。と、彼は眼を擦りながら云つた。

リダは笑つた。と、その笑顔は朗らかに嬉しさうに川の上へ反響した。

——私は行くよ。と、一寸間を置いて、サニンが云ひ出した。

——どこへね？ と、ノギコがきいた。

——なアに人が私を探しに來たのさ……スプロジツチとそれからあの士官さ……それトルストイ崇拜者さ……何とか云つたつけね？……獨逸人さ……ひよる長い……ひよる長い……

——フォン・ドイツさん！ と、意味もなく笑ひながら、リダが云つた。

——そいつだ……奴等は我々をある會合へ招待しに來たのさ……が、私はお前達が家にゐないと云つて置いたよ。

——なぜよ？ と、リダはまだ笑ひながら訊いた。妾達も一緒に行かれるのにね。

——爰にお出でよ。と、サニンは答へた、若し私が誰かと一緒にゐたら、行きやしないよ、私ならね……。

二十四

と、彼は立ち去つた。

夜が來た。星は流るゝ水の中でキラキラと震へてゐた。

暗くて蒸暑い夕方であつた。雪は生氣のない眞黒な木々の梢を越えて、恰も或神祕な標的に達せんと忙ぐものゝやうに、空の一端から一端へ、續々と這つて行つた。

葉枝の間のそちこちに、口を開いた縁がかつた空隙には、蒼白い星が絶えず見えたり躲れたりしてゐた。上では脅かすやうな一定の運動が凡ゆる物を引裏んでゐたが、下では地が或期待の下に緊張して、微動すらもしなかつた。

この靜かな中で、爭論する男達の聲々が、鋭く又烈しく響いた。

——たとへどうあらうと……と、フォン・ドイツは長い脛をば鶴の如く無器用にガクリと躓かしながら叫んだ。

基督教は人類に盡きざる財寶を興へたものです。一般に分りやすい完全な教は唯それだけです。

よ。

——さう……と、ユリイは自分の前を歩いてゐる士官の肩の上をば腹立たしげに睨みつけながら、頑固に頭を掉つて反駁した。然しですね。人間の獸的本能に對する戦ひでは、基督教も亦他の一切の宗教も同様力の足らん事を示してゐます。

——どう「示して」ゐますかね？ と、フォン・ドイツは赫として呶鳴つた……一切の將來は擧げて基督教に屬してゐます。ところが君はそれをば、何かもう棄られて了つたもの、やうにして論じてゐるのです……。

——基督教には將來はありませんよ。と、ユリイは士官の白綿服の上についた油染みた斑點をば苦々しげに見つめながら遮つた。若し基督教がその發展の絶頂に達した時代に人間を服従させる事も出來ず、それで詐偽師連の手中に落ちて、その陋しむべき虚偽の道具にコキ使はれたものとすれば、「基督教」なる言葉すら既に平凡な馬鹿げきつたものになつてゐる現代にあつて、奇蹟を待望まうとするぐらゐ滑稽な事はないでせうよ……歴史に容赦はありませんよ、一度舞臺に上つたものはもう、決して二度とは歸らぬでせう……。

足の下の舗石道はもう殆ど見えなくなつてゐた。林の中はだん／＼暗くなつて、人々はウツカリすると傍に立つ町柱に突當りさうになるほどであつた。で、お互の顔がよく見えないので、彼等の聲々はいかにも不自然に響いた。

——基督教が舞臺を去つた？……と、フォン・ドイツは大袈裟に驚き且つ怒つて絶叫した。——勿論。と、ユリイは頑固に續けた。さう云ふと君は驚くでせうよ。許すべからざる思想の

やうに思つてね……けれども、モオゼの立法が消えて了つたやうに、又佛陀や希臘の神々が死んで了つたやうに、基督も同様に死んだのです……それが進化の法則ですよ。何だつてそんなに恐れるんです？ 君は進化論の神聖を信じませんか？

——勿論、信じない！ と、フォン・ドイツは問題それ自身よりは寧ろユリイの得々たる聲に答へながら、不興氣に云つた。

——一人の人間が永遠の法則を創るなどと、どうして君にそんな事が主張し得られるんでせう？……。

「呆痴者だ！」と、彼はフォン・ドイツの事をばふとさう思つた。この男は彼ユリイよりも遙かに愚であつて、彼にとつてかくまで明々白々な事が、奴にはどうしても呑迄めぬのだ、といふ愉快な而も動かすべからざる確信が……どうかして奴を云ひ伏せて、この議論に勝つてやらう、といふイライラする欲望と、互に彼の心中で錯綜した。

——かりにそれはさうとして置かう……と、フォン・ドイツは昂奮して答へた。凡ゆる將來は基督教の土臺の上に立つてゐる……基督教は棄てられたものではなくて、却つて穀物の種のやうに地面から芽を萌いて、それから實を結ぶものですよ……。

——僕はそんな事は云はん……と、ユリイは一寸混乱して答へたが、その混乱した事が自分ながら腹立しかつた……僕はかう云ふつもりだつたのです……。

——いや、失禮ながら……と、フォン・ドイツは勝誇るやうに遮つたが、いかにも其利を失

つては大變だといふやうに、クルリと身を返すと、歩道から踏外した……君は慥にさう云ひましたよ……。

——さうぢやないと云つたら、さうぢやないのです！……君は妙だ……と、ユリイは、この愚劣なフォン・ドイツが一寸自分よりは惻巧さうに思はれるに違ひない、と思ふと無性に腹が立つて遮つた……僕はかう云ふつもりだつたのです……。

——さう、恐らくね……僕が君の言葉を勘違へてゐたのなら、宥してくれたまへ。と、フォン・ドイツは狭い肩を聳やかして鷹揚に微笑みながら云つた。と、それは、ユリイの心の中しした事を云つたので、ユリイが云はうと思つた事は、すべてもう後馳だ、といふ事をユリイに示す爲であつた。

ユリイはそれと氣がつくと咽喉が焼きつくほど癩に觸つた。

——僕は基督教の偉大なる役割は否定しやしない……。

——と、君は自ら矛盾してますよ！ と、フォン・ドイツはます／＼勝誇つて叫んだ。彼には自分がユリイより優れてゐる事が満足であつた。彼れフォン・ドイツの脳中にいかにも整然と排列されてある事の、その大體すらもユリイには理解する事が出来なかつたからである。

——君には僕が矛盾してゐるやうに思はれるでせうよ……併し事實上僕の考は絶対に論理的なのです。僕のいふ事が君に分らなくても、それは僕の誤りぢやありません。と、ユリイは苦しげに叫んだ。僕は云つたのです、基督教は殘骸にすぎないので、そんな物から人は救済などを望め

ない、と云つてゐるのです……。

——さう……けれども君は基督教の慈悲的な影響は否認するでせう？ 即ち日常秩序の根本をな？……と、フォン・ドイツは自分の心から離れて了つた思想をば、再び捉まへようと努めながら、大聲で叫んだ。

——僕はそれを否認しません……。

——いや、僕はそれを否認するね……と、サニンは皮肉に云つた。彼は始終黙々として二人の後ろを歩いてゐたのだが、彼の物靜かな又揶揄するやうな聲は論者等の沸立つやうな調子と奇妙な對照をなした。

ユリイは黙つて了つた。この明らかに嘲笑を帯びた落つき拂つた調子が彼を傷けたが、彼は何と答へていゝのか分らなかつた。彼はサニンと論ずる事を好まなかつた。なぜといふと、彼の平生用ひいてゐた言葉はサニンと話す際に云はなければならぬ言葉と、全く一致しなかつたからである。ユリイは堂にツル／＼する表面を推して壁を顛覆しようとするやうな心持をしてゐたのである。

が、フォン・ドイツは拍車を鳴らしながら、意氣惡さうな大聲で叫んだ。

——なぜですか？……失禮ですが？

——まア、さうしたものですよ……と、サニンは不得要領に答へた。

——「さうした」とはどうしたのです？……或一事を主張するには、それを證明しなけりやな

りますまい。

——なぜ僕がそれを証明しなけりやならんのだらう。

——「なぜ」とはどういふんです？

——僕は何も証明などする必要がないね……それは僕だけの確信なんだ。何も君を説伏せたくはないのさ。だからそんな事は不必要だね。

——君の推論に従へば、と、ユリイは控目勝に云つた。凡ゆる文學を焚いて了はなけれやならなくなるでせう。

——なアに……なぜね？……と、サニンが答へた。文學は甚だ尊重すべき物さ、又興味のある物さ……文學はね！……僕の考ふる眞の文學はね、自分が何もせず、たゞ自分だけ特に精巧だといふ事をば、全世界に證據立てようとする、時々出て来るおつちよこちよいのやうに論戦などするものぢやないよ……文學は全人生を改造するよ。又一の時代から他の時代へかけて、人類の血液の中へまで浸徹するよ……若し文學を絶滅して了つたら、人生はその色彩を失つて、眞暗になつて了ふだらうさ……。

フオン・ドイツは立止まつて、自分の前をユリイに通過ぎさせながら、サニンの傍へ押列んで訊いた。

——いや、どうぞ、どうぞ……君の吐かれる意見は僕には頗る面白い……。

——僕の意見は至極單純なものさ。と、サニンは笑ひながら云つた。お望みとあらば、述べま

せうかね。僕の考によれば、基督教は人間世界の生活中で悲しい役目を演じて來たのさ……人類が自らこれ以上苦しむ事は出來ないと感じた時代には、又卑賤な者共や不幸な者共が不條理な不正な耐へがたい事物の秩序に異議を立て、將にそれを顛覆しようとしつゝあつた、一言にして云へば彼等同類の血を養つた一切の物をば絶滅させて了はうとしつゝあつた時代には、丁度そつういふ時代にはね、基督教は謙遜で平和好で且つ安請合ばかりしてゐたのさ……戦争は罪とするし、永遠の幸福は約束するし、惡に對する無抵抗の宗旨は説くし、要するに人間の凡ゆるエネルギイを骨抜きにして了つたわけだね。そして一世紀間の束縛から脱しようとして、だん／＼成長して行つた、かの偉大な獨立不羈な者共が、愈よといふドタン場へ現れると、まるで馬鹿か呆痴の如く、ぐにや／＼になつたり、尻込みしたりして使へばもつと善く使はれる勇氣を持ちながら、自分等の手で自分等の身の皮を剥ぐ始末さ？ 無論、奴等の敵だつてそれ以上の事は要求しなかつたのだ……そこで新なる叛逆が爆發する爲には、どうしても尙數世紀間の壓制が必要となつたわけだね。基督教は、奴隷たるべく餘りに従順でない、かの人間の箇性といふ衣服を着て來たのだ。贖罪の金翠と云つたやうな其衣服の下には、凡ゆる自由の色彩をば匿して來たものだ……今日自分等の幸福を壟斷してゐられる強者共を欺いては、我々の間では何人も知る事の出來ぬ將來の中へ、自分等の生活の重心をば移して來たものだ……従つて人生凡ゆる charme (幻美) は消滅して了つたわけさ。剛毅も失なふ、自由な情念も失なふ、同様に美も失つて、殘るものはたゞ未來の黄金時代といふ不條理な義務と夢想だかりだ……無論、他人の爲の黄金時

代さ……さうさ、基督教は悲しい役目^{ロケル}を演じて来たわけさ。そしてキリストといふ名前はいつまでもく人間のあひだに呪咀として残るだらうよ……。

フォン・ドイツは不意と立止まつた。と、其長い手が暗闇でブラ／＼動くのが人々の眼に這入つた。

——やア、どうも……と、彼は呆れたやうな閉口したやうな妙な聲で云つた。

ユリイの心中には複雑な感情が湧き起つた。一面から見ると、サニンの言葉には別段とび放れた事もないやうに思はれた。又彼れユリイだつて自分の考へた事をば同様に云ひ得られたであらうなどとも思はれた。が、他の一面から見ると、ユリイが自分の心で壓付けようと努めてゐた、「未知」といふ恐ろしい不安が、サツと其影をば彼れの思想中へ投げたのである。と、その祕密な不安が少からず彼を傷つけた。

——と、君はですね、若し基督教が豫防しない場合に突發すべき、かの血みどろな時代を想像することが出来ますか？ と彼は妙にイライラした聲でサニンに云ひかけた。

——さやうさ！ と、サニンは輕蔑した態度で云つた。何よりも先づ、基督教の覆面を蒙つて殉教者等の血を濺いだ、例の壇上を見なけりやならんね。人間が人を殺したり、人を牢獄へ叩込んだり、人を癲狂院へ押込めたりしはじめたのは、つまりそれから以後の事さ……もうそれ以上の世界的革命は行ひ得られなくなつたほど、それほど多量の血を日ごとに流したので……で、就中最も悪い事は、人間共が、たゞ血みどろな革命だとか、無政府主義だとか、いふものによつ

てのみ、自分等の生活を改善させてゐる癖に、而も自分等の行動をば、人道主義だとか、博愛だとか、そんなものゝ上へ築きあげる事をやめない一事だ……結局、そいつが、愚な、虚偽な、まやかしの悲劇になるのだ……肉にも魚にもなりやしない！ だから僕はね、まだ二千年も續かうといふ、灰色な、植物的な人生よりは、寧ろ一ト思ひの世界的大破裂を擇ぶね……。

ユリイは何とも答へなかつた。彼の思想は不思議にも耳に這入つた言葉の意味上には止まらないうで、却つてサニンの人格の上へ止まつたのである。と、サニンのわかりきつたやうな確信的態度が、彼にはどうも我慢が出来なかつた。

——君、どうかね？ と、彼は無性にたゞサニンを傷つけてやりたくなつて云つた。なぜ君はいつでも小さな子供でも教へるやうな調子で物を云ふのか、どうかそれを僕に云つてくれたまへ。フォン・ドイツは仰天して、拍車の音を立てながら、何か仲裁めいた事をば、どきまきと口の内で云つた。

——そら、またそれだ。と、サニンは癩に觸つて云つた。君は何を怒つてゐるんだい？

ユリイは自分の云つた事は場合が悪かつと思つた。で、その先はもう云ふまいと思つたのだが、傷けられた自尊心に驅られて、つひ口を迂らして了つた。

——その調子が慥かに不愉快だ！ と、彼は頑固に又脅かすやうに突込んだ。

——これは僕の持前の調子だよ。と、サニンは腹が立つやうな和めてやりたりやうな妙な言方で云つた。

——それがいつも時宜を得てないのだ。と、ユリイは我知らず聲を高めて續けた……そんな確信がどこから出て来るものか、僕にやどうもわからん……。

——恐らく君より僕の方が慇巧だといふ自覺からだね！ と、サニンは落ちつき拂つて答へた。ユリイは頭から足の先までブルブルと慄へながら立止まつた。

——おい、君！ と、彼の聲が唸いた。顔はわからなかつたが、彼が眞蒼になつた事は人々に感じられた。

——怒りたまふな！ と、サニンは靜に彼を押し止めた。僕は何も君を怒らせるつもりぢやないのだ……。たゞ自分の考を卒直に述べたばかりさ。それはね、君が僕に對して持つてる考も、フォン・ダイツが僕等二人に對して持つてる考も又それに準じたそれらの考も、すべて同じやうな考へなのさ……それが自然だよ……。

サニンの聲はいかにもハツキリとして、いかにも愛相がよかつたので、ユリイはすぐ黙つて、それ以上大きな聲を出すのは馬鹿らしいと思つた。フォン・ダイツは自分にとつては明らかに心苦しく思ひながら、拍車をカラカラと鳴らして、苦しげに息をついた。

——併し、僕は少くとも君に面と向つてそんな事を云やしない……。と、ユリイは口籠つた。——入らざる遠慮だよ……。ねえ、僕は今君達の議論をきいてゐたが、君等の言葉から察すると、君達はお互ひに上へ出よう／＼と欲してゐるのだ……。つまりたゞ形式についてにすぎないのさ……。僕はね、僕は自分の考へてゐる事を云ふのさ。ところが反對に君達はね……。君達は

君達の思ふ事を云はないのだ……。そいつは面白くないよ。我々が若し、もつとザツクバランにやつてゐたらね、これよりズツと面白くなつてゐるだらうさ！

フォン・ダイツは忽ちカラ／＼と笑つた。

——そいつは妙だ！ と、彼は賛成して云つた。

ユリイは黙つてゐた。彼の怨みは和らげられてゐたのである。よし讓歩した事が彼には面白くなつたとはいへそれでも彼は愉快に感じてゐたのである。が、彼はそれを色にも出さうとは思はなかつた。

——が、そいつはあんまり原始的すぎるやうだね！ と、フォン・ダイツは眞顔になつて云つた。

——そして君はどこまでもゴチャ／＼と錯雜つた事を欲するのかね？ と、サニンは訊いた。フォン・ダイツは肩を聳やかして、物思はしげな顔付になつた。

二十五

彼等は並木街フウルツアルを通過して、場末の寂しい町へ這入つた。そこは並木街フウルツアルよりはズツと明るくて板敷の歩道が眞黒な地面の上へハツキリと見えてゐた。

上では異様に茫漠たる蒼白い空が擴がつてゐて、雲が渦卷いたり、星が粗らに輝いたりしてゐた。

——爰だ、と、フォン・ダイツが云つて、低い扉を開けると、その中へ消えた。と、やがて老犬の吼ゆる皺喰聲とそれから石段の上で叫ぶ誰かの聲がきこえた。

——^{シュニク}Sun (犬の名) …………… ^{トウベウ}Tout beau (静し)

廣い空虚な中庭が三人の前に現れた。後の方に黒いジツとした或塊が立つてゐたが、それは蒸汽磨車であつた。そしてその黒い細い烟突が寂しく物悲しげに遙かに遠い雲の方へ聳えてゐた。その邊には薄暗い納屋ばかりあつた。木はなかつたが、たゞ小家の窓下に形ばかりの前栽があつて、その開いた窓からは暗闇へ一ト條光線が洩れて、それが緑色の木の葉を照らした。

——陰氣なところだ。と、サニンが云つた。

——磨車はもう餘程以前から用ひないのですね？ と、ユリイが訊いた。

——え、……………ズツと前から。と、フォン・ダイツは答へて通過ぎざまに、燈のついた窓の中を見ると、満足らしい聲で附加へた。やア……………もう連中が見えてゐる……………。

サニンとユリイとは柵を横ぎつてテラリと見た。明るい窓匡の間へ、人の頭が動くのや烟草の青い烟が立迷ふのなどが見えた。と、肩幅の廣い、縮れツ毛の男が一人窓のところへ現れた。

——そこにゐるのは誰？ と、彼は聲高に訊いた。

——我々ですよ。と、ユリイが答へた。

石段を登ると、彼等は一人の男に突當つた。其男は慇懃に彼等の手を握つたのである。

——貴君がたはもうお出でにならないかと思ひました。猶太人の強いアクセントで嬉しさうな

聲が云つた。

——ソロヴィチクさん……………サニン君……………と、フォン・ダイツは紹介して、暗隅にかくれてゐる男の打震へる冷たい手を握つた。

ソロヴィチクはおどろしなから笑つた。

——非常に喜ばしいです……………貴君の事はとうからもう色々伺つて居りました！……………貴君、實に……………とサニンの手を離さずに後退りしながら、彼は口籠つた。

彼はユリイの脊中に突當つたり、又フォン・ダイツの足を踏んだりした。

——御免なさい、ヤコヴ・アドルフオギツチさん！ と、彼はサニンから離れて、フォン・ダイツへ掴まりながら云つた。

暗い立關で彼等が扉を探し出すまで、こんな騒ぎは暫く續いた。

立關には色々な帽子が釘へ引懸つてゐた。その釘は周到なソロヴィチクが特にこの夜會の爲にそこへ取付けたものであつた。窓匡の縁には緑黒い麥酒瓶が澤山に積重つてゐた。と、立關も烟草の烟がもう一杯になつてゐたのである。

明るみで見ると、ソロヴィチクは眼の黒い、縮れツ毛の、齒の汚い、瘦せた、年若い猶太人であつた。彼はたへずおづ／＼と媚びるやうにニコ／＼してゐた。

新來者等は陽氣な聲でドツと歓迎された。

ユリイは窓匡の上に腰かけたカルサギナをばさそくのうちに見てとつた。と、忽ち何もかも彼

の眼には愉快な姿に見えた、恰も閉ぢ込められた室内の會合ではなくて林中の空地に於ける春の宴會で、もあるやうに。

カルサギナはや、體裁ていざいわるさうに可愛らしくニツコリした。

——ねえ、皆さん……もうすべてお揃ひだと思ひますが……と、ソロヴィチクは努めて愉快らしく努めて大聲で叫んだが、滑稽に手を動かすばかりで、弱い彼の聲は殆ど通らなかつた。御免下さい、ユリイ・ニコライエギツチさん、始終貴君を押してばかりゐまして。と、彼は身を傾けて、ニコリと齒みを示せながら云つた。

——何でもありませんよ。と、ユリイは手で彼を支へてやりながら、無造作に云つた。

——いや、我々は揃はんよ。が、他の奴等はどうしやがつたんだ。と、肥つた愛嬌のある大學生が奴鳴つた。脂肪質の丈夫さうな商人風の聲が人々に物を云ひ馴れた人間だといふ事を思はせた。

ソロヴィチクは卓子の方へとんで行つて、小さな鈴を振動かした。そして朝から考へてゐた其思付をば満足らしくニコリと笑つた。

——やめたまへ、そんな……と、大學生が憎々しく云つた。君はいつでもそんな馬鹿々々しい工夫するのだ……全く無益な儀式だ……

——私は……何でもないのですよ……私にね……たゞこんな風に……と、ソロヴィチクは衣兜かぶしの中へ鈴を匿して、困つたやうにニヤ／＼しながら口籠つた。

——僕は部屋の中央へ卓子を置いた方がいゝと思ふ。と、肥つた大學生が云つた。

——早速……さう致しませう。と、ソロヴィチクは卓子の端を捉へて、一生懸命になつたが、中々動かなかつた。

——洋燈……洋燈をお氣をつけなさい！ と、ツボヴが叫んだ。

肥つた大學生は腹立たしげに拳で膝を叩いた。

——そんな大騒ぎをしたまふなよ！ と、彼は憐れなソロヴィチクへ浴びせかけた。

——僕に手傳はせたまへ。と、サニンが云ひ出した。

——え、どうぞ、どうぞ、と。ソロヴィチクは喘ぎ／＼云つた。

サニンは卓子を部屋の中央に置据ゑた。と、彼がそれをやつてゐる間、人々は注意深く彼の脊中や肩の筋肉を見まもつた。その筋肉は薄い襯着の下で樂々と動いてゐた。

——もし、ゴジエンコオさん、貴兄は此會の發起者として、開會の辭を述べなけりやなりませんよ。と、蒼白いツボヴが云つた。彼女の才氣のある眼は、彼女が眞面目で云つてるのか、或は大學生を揶揄つてゐるのか、一寸見當がつかぬやうに輝いた。

——諸君。と、ゴジエンコオは沈着せいちやくの聲を高めてやり出した。我々の會合の目的は、諸君が御承知の事と認めますから、それを披露する事に省略しても差支ないやうに、私には思はれます……

——嚴密に云ふと、僕は何の爲に集つたものか知らなかつたね。と、サニンはニツコリして云つた。が、爰には麥酒があるさうだといふ噂はきいてゐた。

ゴジエンコオは洋燈越しに高慢な眼光でジロリと彼を見て、さて續けた。

——我々の一團は相互朗讀によつて、それから讀んだ書物の批評によつて、又各自獨特の報告によつて、その教育的使命を果さうといふのです……。

——「相互朗讀」ですつて？ それはどういふ意味ですかしら？ と、ツボヴが訊いた。彼女の質問は眞面目か不眞面目か誰にも分らぬやうであつた。肥つたゴジエンコオはサツと赧くなつた。

——私は、「協同朗讀」と云ふつもりであつたのです……で、我々一團の目的は、さういふ方法で、同人の精神的發展を促し、各箇人の意見を開發し、社會民主黨の一團を此都會に創設する基礎を置きたいのであります……。

——なる、ほうど！ と、イヴノヅは滑稽に頸窩を搔きながら、長く引張つた。

——併しながら、我々は追々とそれに着手するのであります……最初からは中々さういふ廣い……。

——或は狭い……と、ツボヴが横鎗を入れた。

——……問題に這入るわけにはゆかないのであります。と、肥つたゴジエンコオは何もきこえない振をして續けた。そこで、我々は第一番に朗讀のプログラムを拵へようと思ひます。今晚の會合は其爲に用ひたいのが私の意見であります。

——ソロヴィチクさん、貴兄の労働者達はお出でになるの？ と、ツボヴが訊いた。

——參りますとも！ と、ソロヴィチクは蜘蛛にでも咬まれたやうに彼女の方へ躍とびのきながら答へた。今呼びにやりました。

——ソロヴィチク君。わめいちやいかん！ と、ゴジエンコオが遮つた。

——もう來てゐます。と、いかにも嚴肅にゴジエンコオの言葉に聽耳を立て、ゐたシヤフロヅが云つた。

戸外の方で、ギイと戸の開く音と、皺枯れた犬の吼える聲とがきこえた。

——參りました。と、ソロヴィチクは夢中になつて、部屋の外へとび出した。

Sul-tan…… Fout beau-au ! と、彼は石段の上でけたましく叫んだ。

扉が開く前は、其扉の外で、重い足音や、人聲や、咳きなどが響いた。眞先に這入つて來たのは、小肥りの工藝大學生であつたが、顔の醜いのと褐色な點だけを除いて、彼は非常によくゴジエンコオに似てゐた。

その後へ續いて、薄汚い眞赤な襯着の上へ胴衣を層ねた、手の眞黒な労働者が二人、テレくささうに又窮屈さうに這入つた。一人はひどく丈が高く又ひどく瘦せて、無髻の貧血的な顔付をしてゐた。今一人は拳闘家といった風であつた。肩幅が廣くて、美しく、毛が縮れてゐた。彼は恰もはじあ都會へ出て來た年若な百姓のやうに、キヨロ／＼四圍を見まはした。ソロヴィチクは其男の側へ躍りよつた。

——皆さん、これは……と、彼は重々しく云ひ出した。

— え、やめたまへ！ と、ゴジエンコオは例によつて遮つた。今日は、連中。

— ビスツオヴ君とクドリアヴィ、君です、と、工藝大學生が紹介した。

ビスツオヴ（寫字生の意）といふ名が髻だらけの拳闘家で、又クドリアヴィ（縮毛の人）といふ名が蒼白く瘦せた労働者なので、それが人々には甚だ滑稽に思はれた。

二人は重々しい遠慮勝な大股で、のそ／＼と部屋を一周した。人々が殊更に親しみ深く差出した手をば、彼等は指も折らずに握つた、ビスツオヴはどきまぎして微笑んだ。又クドリアヴィ、は恰も襯着が彼の咽喉を絞めつけるやうに頸を長くした。そこで二人は、窓匡の上へ座つてゐたカルサギナからはさう遠くない、窓の側へ陣取つた。

— ニコライエヴはなぜ來んのかい？ と、ゴジエンコオは不興氣に訊いた。

— 奴は來られませんでした。と、ビスツオヴは丁寧な答へた。

— ニコライエヴはべろ／＼に酔拂つてゐるのです。と、クドリアヴィ、は後暗い顔をして斷れ斷れに云つた。

— あ、さうか……と、ゴジエンコオはギクシヤク頭を上げて云つた。

この領き方がユリイ・スプロジツチに反感を起させた。彼は肥つた大學生をば忽ち自分の敵だと感じた。

— 奴は旨い事をしたわけさ。と、イヴノヴが口を出した。

犬が中庭で吠えた。

— まだ誰か來るのよ。と、ツボヴが云つた。

— 恐らく巡查かね？……と、ゴジエンコオは平氣を装つて注意した。

— たとへ巡查でも、貴兄に文句はないでせう。と、ツボヴはすぐ突込んだ。

サニンは彼女の才氣ある眼を見つめた。と、其顔は肩へ垂れた編物のやうな髪の毛で快げに颯られてゐた。

— シツカリした娘だ！……と、彼は考へた。

ソロヴィチクは外へとんで行かうとしたが、すぐ氣を變へて、巻烟草をとるつもりだつたのだといふ風をした。

ゴジエンコオは其舉動に氣がついたので、ツボヴに答へず却つて彼へ云つた。

— ソロヴィチク！ なんて君はさう煩いのだ……

ソロヴィチクは眞赤になつた。そして悲しげに又物思はしげに眼をパチ／＼やつた、恰も混亂した臆病な彼の腦中に、人々を好遇しようとする希望が斯う酷く取扱はるゝのは心外だ、といふ考が浮んで來たかのやうに。

— 放つときなさいよ！ と、ツボヴはむツとして云つた。

ノギコヴがガタビシ這入つて來た。

— 來ましたよ。と、彼は嬉しさうにニコ／＼しながら云つた。

— 來たね。と、サニンが答へた。

ノギコヴはニッコリして、彼の手を握りながら、云ひわけでもするやうに、何か彼の耳へ囁いた。

——リディア・ペトロヴナさんは來客があるのですね。
——あゝ、さうかい……………。

——もし、我々はたゞ話ばかりしてるんですかなア？ と、工藝家は面白くなささうに云つた。始めようぢやないですか……………。

——まだ始めなかつたのですか？ と、ノギコヴは彼れの側でビヨイと立上つた労働者等の手を握りながら満足らしく云つた。

病院では診察中彼等を鼻であしらつてゐた醫師が、恰も同僚にでも對するやうに、手を差出したので、彼等は面くらつたのである。

——さう、始めよう。と、ゴジエンコオは不愉快さうな調子で口籠つた。

——さて、諸君、我々は斯の如くにして我々の世界觀を推擴めて行かうといふのであります。箇人的發展に對する最良の方法は、秩序的の讀書と、讀んだ書物に對する思想上の交換にあると考へまして、我々はこの小俱樂部を創設したわけであります……………。

——ヒヤ／＼……………と、ビスツオヴは黒く光る眼で楽しさうに人々を見まはしながらホツと息をついた。

——そこで、かういふ問題が生ずるのであります。如何なる書を讀むべきか……………恐らく諸

君の中の誰方が、概略のプログラムを提供されるだらうと思ひますが……………。

シヤフロヴは眼鏡をかけて、手に一冊の帳面を持ちながら、靜に立上つた。

——私が考へまするには、と、彼は睡くなるやうな乾枯びた聲でやり出した。我々是我々の讀書をば二部に分つ必要があります。我々をして智的發展を期せしめむが爲には、二個の要素が必要な事は云ふまでもありません。即ち、進化的見地よりしたる人生の知識と、及び人生其物としての人生の知識とが、それであります……………。

——シヤフロヴさんとしては珍しい演説ね、と、ツボヴが云つた。

——第一の知識は科學的又は歴史的特質を有する書物の朗讀によつて之を得られます。第二の知識は我々を人生其物のうちへ導く美文學によつて之を得られます……………。

——そんな事はかり云つてゐたら、妾達は皆な睡て了ひますよ。とツボヴが又遮つた。彼女の眼は擲擲ふやうな色を湛へてゐた。

——私は皆さんがお分りになるやうにと思つて、努めてこんな風に申上げてゐるのです……………と、シヤフロヴは靜に答へた。

——さア……………いゝわよ……………仰しやれるやうに仰しやいよ……………と、ツボヴは何氣なく云つた。

カルサギナも亦シヤフロヴの様子を見て可愛らしく笑ひ出した。彼女は眞白な咽喉を露出しにして、そつくりかへつて笑つた。そして其笑聲はいかにも朗らかに音樂的であつた。

——私はプロクラムを一つ作成しました。然しそれを讀上げるのは恐らく御退屈を増すでせう。と、シヤフロヴはチラリとツボヴの方へ視線を投げて、口早に續けた。私はただこれだけ申上げます。ダルキン研究として、「種の根元」から始めようといふのであります。文學方面では、トルストイ……。

——無論、トルストイ！ と、フォン・ドイツは甚だ満足らしく賛成した。そして巻烟草へバツと火を點けた。

シヤフロヴは巻烟草に火のつくのを待つて、やがて統計的に續けた。

——チエクホヴ、イブセン、クニユト・ハムズン……。

——だが、妾達はそんなものは皆な讀んで了ひましたわ！ と、カルサギナは呆れはて、云つた。

ユリイは恍惚として其たつぷりした聲にき、入つた。そして口を出した。

——きつとさうですよ……シヤフロヴ君は爰は日曜學校ぢやないといふ事を忘れてゐるのです……そして、トルストイとクニユト・ハムズンとの取合はせは、頗る珍ですな……。

シヤフロヴは靜に自分のプログラムの辯護についてさまざまの込入つた論據を持出した。が、それは誰にも分らなかつた。

——いや、と、ユリイはカルサギナの視線が自分の上へ落ちるのを心嬉しく感じながら、キツパリした聲で反駁した。私は君と意見を異にします……。

と、彼は自分の見解を展開しはじめた。語るに隨つて、彼は努めてカルサギナの賛成を得ようとした、そして無慈悲にシヤフロヴを攻撃した。彼と殆ど同意見の點までも攻撃した。

肥つたゴジエンコオは代つて答へた。彼は自ら一番教育があり、一番才智があり、又一番雄辯であると信じてゐた。で、この小さな俱樂部を組織するに方つて、自分はその牛耳をとる希望をもつてゐた。と、ユリイの成功がぐつと小癩に觸つたので、どうしても彼と闘はなければならぬやうな氣になつたのである。けれどもスヴロジツチの思想はよく分らなかつたので、總體に於いて彼と論争する事は出来なかつた。そこでたゞユリイの弱點ばかりを突込んで自ら足れりとしてゐた。

長い終極のない論争がはじまつた。工藝大學生もイヴノヴもノギコヴも皆一緒になつてやり出した。烟草の煙の中で、昂奮した人々の顔が見えた。お互ひの言葉は混沌たる中でお互ひに衝突した。そして殆どお互ひにき、取れぬほどであつた。

ツボヴは氣が遠くなつてまじ／＼と洋燈の光を眺めてゐた。カルサギナは茫乎ぼろつとして庭の窓を開き、胸の上へ腕を組み、匡縁へ脊中を押付けながら、我を忘れて夜の暗を見入つてゐた。

彼女は最初何にも見分ける事が出来なかつたが、やがて、暗を横ぎつて、眼の前に薄黒い木々や光を受けた庭の柵や、それからズツと離れて、小徑を横ぎつて草の上へ延びてゐる一ト條の燈光などが、まぎ／＼と浮上つて來た。……生暖い風が彼女の手や肩を撫でたり、顚顚の上へ後れ毛をばふわ／＼と靡かしたりした。カルサギナは頭を上げた。と、だん／＼に明るくなつて來た

夜の空をば、眞黒な雲の亡つて行く姿が、ふと彼女の眼に這入つた。彼女はユリイの事を想つた。又自分の戀を想つた。と、幸福な考や憂はしい考が彼女の若い頭の中へ交るゝ現れた。が、涼しい夜の暗へ五體を曝しながら、そこへジツとしてゐて、恰も凡ての他の聲々よりは遙かに強く響くやうな、喧噪の中から特に浮出して來る男の或聲をば、胸一杯にきいてゐるのは、いかにも佳い心持であつた……。

部屋の内では騒ぎがだん／＼に大きくなつた。誰も彼も隣りの人よりは自分の方が遙かに才智があり教育があるものと信じてゐるので、皆自分の意見に他の者を従はせてやらうと思つてゐるは明らかであつた。そして最も打解け合ふ事までが却つて激論の基となつたほど、それほど不快な何物か、部屋中に充ち満ちてゐた。

——さう、そんな風に君が云はれるならばですな、と、ユリイはカルサギナの面前で讓歩しては大變だといつたやうな調子で云つたが、カルサギナは彼の言葉などには耳もくれず、たゞ彼の聲ばかりをきいてゐたのである。然る時は凡ての思想の根源まで溯らなければなりませんまい。

——さうすると、君の考によれば、何を讀まなければならんでせう？ と、ゴジエンコオは冷笑するやうな敵意を含んだ聲で突込んだ。

——僕は……孔子の書、福音書、傳道の書……。

——聖詩、それから聖傳！ と、工藝家は冷かすやうに遮つた。ゴジエンコオはさうした書物をばまだ一冊も讀まなかつた事などは考へずに、憎々しく笑つた。

——へえ、それはどういふお考ですか？ と、シヤフロヴは興さめ顔に云つた。

——まるでお寺のやうだ。と、ビスツオヴがクス／＼笑つた。

ユリイは赫として眞赤になつた。

——私は串戯じやうたんを云つてるのぢやない……若し諸君が論理的であらうと仰せらるゝならばですな……。

——だがね、君は先刻僕に向つて基督の事を何と云つた？ と、フォン・ドイツは勝誇るやうに遮つた。

——僕の君に云つたのはですな……苟くも人生を研究せんと欲するならば、人と人との關係の上に一定の世界觀を立てんと欲するならば、寧ろ彼等の巨人的ヂヤクニツクなる事蹟にまで溯つた方がいゝぢやないですか。何となれば、彼等は人類の最良なる典型として、彼等自身の生涯の中に、人間道德の最も複雑なる又最も簡易なる特質をば適用しようと努めたからなのです……。

——僕は君とは意見が異ふ。と、ゴジエンコオが遮つた。

——僕は賛成だ。と、ノギコヴは熱心に學生に反對した。

耳も聳れるやうな叫聲が再び起つて、お互ひに何を云つてるのやら全く分らなくなつて了つた。人々が話しはじめた時、ソロヴィチクは急に落ちついて、一隅に陣取り、聽耳を立てた。彼れの顔は最初やゝ子供らしい熱心な注意を示したが、やがて疑はしいやうな又苦しげな小皺が其口元と其眼元に現れた。

サニンは黙々と麥酒を飲み、黙々と煙を吹いてゐた。彼れの顔はつまらなさうであつたが、騒ぎの中で喧嘩腰の調子がきこえはじめた時、彼はつと立上つて、煙草を消しながら云つた。

——こいつは段々つまらなくなる……。

——あんまりですわねえ……と、ツボヴが附加へた。

——空の空なる哉、而して靈の苦患だ。と、イヴノヴは恰も此文句ばかりを考へてゐて、それを發表すべき恰好な時機を待つてゐたものゝやうに云つた。

——なぜですか？ と、褐色の工藝家が意地悪く訊いた。

サニンは彼には一顧をも與へず、ユリイの方へ顧向いて云つた。

——君はね、どんな書物でも、其書物によつて哲學的概念が作り得られるものと、眞面目に考へてゐるのかね？

——勿論。と、ユリイは呆れた顔をして答へた。

——そいつは間違つた考だよ。と、サニンは受けた。若し果してさうならばだね、たゞ一傾向の書物ばかりを人に讀ましたゞけで、それで全人類を變形させ、人間の新典型を創造する事が出来るだらうよ……。人生は其總體中にそれ自身世界觀を形づくつてゐるものさ。文學や我々の思想などは要するに其總體中の最少部分にすぎないのだ。で、世界觀なんてものは人生の哲學でもないのさ。たゞ箇人々々の情調なんだ。だから人間が生きてゐるかぎり、そいつは始終變化してゐるよ……。して見ると君の苦勞してゐる一定の世界觀などといふものは、つまり存在が出来ないやう

なわけになるね……。

——どういふ風に「出来ない」のかね？ と、ユリイは赫となつて叫んだ。

サニンは再びつまらなさうな顔をした。

——慥に出来ないさ……。若しそんな確定的な固定した世界觀が有り得べきものだつたら、人間の思想は停止してしまふだらう。だが、そんな事はないよ。人生の刹那々に新しい言葉が生じて来る……。そして其言葉を豫じめ無際限なものとして我々はそいつを把持了解しなくちやならないのだ……。それから、なんだつてこんな事を云ふかといへば、と、サニンは一寸言葉をきつた。君は君の思ふとほりに考へるが、僕らはたゞかういふ事を君に訊いたつて差支ないだらう。なぜ君が、傳道の書からマルクスまで、數百冊の書物を讀破したほどの君がさ、なぜ一定の世界觀を立てる事が出来なかつたものだらう？

——なぜ僕が一定の世界觀を立てなかつた？ と、ユリイは不興氣に答へた。彼れの黒い眼の中にはキラリと威嚇が光つた。僕は一定の世界觀を有つてゐる……。恐らく不精確なものかも知れないが、有つてゐる事は有つてゐるよ。

——では、なんだつて今更また爰でそいつを立てようとしてゐるのだい？

ピストオヴはくすく笑つた。

——シツ……。と、グドリアヴィイは頸を伸ばしながら、輕蔑するやうに彼へ云つた。

——なんて鋭敏なんだらう！ と、カルサギナは天真爛漫にサニンを嘆美しながら考へた。

彼女はジツと彼を見た。それから又ジツとスヴロジツチを見た。彼女の全身に耻かしさと嬉しさとの錯雑つた一種の感情がサツと浸徹つた。恰もこの二人の男がたゞ彼女を自分のものにしたばかりにお互に論じ合つてゝもゐるやうに。

——従つて、と、サニンは續けた。徒らに君が求めてゐる事をば君は一向に求めてはゐない事になるのさ。僕はね僕は明らかに斯う認めるよ。爰に集つた人々は、たゞ自分々の人生の見方を以つて他に強ひようとするのだ。そして自分が云ひ伏せられる事ばかり恐れてゐるのだ……：ザツクバランに云へばね、實にもうつまらん事なのさ。

——一寸、君！ と、ゴジエンコオは太い聲を強くして遮つた。

——いゝや、と、サニンは慨然として云つた。たとへば君だ。一番立派な人生觀をもつてゐる君だ。澤山の書物を讀んだ君だ。誰も皆さう認めてゐる君だ。さういふ君がさ、他の人々が皆君と同意見でない爲に、君は一人で憤つてゐるのだ。そして其上に、君は君に對して何にも悪い事などしないソロヴィチク君をば侮辱するのだ……。

ゴジエンコオは何を思ひもよらぬ事でも聞いたやうにサニンを見つめながら、吃驚して押黙つた。

——ユリイ・ニコライエギツチ君。と、サニンは快活に云つた。僕の答が少々亂暴であつてもそいつを憤つてくれたまふな。僕の見るところによればね、君の心中は全く混亂してゐるのだよ。

——混亂？ と、ユリイは眞赤になつて受けた。彼は憤つていゝか悪いかわからなかつたので

ある。が、その言葉がいかにも肯綮に中つたので、愛相のいゝ物靜かなサニンの聲は何となく彼を傷けたのである。

——君にはよくわかつてゐるさ。サニンは笑ひながら答へた。こんな子供らしい事は氣にとめな

いに限るよ。それでなくても一切の事は、いゝ加減もう面倒くさいものだからね。

——おい、君！ と、ゴジエンコオは眞紅になつて云つた。君はあんまりひどい事を云ふ。

——君よりやひどかないよ。

——どうして？

——考へて見たまへ。と、サニンは快活に云つた。君のする事は、僕の云つた事よりや、遙かに傍若無人だよ……。

——僕にやわからん。

——そりや僕が悪いのぢやない！

——何？

サニンは應じなかつた。が、帽子を取りながら云つた。

——僕は行くよ……もうつくづくつまらない。

——全くだ。丁度麥酒もおつもりだ！ と、イヴノヅが賛成して、玄關の方へ行つた。

——まア、こんなものだわねえ。と、ヅボヴが云つた。

——一緒に行つて頂戴、ユリイ・ニコライエギツチさん。と、カルサギナが呼懸けた。それか

らサニンの方へ願向いて、さよなら！ と云つた。

と、二人の眼は出會つた。乙女は恐しいやうな楽しいやうな気がしたのである。

——いやねえ！ と、ツボブは出てゆきながら云つた。この小會は花が咲きもせぬうちから凋んで了つたんだわ。

——なぜですか？ と、悲しげな聲が訊いた。と、ソロヴィチクは町柱の後方から出て来て、彼等の行く手に立ちどまつた。

と、人々が彼れの事を思ひ出したのは、たゞ此時ばかりであつた。彼等は彼れの失望した悲しげな顔に動かされたのである。

——ねえ、ソロヴィチク君、と、サニンは物思はしげに云つた。ちきお訪ねしますよ。そして二人で話ませう。

——どうぞ、どうぞ。と、ソロヴィチクは慇懃に腰を曲げて、嬉しさうな聲で云つた。明るい部屋から出たので、外はお互ひに顔が見えぬほど暗かつた。そしてお互ひに聲ばかりきいた。

労働者等は一緒に出て行つた。遠く離れると、ビスツオヴは低く笑ひながら云つた。

——あれさ……あれさ……先生達はいつでもあの通りだ……何かするつもりで集まる事は集まるけれど、誰も彼も皆自分の田へ水を引くのさ……たゞあの大きな男ばかりは氣に入つたね……。

——だが、教育のある先生方の話は、お前には殆どわかるまい……と、クドリアヴィイは息でも詰まるやうに頸を動かしながら、低い腹立たしさうな聲で答へた。

と、ビスツオヴはそれに答へるもの、やうに、小馬鹿にしたやうな口笛を吹いた。

二十六

ソロヴィチクはいつまでも石階の上にヂツとしてゐた。一つも星のキラめかぬ眞暗な空の上へヒタと眼を据ゑながら彼れは瘦せた自分の指先をば器械的に押のばした。

暗い納屋の後ろに、其鐵葉屋根をばカサカサそよがしつゝ、風は密集した幽霊のやうな木々の梢を撓たわにした。上では抵抗する事の出来ぬ或力に追はるゝやうに、雲は走りすぎ走りすぎ……その塊が黙々と水平線へ姿を現すと、及びもつかぬ高さまで舞上つて、それが積層つて重さうな一堆となり、一方の水平線の懸崖へ眞逆様に墜落するのであつた。恰も小動きもせぬ無数の軍隊があつて、それが眞黒な軍旗をおし擴げつゝ、地球の他の盡頭はつれで彼等を待うけ、やがて續々と進軍を開始しようとするもの、やうであつた。そして刻一刻と落ちつかぬ風が遠い闘ひの物音を送つて来るもの、やうでもあつた。

ソロヴィチクは子供らしい恐怖の情でヂツと空を瞻仰げてゐた。この夜のやうに、彼は曾て、かゝる洪大無邊な渦巻く混沌界カオスの中にあつて、いかに自分が小さく弱く且つ物の數ならぬ身の上であるかといふ事をば、これほどハツキリと感じた事はなかつたのである。

——あゝ、神様、神様！と、彼は太息をついた。
かく空や夜に面と向つてゐると、彼はもう世間の人々の眼の前にゐる時とは、全く別な心持がした。彼れの舉動には不安らしい感歎な様子が失つてゐた。氣に入らうとする小犬のやうな口吻へたえず露してゐた其汚い齒は、やがて年若な猶太人の薄唇の下へかくれた。と、其黒い眼は物悲しげに又眞面目になつた。

彼は靜に家の中へ歸つて、要らない洋燈を消したり、無器用に卓子を置き直したり、椅子を整頓したりした。部屋の中は煙草の煙が棚引いたり、床板の上には葉卷の端がへし潰されたり、燐寸の燃殻が散らばつてゐたりした。ソロヴィチクは例の通り何とも云はれぬ夢のやうな嬉しさを感じながら、掃除にとりかゝつた。で、自分の住んでゐる場所をば、一生懸命に美しく又シヤンと整理した。そこで洗水の這入つた古バケツをとり、その中へパンを碎き込み、身を僕めてそれを片手で提げ、一方の手はぶら／＼させながら、小刻の歩武で、暗い中庭を横ぎつた。

彼は先の見えるやうにと窓の上へ洋燈を置いた。か、戸外は薄氣味わるく眞暗であつた。で、彼が犬小舎の傍へ達する事の出來た時には、ソロヴィチクは心から嬉しかつたのである。

むく犬のシユルタンは暗隅の中で姿は見えなかつたけれど、其濕ッぽい熱氣をば彼れの周圍へ發散させてゐた。若者が近づくと、犬はハツハツ喘ぎながら、惱ましげに鎖をガヂヤつかせて這出して來た。

——おゝ、シユルタン……………クシユ、クシウ、と、ソロヴィチクは自分の聲で自ら勢ひをつけ

ながら云つた。シユルタンは暗隅を横ぎつて、其冷たい濕ッぽい鼻面をば、主人の手の中へ擦りつけた。

——それよ、それよ……………と、バケツを置きながら、ソロヴィチクが云つた。

シユルタンはクンクン鼻を鳴らし、腮をガヂガヂ云はせながら、食べはじめた。と、其間、ソロヴィチクは彼れの前にヂツとしてゐて、暗の中で微笑んだ。

——どうする事が出來よう？……………と、彼は考へた。あの人等が考へるのは全く異つたやうにあの人等を考へさせる事が俺に出來るか知らん？……………どうして生きてよいか、又どう考へていゝか、其を云つて呉れるのを、俺は待つてゐたのだ……………神は俺に豫言者の聲を與へては下さらなかつたのだ……………すると、俺はどうしていゝのだらう？……………

シユルタンは満足らしく鼻を鳴らした。

——食べる、食べる……………それよ！と、ソロヴィチクが云つた。俺はな、お前がもう少し樂に動けるやうに、鎖を解いてやつてもいゝのだ、けれど、俺は鍵をもつてゐないのだ。俺はそれほど弱いのだ……………あの人等は利口な人達だ。皆立派な方々だ……………あの人等は何でも知つておゐでになる……………そして基督の教を奉じてゐられるのだ……………こんな事は皆俺が悪いからかも知れない。が、俺はたつた一ト言あの人等に云はなけりやならないのだ。けれど、それを云ふ事が出來ないのだ……………

遙かに遠い町の外で、惱ましげな口笛のやうな聲が長々ときこえた。シユルタンは立上つて、

聽耳を立てた。と大きな滴が其鼻面から垂れて、ポタポタとバケツの中へ落ちた。

——さア、食べる、食べる……あれは汽車の笛だ！ と、ソロヴィチクは犬の動作を察して云つた。

シユルタンは苦しきうに太息をついた。

——たとへ人間はこんな風に生きてゆくものだとしても……でなければ、生きてはゆかれな
いのだ！……と、ソロヴィチクは愁はしげに肩を聳やかして、大きな聲で云つた。

と、永遠のやうに盡頭のない、闇から闇へ沈んでゆく人間の塊が、暗黒に横きつて、彼れの心へ現れた。それは始めもない終もない世紀の連続であつた。光りもない感覺もない又中斷するものもない苦痛の連鎖であつた。そして神の在しますいと高いところは永遠の沈黙があつた。

シユルタンはガタリと空のバケツを顛倒した。と、鎖をガチャ／＼させながら、尾を掉つた。
——お、食べたな？ さうか、さうか……。

ソロヴィチクは犬のもぢや／＼した脊中を撫でてやつた。彼は手の下で嬉しげに身を捻らす生きた肉體を感じた。そこで家の方へ赴いた。

シユルタンが後ろで鎖を鳴らした。と、庭は一時明るく見えたが、粉磨小屋の大きな建物が、空を攢す煙突と巨大な棺桶のやうな細長い納屋と共に、却つて一層眞黒に見えた。長い光線がト條、窓から小庭を横きつて延びた。と、ヂツと身動きもせぬ花の、神祕めいた小さい頭が、凄じい雲が其巨大な眞黒な軍旗をば物悲しげに展舒する暗黒な空の下で、おづ／＼とをれてゐる

姿が眼に這入つた。

自分の孤獨が悲しくて、怖しくて、もう取返しのかかぬ喪失したやうな感じをしながら、ソロヴィチクは部屋へ歸ると、卓子の傍へ腰かけて泣いた。

二十七

蕩兒の五體は「女」といふ唯一語をきくと、恰も赤裸になつた神経の端のやうに、ぶるぶるツと震へるのである。ヴォロシンの前には、いつのいかなる瞬間でも、常に衣服を脱いで、常に身を献げてゐる女の姿が、まぎ／＼と立つてゐた。丸々として、なよやかに、ポツチャリした女體の上に、纏ひつく女の衣服は、彼れの膝に惱ましい戦慄を覺えさせるほど、それほど迄に彼を刺戟した。ヴォロシンは彼得堡の或大工場の所有者であつた。其工場には數千の生命と生存とが従屬して、彼の爲に働いてゐた。ところが、今、其工場の同盟罷工に際會したので、彼はかの饑乏たる穢苦しい、怨みに充ちた人間共と面談する事を避けて、かくは田舎へ出懸けて來たわけであつた。

彼得堡では、卑猥な烈しい抱擁で毎夜疲れきつた彼れの肉體を苦しめる鍾愛を受けた淫蕩な女共の一群が、彼れの跡に取殘された。そして今この田舎へ來るや否や、彼は先づ小都會の新鮮な若々しい淫女達の事ばかり思つた。彼は彼等をばおづ／＼した臆病な併し又茸のやうに潑刺としたものとして想像した。そして彼等の若々しい清らかな薫香をば遠くから嗅いでゐた。

ヴオロシンは其虚弱な軀へ雪のやうに清白な衣服を着けて、上から下まで香水を芬々とふりかけた。で、ザルデインの友人等は彼には甚だ不快であつたけれど、彼は輕馬車ドロシュケを雇つて、いそいそとザルデインの住居へ赴いたのである。

士官は庭に臨む窓の前へ腰かけて、冷たい茶を飲みながら、庭から吹いて来る涼風をば心地よげに楽しんでゐた。

——なんて佳い宵だらう！ と、彼は心中に繰返した。が、彼れの心はどこか別のところへ行つてゐた。彼は耻辱と恐怖とに脅かされてゐたのである。

彼はリダを恐れてゐた。二人が云ひ争つた日以来、彼は再びリダを見なかつた。と、彼女の姿は、今、かの二人の初戀イデイルの折々とは全く別な姿になつて、彼れの前に立つのであつた。

——たとへどうあらうと、二人の間はまだ斷れたのぢやない……とにかく子供から脱れて了はなくちやならん……或は寧ろそんな事は眼中に置かん方がいゝか知らん？……と、ザルデインは不安心ながら我とわが心へ訊いて見た。

——彼女は此際どうするだらう？

乙女の怨を含んだ美しい顔や、キツと結んだ其纖弱せやくじやくな唇や、謎のやうな色を湛へた薄黒い眼などが、彼にはまざざと見えるやうに思はれた。

——彼が若し俺に對して馬鹿な事でも考へてゐるとしたら？……あゝ、いふ女は容易に人を宥すものぢやない……どんな事をして俺は……。

盛に悪評を蒙る有様が、ザルデインの眼の前に驕ろくと現れた。彼は怯えた。

——が、本來から云へば、彼女には何が出来るだらう？ と、彼は自分の心へ訊ねた。と、一切の事が彼には單純で且つ何でもなさゝうに思はれた。身を投げる？……なアに、關ふものか……俺にはそれを止める力なんぞありやしない……彼が俺の情婦だつた事がパツと知れ渡る……それがどうしたのだ？……たゞ俺が美男子だといふいゝ證據になるばかりだ……俺は彼女と結婚する約束なぞした事はない……なんだ、ばかしくしい、と、ザルデインは肩を聳やかしながら斷定を下した。が、或惱ましい感情が新に彼を壓迫したのである。噂にや上るだらうが、それ以上の事はあるまいよ！ と、彼は心にもなく冷い甘つたるい茶の洋杯をば口へもつてゆきながら云つた。

彼は清楚こさつぱりと美しくて相變らず香水を芬々させてゐた。が、彼には自分の顔の上へ、其白い上衣の上へ、其手の上へ又其心の上へまでも、或汚點がポツリと現れて、それが一瞬毎に大きくなつてゆくやうに思はれた。

——なんだ。そんな事は時がたてば過去つて了ふ……はじめての事でもありやしましい……。ヴオロシンは新しい底革をキュツ／＼云はせて、鷹揚にニッコリと小さな齒並びを露はしなから這入つて來た。と、香水や烟草や麝香の匂ひが室内に充ちて、緑色の庭の新鮮な薫香をば逐出して了つた。

——や、パゼル・リヴオギツチ君！ と、ザルデインはやゝギョツとして、不意と立上りざま

に叫んだ。

ヴオロシンは會釋して、窓際へ腰をかけ、さて烟草に火を點けた。ザルデインはいかにもキチンとした、いかにも高雅な、又いかにもスッキリした友の姿を見て、何となく羨ましく感じた。そして自分も亦それと同様に磊落な様子をしようと思つた。が、彼れの眼の前をば不安らしく動いてゐた。リダが彼に面と向つて「けだもの」といふ言葉を浴せかけて以來、ザルデインは世間の人々が皆その言葉をきいて、心中に彼を侮蔑してゐるやうな氣がしてならなかつたのである。ヴオロシンはニツコリしながら。無意味な事をば精神的らしく喋り立てた。けれども其調子ばかり續けてゆく事には彼にはよほど骨が折れた。で、彼得堡の噂やストライキをした自分の工場の話などをしながら、たうとうもう我慢かききれぬやうに「女」といふ言葉に話題が落ちて行つた。

と、新らしい煙草に火を點けたのを機會として、彼は口を嚙み、意味ありげにザルデインの眼を見つめた。

二人は領き合つた。ヴオロシンは眼鏡を動かして、齒を露せながらニツコリした。と、其微笑は不意と陋しげになつたザルデインの美貌の上へ反射した。

——で、君はね、この機會を利用してくれるだらうと思ふのだが……と、ヴオロシンは眼をパチ／＼やりながら訊いた。

ザルデインは得々と肩を聳やかしながら答へた。

——あゝ、そんな事ぐらゐはね……

二人はカラ／＼と笑つて、暫く黙つた。ヴオロシンは熱心に詳細の話を待つた。と、其間小さな筋が彼れの左の膝の下でピク／＼と脈を搏つた。ザルデインはヴオロシンの待ちのぞむ詳細の事などは考へず、たゞたえず自分を苦しめてゐた事ばかり考へた。

彼はつと庭の方を顧向いて、窓匡の上をば指先でコツ／＼叩いた。

が、ヴオロシンは何も云はずに待つてゐた。と、ザルデインはこの相手には欠くべからざる調子をとる必要を感じた。

——僕は知つてるよ。と彼は強ひて平然たる調子ではじめた。都住居の君達がこゝいらの女をばよほど異つたものにして考へるといふ事はね……が、君達は自分で欺されてゐるのだ。こゝらの女は成程清新なものには相違ないけれども、奴等には手管といふものがないよ、………それは全くないのだ………愛する術がだね………

ヴオロシンは忽ち様子を變へた。彼れの眼は輝いた。彼れの聲は異様に響いた。

——なるほどね………そいつは全くつまらないね………彼得堡の女は肉體を有つてゐないよ………わかるかね。奴等はたゞ神經の一と束だよ。そして肉體がないのだ………それとは反對に爰ぢや………

——全くだ、と、今度はザルデインの方が昂奮して、満足らしい髭を撫で上げながら賛成した。

——彼得堡の尤物にコルセットを脱かして見たまへ………そしたらどうだ………え？………君

……君はかういふ新しい話を知つてゐるかね？ と、ヴオロシンは不意と言葉を切つた。

——と、いふと？ ……と、ザルデインは面白さうに身を乗出して云つた。

——かうなのだ……よほど カラクテリスティック Characteristique (特徴ある) な話だ……ある巴里の (Cocotte) (嬌女) がね……。

と、ヴオロシンはいかにも垢脱けた猥褻な物語をば事こまやかに巧みに話した。その物語のうちには赤裸々な淫慾の事や女の細りした胸の事などが大部分を占めてゐたので、ザルデインは恰も人に衝きでもされたやうに、そり返り、キヤツキヤツと笑つた。

——さやう、女の一番肝腎なところは胸だね……美しい胸をもつてをらん女は僕にやないも同然だ！ と、ヴオロシンは白眼をグリグリさせながら結んだ。

ザルデインはあの眞白な、あの柔らかな、あの薔薇色な、恰も知らぬ海外の美しい果實を見るやうな堅い乳頭ちくびを持つた、リダの胸を憶ひ出した。彼は又、彼が彼女の胸に接吻した時、いかに彼女が嬉しがつたかを憶ひ出した。と、彼は俄にヴオロシンとそんな話をするのが厭になつた。

が、さういふ感情を起す事は、ザルデインには、いかにも男らしくないやうに、又殊に士官らしくもないやうに思はれたので、彼は努めて見えをはりながら答へた。

——趣味は其人々にある……僕にはね、女の中で一番好きなきところは脊中だよ。其の線が……

——さやうさ。と、ヴオロシンは昂奮して云つた。さうだよ。君、或種の女はね、殊にぐつと若い女はね……。従卒が重さうな靴音をさせて、洋燈を點けに這入つて來た、彼が卓子の傍で、洋

杯をカチャカチャ云はせたり、燃寸を擦つたりして。仕事をしてゐる間、ザルデインもヴオロシンも互に押黙つてゐた。もえはじめた洋燈の光で、二人の眼やポツリと紅い巻煙草の先などの光るのが見えた。

従卒が出てゆくと、二人は前の話を續けた。赤裸々に又破廉耻に描き出した「女」といふ言葉が、殆ど荒誕不稽な點まで、いかにも憎々しく二人の間に取換された。男には有勝な人に誇りたゝ氣がザルデインの心を一杯にさせて、連りに彼を唆かした。彼はヴオロシンに勝ちたいと思つた。いかに立派な女をば自分の手に入れたかを、彼に話してやりたいと思つた。そこで段々に自分の秘密な淫行を自白して行つて、たうとう終ひにリダの事まで喋つて了つた。

彼は彼女をヴオロシンの眼の前へ眞裸にして見せて、女の肉體の最も奥ぶかいところまでも暴露した。彼は彼女の事をばまるで市場へ引出した獸のやうにして話した。二つの想像は彼女の上へ這ひあがつたり、彼女にこびりついたり、又彼女をこね廻したりして、その臭い毒氣で乙女の美しい肉體を汚し、さんぐに弄んだのである。彼等は女が彼等に與ふる快樂に對して感謝するやうな戀の心で女といふものを愛するのではなかつた。反對に、努めて女を卑しめ女を凌辱し、云ひやうのない非常な苦痛をば女に與ふるのであつた。

部屋の中は煙が籠つて、暑くなりはじめた。氣の遠くなる、重苦しい、不健康な臭氣が、汗に塗れた二人の軀から發散した。彼等の眼は輝いた。彼等の聲はまるで哮り立つた獸の唸聲のやうに杜斷れ／＼に喘いだ。夜は靜かに窓外へ落ちた。それは朗らかな夏の月夜であつたが、彼等の

眼には、其色彩と其音響と又其富とを有する世界が消失せて了つて、たゞ眞裸にした女の面影ばかりが映るのであつた。と、彼等の想像力は次第に猛烈になつて、どうしてもリダを見なければ承知の出来ぬほどまでになつた。彼等はリダをばリダともリディアとも呼ばなかつた。が、たゞリドカと呼んだ。

サルデインは馬車を用意させた。そして二人はこの町の盡頭へ向けて急いだ。

二十八

ザルデインからリダへ送つた手紙が——その中にはこの頃の事件が無器用に且つ臆氣にほめかしてあつて、それから今一度是非とも會つて頂きたいと懇願してある手紙が、はからずもマリヤ、イヴノヅナの手に落ちた。其手紙は小間使の婢が臺所の食卓の上へ置き忘れたものであつた。マリヤ・イヴノヅナにとつては何か不吉な又不名譽な或影でもあつて、それが娘の清淨な姿をば掩蔽するやうな氣がしたのである。彼女は先づ途方に晡れて了つた。すると、彼女の青春時代の事や、戀の事や裏切られた事や、彼女の結婚期に通過した凡ゆる活劇が、まざ／＼と憶ひ出されるのであつた。そして嚴格な人生の法律によつて鑄出された長い／＼苦痛の連鎖が、恰も老年に達するまで其鎖を引きずつて來たもの、やうに、彼女の前へ浮上るのであつた。

それは一條の灰色の帶であつた。そして其帶のところには、單調な日々の流れの中へ縁どられたり詰めこまれたりした倦怠や、悲哀や、夢想や、又慾望などの斑點があつた。

が、彼女の娘が、灰色の塵埃に包まれた此人生の堅固な壁をば衝破つて、かの歡喜と幸福とが入亂れて死と苦痛と鬨ぎ合ふ、強烈な色彩をなせる混沌たる、渦輪の中へ、卷込まれるやうになつたかと思ふと、老女は思はず怖毛を震つたのである。と、彼女の恐怖に忽ち憤怒に變つた。出來る事なら、彼女はリダの喉頭を捉へて、地に曳据ゑてそこにはたゞ鐵格子の嵌つた小窓ばかりが日の照らす世界へ開いてゐる。彼女の生涯の薄暗い通路へ、娘を引戻してやつたであらう。彼女自身が暮して來たとほりの生涯をば、再び始めるやうに娘を強ひたであらう。

——下等な、憎らしい、見下げはてた娘だ！ と、マリヤ・イヴノヅナは手を膝の上へ置いて絶望した身振に崩れながら考へた。

が、まだ許されたる制限以外に出なかつたものだらうといふ、都合のいゝ、氣安めな考が、不意と彼女の心を通りすぎた。彼女の顔は愚かな又狡猾な表情を湛へた。で、其手紙をば繰返し／＼讀んで見たけれども、その冷かな潤飾した書振からは何物をも見出す事は出来なかつた。そこで手のつけやうが無くなつたので、彼女は苦い涙を流して泣いたがやがて冠りものを直して、小間使の婢を呼んだ。

——ヅンカや、グラデイミル・ペトロピツチは家にゐるか？

——何でゐます？ と、ヅンカは遠くの方から大きな聲で答へた。

——馬鹿だねえ。且那樣は家にお出でなさるか、どうか妾はお前にきいたのだよ。

——且那樣は今書齋へお這入りになりました……手紙をお書きになつてお出でなさいませう！

と、ツカンは何かその手紙が面白くてたまらぬものゝやうに云つた。
 マリア・イヴノヅナはジツと彼女を見つめたが、其青白い瞳の中には狡猾さうな光が輝いた。
 — お前は性が悪いよ。若しね渡す手紙でもあるならね、妾はそれを忘れるやうに教へて上げようよ。

サニンは卓子の傍へ腰かけて、手紙を書いてゐた。マリア・イヴノヅナはそんな風にしてゐる彼を滅多に見なかつたので、かういふ悲しい際にも拘らず、彼女はそれを面白いと思つた。

— お前はそこで何を書いてるんだい？

— 手紙です。と、サニンは彼女の方へ快活な又物静かな顔を顧上げて答へた。

— 誰へやるの？

— さア………覚えてゐる新聞記者へね………私は奴のところへ行かうと思ふのです………編輯局へね。

— すると、新聞へ書くのかい？

サニンはニコリした。

— 私は何でもしますよ。

— で、なぜそんなところへ行きたいと思ふのだい？

— お母さんのところに居ると、退屈するからですよ、と、サニンは正直に答へた。

マリア・イヴノヅナは何となく傷けられたやうな気がした。

— 有難う。と、彼女は皮肉に云つた。

サニンはジツと彼女を見まもつた。彼は母に向つて、一箇の男子がいつでも一つところにばかりゐて、殊にこれといふ職業のないといふのは、其男にとつては退屈なものだ、ぐらゐな事の、わからぬほど愚かな母ではない筈だ、といふやうな事を云ふつもりだつたのだが、彼は黙つてゐた。そんな單純な事を云ふのは、彼には馬鹿々々しく思はれたからである。

マリア・イヴノヅナは布帕を出して、それをば品のいゝ年老つた指先で、もじ／＼と揉苦茶にしてゐた。若しザルデインの手紙といふものがなくて、彼女の心が疑ひと懼れとの渦中に跳込んでゐなかつた際なら、彼女はこの息子の無作法さ加減をば、手酷しく極めつけてゐたに違ひなからう………けれども、彼女はこんなあてつけを云ふ位のところまで満足するのであつた。

— さうさね………一人はまるで狼のやうに家から外へ飛出したがるし、一人は一人で………彼女は侮蔑したやうな身振で言外の意を補つた。

サニンは興ありげに頭を擡げた。昔ながらの人生劇が疑もなく詰の幕に近づいたものである。——と云ふと、どんな事になるのですな？ と、ペンを抛棄てながら彼は訊いた。

マリア、イヴノヅナは俄に娘の手紙を讀んだ事が愧しくなつた。と、その老いたる兩頬が煉瓦のやうにサツと赭くなつた。そして不安ながらムツとした聲で、彼女は答へた。

— 仕合せと妾は盲ぢやない。妾は目が見えるよ………サニンは考へた。

——貴女にや何も見えやしない。と、彼が云つたその證據として、貴女の娘が近々に結婚するといふ事をば私は貴女に御披露します……妹は自分で其事を貴女に相談したかつたでせうが、そりや却て宜しくない……。

彼はリダの若い美しい生活中に尙その上に苦痛が加へらるゝのを見てはゐられなかつたのである——愚かしい年寄の慈愛、それは一箇の男兒をさへ最も慘酷なる苦悶の中に惱亂せしむるに足るほどのものであつた。マリア・イヴノヅナは立上つた。

——何ですツて？

——リダが結婚します。

——誰と？ と、老女は半ば嬉しげに又半ば疑はしげに叫んだ。

——ノギコヴと……無論ね。

——まア、さうかい！……すると、ザルデインさんとはどうなつたの？……。

——あんな奴はどうでもいゝ！ と、サニンは忌々しさうに叫んだ。それは我々にや全く關係はありませんよ……なぜ貴女は他人なんぞに氣兼してばかりゐるんです？

——いゝえさ、妾にやたゞわからないばかりなんだよ、ウオロデア。と、母親はどきまぎして、おづ／＼辯解したが、それにも拘らず、彼女の心中には「リダが結婚する、リダが結婚する……」といふ歡喜の歌が、嬉しげに響いてゐたのである。

サニンは嚴格に肩を聳やかした。

——何がわからないのです？……妹は一人の男を愛したのです。今、又別な男を愛してゐます。明日は又三人目の男を愛するのですよ……さア、それは神様のお心次第だ！

マリア・イヴノヅナは腹が立つた。

——お前は何を云つてゐるのだい？

サニンは卓子に寄掛つて、胸の上で腕を組んだ。

——で、貴女自身はどうでした？ 貴女は一生の中にたつた一人の男ばかり愛しましたかね？

と、彼は意地悪く訊いた。

マリア・イヴノヅナは立上つた。そして其皺のよつた顔の上へ冷然たる誇りの色を浮べた。

——そんな事は母親に云ふべきものぢやありません！ と、彼女はキツパリと云つた。

——誰がですか？

——誰がとは……何です？

——誰がそんな事は云はないものなんですか？ と、サニンは眼角からジロ／＼彼女を見やり

ながら繰返した。

見てゐるうちに、彼はふと彼女の眼がいかにかに力なく衰へてゐたか、又鷄冠とさかに似た彼女の鬢もじりがいかに見苦しいものであつたか、それがハッキリと眼に入つた。

——誰もそんな事は云ひません。と、彼女は響のない聲で云つた。

——さうでせうさ。だが、私だけが云ひますよ。と、サニンは物靜かに答へて、クルリと身を

還へしざま、再び腰をかけた。

——貴女は人生の中で既に貴女としての部分は得て了つてゐるです。それだからリダを貴女の意のままにする権利などはありませんよ。と云ひながら、彼は書きはじめた。

マリア・イヴノヴナは押黙つた。彼女は呆れてサニンを見つめてゐたが、其間、例の鶏冠とまがのやうな髻もたまりが滑稽に動いてゐた……と、彼女の過去の生涯——青春時代の有頂天の夜毎々々の其記憶をば、一寸の間、心の中から拭ひ去つて、彼女は眼を閉ぢながら、「どうして息子は自分の母親に向つてあんな事が云へるのか？」といふ問題ばかりジツと考へたのである。が、その問題のたがまだつかぬうちに、サニンは又顧向ふむいて、ツと彼女の手をとると、やさしい聲で云つた。

——そんな事は放擲つてお置きなさい……サルデインなぞ逐出して了ふんですね。奴は實際卑劣な事ばかり仕出かす人間なんですからね……。

この優しい言葉がマリア・イヴノヴナを慰めた。

——お前は親切だねえ。と、彼女は云つた。妾は嬉しいよ……サシヤ・ノギコヴなら前から妾の氣に入つてゐたのだよ。無論もうザルデインさんはお斷りしなけりやならない……サシヤの手前に對してだつてさ。

——サシヤの手前に對してもな。と、サニンは眼で笑ひながら賛成した。

——で、リダはどこにゐるだらう？ と、マリア・イヴノヴナは嬉しげに落ちついて訊いた。
——自分の部屋にゐます。

——それからサシヤは？ と、母親は親しげにノギコヴの幼名を呼びながら附加へた。
——そいつは知りません……先生は……と、サニンが云ひ出した時、ヅンカが戸口に現れて云つた。

——ギクトル・セルゲイギツチさんがお出になりました……知らない且那様バクサンと御一緒に。

——奴等を外へ掴み出してさへ！ と、サニンが勧めた。

ヅンカは當惑してニヤニヤ笑つた。

——何と仰しやいます、且那様バクサン！……そんな事が出来ませうか……。

——無論、出来るとも……あんな奴等に用はない……。

マリア・イヴノヴナは元氣づいたやうにスツと立上つた。彼女の眼は意地悪さうな光を湛へてゐた。彼女の心中には、恰も賭博の際、巧に一枚の札を誤魔化したかのやうに、驚くほど無造作に、完全な又意外な轉換が行はれたのである。以前士官と娘との結婚が成立さうに考へられた際、彼女の心がザルデインの名前に熱くなつてゐただけそれだけ、今他の男がリダと結婚せんとしてゐる時に方つて、彼が單に娘の戀人にすぎないといふ事が、彼に對して敵意を持たずにはゐられなくなつたのである。

母親が戸口に沿うて曲つた時、サニンは其緊張した横顔や意地悪さうな灰色の眼などを見やりながら考へた「愚だなア！」。

そこで手紙を疊んで、彼は母親の跡に續いた。彼はこの紛糾した Situation (佳餉やま)の成行に一

方ならず興を催したのである。

二人が姿を見せると、ザルデインとヴォロシンとは立上つて、馬鹿丁寧にあやうに挨拶した。で今迄の家で振舞つてゐたザルデインの氣儘な行爲は思はず妨げられて了つた。ヴォロシンはリダを見たいといふ考とそれを強ひて掩蔽さうとする念との爲に聊かテレクさうにしてゐた。

そのユツタリした態度にも拘らず、又努めて磊落を粧ふにも拘らず、ザルデインの容貌には或心配があり／＼と露はれてゐた。彼は來なければよかつたと思つた。同時に自分の氣怯れする心を耻ぢた。彼はリダとどんな風にして相對するか、それを人には見せたくなかつた。又自分の不安をばどんな事をしてヴォロシンには知らせたくなかつた。そして一人の女を左右し得る男子としての面目をば傷けたくなかつた。彼は時によるとヴォロシンさへ憎んだ。が彼の跡に従はずにはゐられなかつたのである、恰も鎖で彼に縛りつけられたやうに、そして自分の本心を彼に打明ける勇氣もなしに。

——親愛なるマリヤ・イヴノヴナさん。と、ザルデインは見よがしに白い齒を現はしながら云つた。私の畏友パエル・リヴオキツチ・ヴォロシン君をば貴女に紹介させて下さい……

彼は慇懃なる微笑をヴォロシンに差向けた。そして唇と眼の隅でソツと彼に目くばせをした。ヴォロシンは會釋した。そしてザルデインへも微笑を返した。一層明瞭に又殆ど横柄に。

——ようこそ。と、マリヤ・イヴノヴナは冷然と云つた。

ザルデインは自分の方へ向けられた敵意ある眼光にすぐ氣がついた。彼れの頼みの綱はまた、

く断れて了つた。そして誣^{おと}け勝な特色を失つた彼女の動作が、彼には無感觸に且つ馬鹿げて見えた。

——あゝ、來るのぢやなかつた。と、彼は考へた。そしてヴォロシンと一緒に、つひ忘れてゐた事が、はじめて想ひ出されたのである。リダはすぐ出て來なければならぬのだ！ 自分と關係のある、自分によつて懐胎にさへなつた、早晚一度は生まるべき自分の子の母親たる、あのリダが……奴に何と云つてやらう？ どんな風に奴を見てやらう？……ザルデインの心は千々に碎けた。

——萬一もう母親があゝの事を知つてゐるものとすれば？……と彼は恐る／＼自分の心へ訊いた。そしてマリヤ・イヴノヴナの方はもう見る氣になれなかつた。彼は椅子の上でブルブルと身を動かした。で、紙卷煙草に火を點けて、肩を揺つたり、手足をブラブラさせたりしながら、四圍に眼を走らしてゐた。

——あゝ、來るのぢやなかつた！……

——この土地へお出でになつてから、もう餘程におなりですか？……と、マリヤ・イヴノヴナは冷やかにキツとした聲でヴォロシンへ訊ねた。

——あゝ、いゝや！ と、ヴォロシンはこの田舎の老婦人をば無遠慮に見つめながら答へた。

そして硬い手で口角へ葉巻を押しやつたが、その烟が老女の顔へ眞^{まこと}柄にかゝつた。

——かういふところにあると御退屈なさるでせう……彼得堡のお住居に慣れてお出での御身ではね……

——い、や、どう致して？……私は此土地が気に入つてゐます……いかにも淳朴な小都會です……。

——郊外を散歩なさつて御覽遊ばせ……それは宜しいところが御座いますよ……水浴だとか、舟遊びだとか……。

——はア、それはもう仰しやるまでもありませんよ、奥さん。と、ヴオロシンは譁げたやうな聲で云つたが、その「奥さん」といふ言葉はいかにも退屈しきつたやうであつた。

會話はだれた。一同は笑顔の假面は冠つてゐたが、眼はお互ひに敵意を含んでゐた。ヴオロシンはザルデインへ意味ありげな視線を投げた。と、その心は士官ばかりでなく、ジツと彼等に注意してゐたサニンにもハッキリと分つた。

ヴオロシンがもう彼をば氣のきいた男だとも大膽な騎士だとも考へてはゐまいと思ふと、それがザルデインの心中に蟠つてゐた凡ゆる心配を打消して餘りあつた。

——で、リディア・ペトロヴナさんはどこにお出で、すか？ と、彼は平氣を粧ひながら訊いた。マリア・イヴノヴナは驚いたやうに又憎さげに彼を見やつた。「お前はあの子と結婚しないのだから、あの子とお前とは何の関係があるものか」と、彼女の眼が語つてゐた。

——妾は知りません。多分自分の部屋にゐませうよ。と、ますく冷然と彼女は答へた。ヴオロシンはまたジロリとザルデインを視た。

「そのリドカにすぐ來てもらふやうに願へまいか。この婆さんは面白くない。」と、其眼光が云つ

てゐた。

ザルデインは口を開いた。そしてドギマギしながら髭を撫で上げた。

——私はお宅の御令嬢についてさまざまなお噂を伺つてをります。どうか御紹介をして頂きたいものでありますが、ヴオロシンは汚い齒を露はしたり手を擦つたりしながら云つた。彼れの全身は前の方へのめつてゐた。マリア・イヴノヴナはザルデインを見やりながら、本能的にこんな事を思つた。この無作法な卑しげな小男は自分の清淨な可憐なリダの事を考へてゐるのだから。と、さう思ふと、リダの恐い墮落がすぐ聯想されて、彼女は思はずゾツとした。そしてどうしていゝか分らなくなつた。と、彼女の眼はだんく穩かになり又だんく慈悲深さうになつた。

「若しこいつ等を爰から追出さないと、ノギコヴやリダをば一層惱ます事になるだらう。」と、サニンは考へた。

——僕は君がこの町を去るやうな事をきいてゐますが？ と、考へ深さうに牀板を見つめながら彼は不意と訊いた。

ザルデインは面喰つた。そして旨い考がさつそく出て來なかつた。

「お、さうく、一二箇月休暇を貰ふ事がある……」と考へて、彼は慌て、答へた。

——さやう。私は出ようと思つてます……ちツとは休養して息をつかなくちややりきれませんからね……いつも同じところにはかりぬちや、しまひには……。

サニンは急に笑ひ出した。誰も彼も自分の考へた事や感じた事は云はず、たゞ徒らに虚偽の言ばかり弄してゐる會話が、彼には可笑しくてたまらなくなつたのである。と、快瀾な感情が彼の心の底から涌然と浮び上つて來た。

——結構な御旅行ですな。と、サニンは云ひながら立上つた。

すると、恰も糊のついた硬ばつた着物が不意と彼等の軀から落ちたやうに、三人の様子は忽ち變つた。マリア・イヴノヴナは蒼くなつて身を縮めた。ヴオロシンの眼の中には獸的な怯えた色がつと通りすぎた。ザルデインはのそりと不安らしく立上つた。穩かならぬ氣配が室内に漲つた。

——なに？ と、息詰まつたやうな聲でザルデインが訊いた。

ヴオロシンは取つてつけたやうにニッコリした。そしてキョト／＼した眼で自分の帽子を探した。サニンはザルデインには答へず、ヴオロシンの帽子を見つけて、意地悪くそれを差出した。ヴオロシンは口を開いた。と、其口からは泣聲のやうな壓潰された音調が出た。

——これはどう解釋すべきでせうか？ と、顛倒したザルデインは絶望のあまりに絶叫した。「凌辱だ！」と、彼はわく／＼して考へた。

——それはかうして解釋するのさ。と、サニンが云つた。君等が爰にゐるのは全く無用な事だから皆の爲にトットと退却したまへ、といふ事さ。

ザルデインは一步前へ進んだ。彼れの顔色は險しくなつて、其齒は猛獸のそののやうに物凄く露れた。

——は、ア……さうか……と、彼は皺枯聲しわかつせゑで云つた。

——出たまへ！ と、サニンは侮蔑したやうにキツパリと云つた。

彼れの聲はいかにも威嚇的に物恐しく響いたので、ザルデインは愚かしく眼をグリグリさせながら、逡巡しりこみして押黙つた。

——サツパリ分らん……と、ヴオロシンは小聲でブツ／＼云ひながら、肩の間へ埋めた頭をば戸口の方へ向けた。

ところへリダが敷居の上へ現れた。

彼女は未だ曾てこれほどまでに屈辱を感じた事はなかつた。これほどまでに良心の呵責を受けた事はなかつた。恰も赤裸のまゝで、市場へ、彼女を争ふ男達の間へ、曳張り出された女奴隷に似たやうな思ひであつた。

ザルデインとヴオロシンとが來たと知つた刹那、彼等が何の爲に來たか、彼女はすぐ悟つた。そして非常な屈辱を感じて、ぶる／＼と啜泣した。と、自殺といふ考が再び起つて、彼女は川の方へ向けて庭の中へ身を躲かくしたのである。

——が、あれはどういふ意味だらう？……まだお終ひぢやないのかしら……妾の罪は到底宥されないほど重いのだらうか？ 誰でも權利が……と、彼女は手を振よちらして叫んだ。

が、庭はいかにも朗らかであつた。いかにも燦爛と咲亂れてゐた、蜜蜂や小鳥が其間をばいかにも平和に飛廻つてゐた。空はいかにも青かつた。水は髻草の下をばキラ／＼と流れてゐた。獵

犬のミルは彼女の馳せゆく姿を見て、いかにも嬉しげであつた。と、リダは忽ち我に還つたのである。彼女は男達がいとも熱心に彼女の跡を追廻してゐた事を思つた。又スツと立つた彼女の軀が如何なる印象をば男達に與へたかといふ事實をも想出した。と、彼女は急に自分の力をば自覺したのである。

——なアんだ？ と、彼女は思つた。あんな事は何んでもありやしないわ……妾は一度愛したに相違ないわ……あの男を……で、今はお互ひに別れて了つたんだわ……誰も妾を輕蔑するわけにゆきやしない。

彼女は忙いで歩武を還して家の方へ向つたのである。

そして恰も知らぬ人の前にでも出たやうに、自分ながら全く別人のやうになつて、彼女は戸口へ現れた。いつもの複雑な髪カミの結方とは變つて、彼女の髪は美事に編まれて軟らかに肩の上へ落ちてゐた。意氣な近代的の着衣とは變つて、彼女の半身はたゞ透徹るやうな短衣カミゾで輕らかに蔽はれてゐた、彼女の肉體はその中で樂々と動いてゐたのである。さうした家庭的な彼女の姿は何とも云はれないほど艶なものであつた。

兄によく似た笑方でニツコリしながら、リダは數居を越えた。そして處女らしい調子の鮮やかな聲で云つた。

——來たわ……どこへ行らつしやるの？……ギクトル・セルゲイギツチさん、帽子をお脱りなさいつてば。

サニンは黙つてゐた。そして眼を大きくあけてマジ／＼妹を眺めてゐた。

——どういふつもりだらう？ と、彼は面白さうに考へた。

室内には忽ち云ひ知れぬ甘い優しい流動體が充ち満ちたやうに思はれた、恰も兇惡な猛獸の檻カケの中へ跳込む女猛獸遣ひのやうに。リダは見る間に男達を征服して了つた。

——御覽なさい。リディア・ペトロヴナさん……と、ザルデインは吃り勝に口をきつた。

彼れの聲を聞くと、リダの顔には頼りなげな悲しい表情が漾たぎつた。彼女はチラリと彼を見た。そして堪へがたい苦痛を感じた。と、肉體を愛しむ病的な要求が込上つて來て、彼女の心は思ふともなく或希望を思ふのであつた。が、その希望は忽ち形を變へて、今度はザルデインに對して、彼が彼女から何を失つたか、又彼が彼女に蒙らした苦痛や屈辱にも拘らず、依然として彼女が美しいが、それをば見せつけてやらうといふ、殘忍な要求となつたのである。

——妾は何も見たくはありませんよ。と、リダはその美しい眼をば殆ど閉ぢるやうにしなが、やゝ芝居めいた傲然たる口調で答へた。

ゾオロシンの方はと見ると、無造作に着物を着た女の肉體から發散する滴るやうな微温によつて、彼れの全身はグニヤ／＼になつた。彼は尖つた舌の先をば乾き了つた唇の周圍へやつた。彼れの小さな眼は細くなつた。又その透明な軟かな衣服の下では、彼れの肉體がだらけた肉的な恍惚マツのうちに浸つてゐた。

——御紹介をなさいよ……と、リダは睫毛まつげに蔽はれた處女らしい眼を彼の方へ向けながら云

つた。

——ヴオロシン……パゼル・ヴオギツチ君……と、ザルデインは口籠つた。

「……この美人は俺の情婦だったのだ……」と、心から嬉しくなつて、彼は考へた。と、それをヴオロシンの前で誇りたいといふ欲望と、もう取返しがつかぬやうに失つて了つたのだといふ苦がい意識とが、その中に入亂れたのである。

リダは靜かに母親の方へ顧つた。

——お母さん、誰か貴女に會ひたいつて云つてますよ……と、彼女が云つた。

——妾は今行かれない……と、マリア・イヴノヅナは答へようとした。

——待つてるんですつてば！ と、リダは涙聲で云ひ張つた。

マリア・イヴノヅナは立上つた。サニンはリダをジツと視た。そして鼻の孔を擴げた。

——皆さん、お庭へ行きませう……爰は暑いわ。と、リダが云つた。そして誰かついて來るかどうか。それは見向きもせず、彼女は庭の方へ行つた。

男達は催眠術に罹つたやうに彼女の跡に續いた。恰も彼女の辮髪で彼等を括りつけ、彼女の思ふ場所へ彼等を曳張りまはしてあるやうであつた。ヴオロシンは昂奮して、氣もそゞろに先へ立つて歩いた。そしてたゞ彼女の事ばかり考へて、何もかも忘れた。

柵の下へ達すると、リダは搖椅子の中へ身を落して、黄ろい靴を穿いた、黒い透明な靴下に蔽はれた、その可愛らしい足を伸した。彼女の内には二箇の生物があつて、それがお互に争つてゐ

るやうに見えた。耻辱と憂愁とに噎むせんでゐる貞操な一箇と、それから強ひて昂奮の態度を粧つてゐる誘惑的な今一箇とがそれであつた。そして前の一箇は忌はしげに人生や人間や自分自身を眺めてゐた。

——ねえ、パゼル・リヴオギツチさん……貴兄はこの憐れな都會からどういふ印象をお受けになつて？ と、リダは睫毛を下げながら訊いた。

ヴオロシンはそは／＼と手を擦りつゝ、

——恐らく深い森の中で思ひがけなく、華麗な花に出會つた人が受けなけりやならんやうな印象ですな。と、彼は答へた。

言ふ事は皆虚偽な、輕佻な會話が、彼等の間に取換はされたのである。サニンは何も云はなかつたが、彼等の面上に、身振に、聲に洩れて出る本當の感情をば、まじ／＼と觀察してゐた。リダは苦しんでゐた。ヴオロシンは彼女の周圍に散亂する女の薰香やその美をばが／＼と飽く事を知らず味つてゐた。ザルデインは先刻からリダをもサニンをモヴオロシンをも誰をも彼をも呪つてゐた。彼は出て行かうと思つたが、何か亂暴な事をしてやらうと考へて、そのまゝ踏止まつてゐたのである。けれども彼はたゞ紙巻烟草ばかり煙らしてゐるにすぎなかつた。ハツキリとリダが自分の情婦らしく見えるやうに振舞はうとする炎ゆるやうな思ひが、彼を苦しめ彼を絶望させた。

——と、貴兄はこの土地が氣に入つてると仰しやるのですね？ そして彼得堡を離れてゐてもお悲しくはなくて？ と、リダが訊いた。

若い娘がこんな状態にゐなければならぬのは一の刑罰であつた。そして、いつまでもかゝる男達の中にある事が、彼女には自分ながらに呆れられたのである。

— Mais au *Contraire* (いや、反對ですよ。) と、ヴォロシンは媚めかしく両手を動かして答へた。と、その間、彼の眼はリダの胸をば仔細に見つめてゐた。

— 文句なしに！ と、リダは媚びるやうな且つ傲然たる身振をしながら云つた。と、例の二箇の生物が彼女の心中で再び戦ひはじめたのである。一方は婉しくて顔が眞紅になつた。又一方は厚かましいヴォロシンの鼻端へ一層高々とその胸を突出するのであつた。

— 多分ね、貴兄は妾を非常に不幸なもの、やうにお考へになるでせうよ……妾か絶望でもしてゐるやうにね……ところがさうぢやないの……ねえ……貴兄がさうなら、妾は一層さうだわ……と、内心の涙を犇と噛みしめながら、彼女は何かザルデインへ云つてゐるやうであつた。

— あゝ、リディア・ペトロヴナさん！ と、ザルデインは忌々しさうに口を出した。どういふ文句があるべき筈だつたでせうな？

— 何か仰しやつて……と、リダは冷やかに訊返した。で、調子を變へて、彼女は又ヴォロシンへ話しかけた。

— 彼得堡の生活を話して下さいよ……爰では生活がないのですわ……成長するばかりなの……

士官はヴォロシンが軽く自分の方へ微笑を向けたやうに感じた。そしてリダが彼ザルデインの情婦だとは信じられぬと思つてゐるやうに感じた。

— は、ン？ は、ン！……宜しい！ と、彼は意地悪さうに心で呟いた。

— 吾々の生活ですか？……『有名なる彼得堡の生活』ね……

饒舌なヴォロシンは、かの分けのわからぬ無益な言葉でベチャクチャと喋る滑稽な小猿のやうな様子をしてゐた。

— 誰にも分るまい？ と、彼はリダの顔や胸や其大きな臀部を見やりながら、人知れぬ望みを抱きつゝ考へた。

— 私は斷言致します、リディア・ペトロヴナさん、吾々の生活は頗る退屈で且つ無味乾燥なものです……私は今日まで、人生といふものは、都會でも、田園でも、到るところ退屈なものとして考へてゐました。

— 本當に？ と、リダは半ば眼を閉ぢながら云つた。

— 人生に生活を興ふるものは……ですなア……曰く女の美であります……そして都會の女……さう、彼等を御覽になれば！……さやう、私は確信してをります。若し世界が何者かによつて救はるゝものとなりますれば、それはたゞ美によつてゞあります。と、ヴォロシンは出まかせに附加へた。そして其文句をばいかにも意味深長で且つ甚だ其處を得たもの、やうに考へた。

彼れの顔には愚かに昂奮した表情が浮んでゐた。彼は激動した聲で、たえず女といふ問題に立戻つては、恰も女を裸にしたり挑んだりするやうにして喋つた……ザルデインはゾオロシンの表情を見てとつて息苦しいやうな嫉妬を感じた。彼は紅くなつたり青くなつたりした。そして一つところにジツとしてゐられないので、小徑の一隅から一隅へ往つたり來たりしてゐた。

——大都會の女はどれもこれも皆同じやうに平凡なものです……（ぼろぼろ）……（ぼろぼろ）……か彫刻の前で感ずるやうな、人をして、眞の愛念、清淨無垢な崇拜の情緒を惹起せしむるに足るほどな、さういふ美は彼等のうちに發見する事は出来ません。これがやがて地方に赴かなければならぬ所以であります。即ち地方の生活は、その土地にまだ人工といふものが加へられてゐないのでありますから、華麗な花も従つて生ずる所以であります。

サニンは頸窩（ぼろぼろ）を搔いた。そして足の置き場所を變へた。

——が、さういふ花はなぜこんなところで咲くのでせう？ 誰一人手折つてくれる者もないのにねえ？ と、リダは突込んだ。

——は、ア、さうかい！ と、サニンは興ありげに考へた。先生そこへ持つてゆくつもりだつたのだ！……

——と申しますと？……

——いゝえね、妾は眞面目に申すのですよ……誰がその憐れな花を手折るのでせう？……

偉い人といふのはどんな人間なんでせう？

と、リダは悲しさに云つた。

——貴女は我々に對して甚だ無慈悲です！ と、ザルデインは我知らず答へた。

——リディア・ベトロヴナさんの仰しやる事は御道理です！ と、ゾオロシンは熱心に賛成した。が、薄氣味悪さうにチラリとザルデインの方を見やつた。

リダは朗らかに笑つた。そして怨恨と苦痛と哀しみとの念がキラ／＼する眼でザルデインの顔を眞輛に見つめた。

ゾオロシンは再び喋りはじめたが、彼の言葉は小羊の群のやうに躍上つたり轉がつたりして、どこまで走るかわからなかつた。

彼は、美しい肉體を持つ女は人に陋しい念を起させずに眞裸（まるはだか）で町の中を走る事が出来るものである、など、云つたと、其女は何だかりダを指してゐるやうで、たゞ彼ばかりの爲に眞裸になつて見せるやうに人の耳にはきこえたのである。

リダはたえず笑ひながら彼の言葉を遮つた。が、その朗らかな生々した笑ひ聲は侮辱を忍ぶ苦がい涙に濕つてゐた。

暑くなつた。日光は庭の緑の下までも射込んで來た。恰も炎ゆるばかりなる慾望が暑さに痺れつゝ、揺動かしたやうに木々の葉は靜に動いた。と、その葉蔭には、懐妊の若い女が坐つてゐた。彼女は人知れぬ苦悶と涙とに悩みつゝ、傷けられた感情に復讐しようと試みた。が、迎も見込みが

なさ、うなので、その力無き耻辱に苦しむのであつた。そこには又放逸な慾情をば隠したり見まはしたりして、頻りに跪く矮少な一人の男があつた。それから嫉妬と屈辱との爲に息詰まるやうな思ひをする今一人の男があつた。

棚の軟らかな緑蔭へ、少し離れて坐りながら、サニンは物靜かに彼等を觀察してゐた。

——とにかく、もう歸らうよ！

と、ザルデインは座に耐へなくなつたので、たうとうさう云ひ出した。

どういふわけか自分にも分らなかつたが、リダの笑聲をきいても、その眼を見ても、又その指先の震へるのを見ても、彼は一々ビシヤリ／＼と頬を打たれるやうな氣がした。そしてリダが憎く、ゾオロシンが嫉ましく、又その取返し難き喪失が身を切られるやうに辛かつた。

——既うですか？ と、リダが訊いた。

ゾオロシンはゾグ／＼と嬉しく、ニコ／＼しながら眼を細くした。彼の尖つた舌頭は唇の上を通りすぎた。

——なアに！……ギクトル・セルゲイエギツチさんは少々氣分がお悪いのですよ！ と、彼は自分が勝つたやうな氣になつて、冷笑的な聲で云つた。

出てゆく際、ザルデインはリダの手の上へ身を傾けながら、不意と私語いた。

——さよならよ。

この時ぐらゐ彼はリダを憎んだ事はなかつた。が、彼の言葉はリダの心に或臍氣な温情が浮ん

だのである、恰も嘗て二人が諸共に味つた夫の一切の歡樂に對して、彼に悲しい感謝の意を表しながら、彼と手を別たんとするかのやうに。けれども彼女はその感情をばジツと心の底へ押殺した。そしてキツパリした大きな聲で答へた。

——さやうなら！……御機嫌よう……パベル・リゾオギツチさん、妾達を忘れないで頂戴よ！ 彼女はゾオロシンがわざとらしい聲でいふのをきいた。

——あの女はシヤンベンのやうに人を酔はすよ。

彼等の足音が遠去かると、リダは再び搖椅子の上へ坐つた。が、彼女は全く別人のやうになつて、身を僂めてジツとしてゐた。と、苦がい涙がハラ／＼と彼女の面上に流れた。サニンは彼女を眺めながら、かの豊かな辮髪を垂れて生氣ない物思はしげな顔色をしたロシア乙女が、春、淋しげに險崖に據つて、人知れぬ双頬の涙をば、白いモスリンの廣袖で、ソツと押拭ふ姿を思はずにはあられなかつた。そして其天真爛漫な姿が、近代的の結方をした髪に、意氣なレエスの上衣を着た、以前のリダとはいかにも異つてゐたので、彼には一層痛々しかつたのである。

——これさ、どうしたよ？ と、彼は彼女に近づいて、手をとりながら云つた。

——放つといて頂戴……世の中つて、なんて恐ろしいところでせう！ と、リダは答へた。

そして頭を膝のところまで傾けて、自分の顔をば両手の中へ匿した。と、彼女の辮髪はスルリ肩の上を這つて、下まで垂れさがつた。

——チヨッ！ と、サニンはムツとしたやうに云つた。こんな下らない事の爲に、何だつて泣

くんない？

——もつと……善い人間が……あないものでせうか？ と、リダは新に眩つよいた。
サニンはニッコリした。

——決して無いよ。人間は天性悪いのさ……人間に善い事なんぞ期待しないがい……さうすりや、人間の悪事なんぞ、悲しくも何ともなくなるよ……。

リダは頭を擡げた。そして涙で紅くなつた其美しい眼で、ジツと兄を見つめた。

——兄さんも人間に善い事なんぞ何にも期待しないの？ と、彼女は氣を落ちつけて物思はしげに訊いた。

——しないともさ。と、サニンは答へた。私は一人ぼツチで暮してゐるよ。

二十九

次の日、庭の小徑を掃除してゐたサニンの側へ、ツンカが髪の毛を風に吹かせながら、素足のまゝで飛んで來た。で、他人の言葉でも暗誦するやうに、固くなつた愚かしい眼つきをしながら、彼女は云つた。

——ヴラデイミル・ペトロギツチ様、軍人の方々が貴兄様にお目にかゝりたいと云つてお出ででゐいますよ……。

サニンは少しも驚かなかつた。彼はザルデインの方から挑んで來るのを待つてゐたのである。

——すぐ會ひたいツてのかね？ と、彼は冗談のやうにして訊いた。

が、ツンカは何か恐い事のあるのを知つてゐたので、いつものおづ／＼した様子は見せず、當惑したやうな、氣の毒さうな表情をして、眞まじ軈にサニンを見つめたのである。

サニンは圓シヤル匙を立木に立てかけ、帯を締め直して、平常のとほりブラリ／＼と母家おもやの方へ赴いた。

——何といふ馬鹿者共だらう……奴等が本當の低能兒といふものだ！……と、彼はザルデインや及び彼れの介添人等に對して腹立たしい思ひをしながら考へた。この考は決して蔭口のつもりではなかつた。彼等に對する正當な意見であつた。

母家を横ぎる時、彼はリダが自分の部屋の敷居に突立つてゐる姿を認めた。乙女は心配さうに蒼い顔をしてゐた。彼女の眼は苦しげであつた。彼女の唇は聲を出す事も出來ぬほどに顫へてゐた。恰も彼女が自分ぐらゐ世の中に不幸な又罪の深い女はあるまいと考へてゐた矢先であつた。

マリア・イヴノヴナは惱ましげな憔悴した姿をして、途方にくれた顔をしながら、小座敷の眩掛椅子へ犇と身を靠せてゐた。鬘を留めた彼女の挿櫛が悲しげに横ツちよへ垂下つてゐた。彼女は哀願するやうな眼で恐る／＼サニンを見た。彼女も亦一語をも發し得ずにブル／＼と唇を顫はした。

サニンはニッコリして見せた。で、立止まらうかとは思つたが、そのまゝその前を通りすぎて了つた。

客間ではタナロヴとフォン・ダイツとが硝子屏の傍へ尊大に腰かけてゐた。彼等は椅子の下で脚を組んでゐたが、その騎兵服の白上衣と窄い股衣とが恐しく窮屈さうであつた。サニンが室内へ這入ると、彼等はおづ／＼と立上つた、恰もどういふ振舞をしたらいゝか分らぬものゝやうに。

——兩君、今日は。と、サニンは彼等に手を差伸べながら高聲に云つた。

フォン・ダイツは一寸逡巡した。タナロヴは身を僂めてサニンの手を握つたが、上から頸窩が見えるほど大袈裟な僂み方であつた。

——さて、何御用ですな？ と、サニンはタナロヴの馬鹿丁寧さをばまじ／＼と見やりながら訊いた。彼はこの士官がその滑稽な禮式をばいかに確實に、又いかに巧妙に行つてゐるかを見て呆れたのである。

フォン・ダイツは居すまひを立直して、その馬のやうな顔へ冷靜な表情を現はさうと努めたが、またどきまぎして了つた。と、いつも控目勝におづ／＼したタナロヴが、ハキ／＼した言葉でキツパリと云つた……。

——我々の友人、ギクトル・セルゲイエヰツチ・ザルデイン君は、同君の名を以つて、貴君に解釋を求むべく、その委任の光榮をば我々に與へたのであります。と、彼は陳べたが、恰も自動人形が動き出したやうであつた。

——は、ア。と、サニンは大きく口を開いて滑稽に重々しく云つた。

——さやう。と、タナロヴは心もち眉を擧めながら、執拗に續けた。同君の考では、貴君の行

爲たるや、全く宜しくない……。

——さう……そりや分つてるさ。と、サニンは我慢がしきれずに云つた。僕は無理に先生を追出して了つたんだからね。そりや「全く」よろしくはないさ……。

タナロヴはその要領を捉へようと努めたけれど、サニンの言葉が呑込めぬので、そのまゝに續けた。

——さやう……同君は貴君が貴君の言を取消さん事を要求されてゐるのです。

——さう……さう……と、丈の高いフォン・ダイツは驚のやうに足の位置を代へながら、附加へなければならぬやうに思つたものである。

——取消し？ どう取消しが出来るものか知らんて？ 言葉は雀ぢやないから、一度飛んだらもう捉へる事の出来ないものさ。

タナロヴは面くらつて、ジツとサニンを見つめながら、押黙つた。

——なんて厭な眼だらう！ と、サニンは思つた。

——我々は爰で冗談を云ふ爲に來たのぢやありません……と、タナロヴは恰も侮辱でも受けた事に氣がついたやうに、眞赤になりながら、そゝくさと云つた。君は君の言を撤回するか、しませんか？

サニンは答へなかつた。

——愚劣極る男だ！ と、彼は慨はしく思つた。で、椅子を引寄せて腰かけた。

——僕はね、ザルデインを喜ばしたり、又宥めたりする氣なら、そりや自分の言葉を取消しもあるだらうさ。と、彼は眞面目な調子で切出した。それほど重大な事でもないからね。だが、第一にだね、ザルデインは馬鹿だから、僕の眞意が分らなかつたものだ。で、沈着いてはゐられないで、たゞ人を凌がう凌がうとしてゐるのだ。第二に、僕はザルデインといふ男が氣にくはない。さういふ條件で、僕は自分の言葉を取消さうといふ氣にならないのだよ。

——さうすると……と、タナロヴは齒の内云つた。

フォン・ドイツは呆れたやうな眼光を彼に投げた。と、彼の延びた顔から最後の色が消失した。彼は化石したやうに黄ろくなつたのである。

タナロヴは聲を大きくして、威嚇するやうな抑揚をつけた。

——さういふ場合となると……。

サニンはいかにも憎さげに其瘦せた額と其細い筒袴^{ツボク}とを見やりながら遮つた。

——さうさ。その先はわかりきつてるさ……だがね、僕はザルデインと決闘はしないよ。フォン・ドイツはクルリと向直つた。

タナロヴは身を眞直にして、一句々々、句切りながら、侮蔑するやうな聲で云つた。

——なにに——ゆる——で——す——か？

サニンはカラ／＼と笑つた。彼れの憎悪は現れると同時に消えて了つた。

——さう……まづね、僕はザルデインを殺したくないからさ。それから次に、又殊更にだね、

僕は自分自身を殺したくないからさ。

——併し……と、タナロヴは嘲けるやうに唇をビク／＼動かしながら云つた。

——僕は厭だよ。それだけさ。と、サニンは立上つた。なぜかと云はうか？ 決闘したくないからさ……それだけはどうもね……決闘を拒絶した男に對する心からの侮蔑と、軍人以外には誰もかゝる行爲をやつてのけるだけの勇氣と名譽心とを有てないものだといふ確信とが、タナロヴの心中に錯綜した。

従つてサニンの拒絶は彼を驚かすよりは却つて彼を満足させたのである。

——それは君の御勝手だ。と、タナロヴはもうその侮蔑を匿さずに云つた。で、一トきは聲を張上げて——併し、私は豫め君に云つて置かなけりやならんが……。

——それも分つてる。と、サニンは笑つた。僕はザルデインに忠告して置くがね……。

タナロヴは薄笑して軍帽をとつた。

——僕に觸つてくれぬやうに忠告して置くよ……でない、僕は無茶苦茶に先生を擲りつけるから……。

——おい、君。と、フォン・ドイツは熱くなつて叫んだ。我輩は君を許す事は出来ん……君は我々を嘲弄しとる……君に分らぬ筈はあるまい……決闘を拒絶するとは……即ち……即ち……。

彼は蟹のやうに赤くなつた。彼のドンヨリした眼は眼窩から飛出して、唾液^{ハダキ}の泡がその色のな

い唇をば濡らした。

サニンは興ありげに其口を見つめながら、

「かゝる人物がトルストイの崇拜者と自稱してゐるのだ！」と云つた。

フォン・ドイツは首を振つて、ブル／＼と慄いた。

「失禮ながら……と、彼は鋭い聲で叫んだ。つひ近頃、その真面目な且つ興味ある問題について、一緒に論じた友人の面前で、そんな風な聲を出さなければならぬ事が、彼には耻かしかつた。失禮ながら、そんな事はやめて頂きたい……この問題とは何の關係もない事だから……」

「ところが、と、サニンは答へた。非常に關係がある……」

「失禮だが……と、フォン・ドイツは金切聲を振立て、叫んだ……それは全くその……一語でもつて……」

「まア、いゝさ。と、サニンは唾液をはねかすフォン・ドイツの前から不快らしく後退りしながら云つた……考へたいやうに考へるさ……が、ザルデインにね、奴は馬鹿だと云つてくれたまへ……」

「君にはそんな権利はない！」と、フォン・ドイツは啜泣くやうな絶望的な聲で怒號した。

「宜しい、宜しい……と、タナロヴは満足らしく云つた。往かう……」

「いゝや。と、フォン・ドイツはその長い兩腕を振廻しながら、同じく泣聲で叫んだ……何故にさう出来るか……單に……單に……」

サニンはチラリと彼を見たが、取合はうともせず、扉口の方へ行つた……

「我々は此場の一伍一什をば逐一貴君の友人に報告します。と、タナロヴは彼の後から云つた。」

「どうぞ。と、サニンは見向きもやらずに答へて出て行つた。」

「あゝいふ馬鹿だ！ 奴をすきな馬にでも騎せたら、満足して體裁よく振舞ふだらうな！」

と、サニンはたえず怒號するフォン・ドイツをば宥めすかしてゐるタナロヴの聲をきながら考へた。

「いゝや、我輩は許す事は出来ん……と、丈の高し士官はこの事件のお蔭で面白い知人を一人失つた事をば不快に感じながら叫んでゐた。彼はこの事件をどう救つたらいいのかわらなかつたので、思はず腹を立てるやうな場合になり、それが爲に全く事件をば手のつけられぬものにしてつたのである。」

「ゾオロデアアさん。と、リダが自分の戸口からソツと聲をかけた。」

「何だい？ と、サニンは立止まつて答へた。」

「一寸来て頂戴……話があるから。」

サニンは妹の部屋へ這入つた。木々の緑色の葉枝が硝子窓を殆ど塞いでゐるので、部屋の中は縁色に薄暗くなつてゐた。そして白粉や女の薫香がほのかに空中を漂つてゐた。

「お前の部屋はいゝねえ？」と、サニンはホット溜息をついて云つた。

リダは窓硝子に顔を押しつけて突立つてゐたが、庭の緑色の反射が肩や頬の上へ物軟らかに顫へてゐた。

——え？ 何御用だよ？ と、サニンは親しげに訊いた。

が、リダは黙つてゐた。彼女の息は惱ましげに忙しかった。

——どうしたのだい？

——兄さんは……兄さんは決闘をなさらないの？ と、リダは彼れの方へは顧向かずに息苦しきうな聲で訊いた。

——しない。と、サニンは簡単に答へた。

リダは押黙つた。

——で、どうしたんだい？

リダの顔は顫へ出した。彼女はクルリと顧返つて、低い聲で口早に云つた。

——妾にやそれが分らないの。

——さうかい。と、サニンは顔を蹙めて云つた。お前は可哀さうだね。

人間の愚痴さ加減が、善人からも悪人からも、美しいものから醜いものからも、一樣にその呼氣を吐きかけながら、四方八方から彼を取巻くので、彼はウンザリして了つた。彼はクルリと身を返して出て行つた。

リダは彼を見送つた。そして両手で頭を抱へながら、臥床の上へ身を投げかけると、その長い黒髪が眞白な臥布の上へハラ／＼と散亂した。この時のリダはいかにも美しかった。いかにもなよやかであつた。いかにもスッキリしてゐた。その苦悶にも拘らず、又その涙にも拘らず、彼女は驚くほど若く且つ健康に顫へて見えた。硝子窓を横ぎつて、庭はさわやかに緑々と擴がりながら、日光を浴びてゐた。部屋はカラリとして樂しげであつた。けれども、リダは、彼女は何物をも見なかつたのである。

三十

それは珍しく美しい脊であつた。恰も莊嚴に透徹る青空から、地の上へ落ちて來たとも思はるる、異常な脊の一つであつた。日はもう歿した後であつたが、まだ晝のやうに明るかつた。空氣は呆れるほどに薄く且つ清らかで、乾燥する季節にも拘らず、庭といふ庭は穰々たる露に濡れてゐた。僅かに立騰つた塵埃は黄昏の朗らかさをゆらりと漂はして、息苦しくて同時に又涼しくもあつた。と、恰も翼にでも乗つて來たやうに、スツ／＼と物音が遠近からきこえて來た。

サニンは帽子も蒙らず、肩のところは緑色に褪せた青い大きな綿布の上衣を着て、塵埃の立つた町を通りぬけ、蕁麻いらいさの生え塞つた長い袋町へ這入つた。そこにはイヴノヅが住つてゐたのである。

イヴノヅは廣い肩をして、その長い髪の毛をば藁のやうに眞直に後へ梳きあげ、眞面目くさつて庭の窓の前へ腰かけてゐた。その庭の綠叢しげみは日光の塵埃を浴びてゐたが、まだ露の爲に綠がか

つて見えた。イヴノヅは煙管へ紙巻煙草を填めた。と、その周圍一米突ぐらゐのところは、強烈な煙草の匂が人の鼻を撲つて、嘔がしたくなるほどであった。

—今日は。とサニンは窓匡へ眩を突きながら云つた。

—今日は。

—僕は決闘を申込みましたよ。

イヴノヅは沈着いたものであつた。

—大出来だ。誰と、どうしてね？

—ザルデインさ……僕は奴を追出してやつたのさ。奴はそれで怒つたのだ。

—さうか。と、イヴノヅが云つた。で、君はやるつもりだらう？ やつつけたまへ。僕は君の介添にならう……一發の下に奴の鼻を挫いてやるさ。

—なぜな？……鼻は肉體の尊い一部分だよ……僕は決闘しない。と、サニンは笑ひながら答へた。

イヴノヅは頷いた。

そりや又いゝ。決闘なんぞ浮氣の沙汰だからね。

—だが、妹のリダの奴はさうは考へてゐない。

—先生は馬鹿だからさ。と、イヴノヅはキツパリと受けた。どうしてかう人間には馬鹿な根性が膠着コウリョウいてるんだらう？

彼は最後の紙巻煙草を填めて、すぐ火を點けた。で、その他の煙草は皮袋へサラ／＼と抛込み吸殻はそのまゝ吹消して、さて窓を躍越えた。

—今晚どうして暮さう？

—ソロヴィイチクの許へ行かう。と、サニンは云つた。

—厭だな！ と、眉を擡めながら、イヴノヅは答へた。

—なぜな？

—僕は嫌ひだ。奴は鼻ツ垂しだ。

—外の奴等より一層鼻ツ垂しだといふわけかい？ と、サニンは輕蔑するやうに云つた。かまやしない。行かうよ。

—よし、それぢや、行かう。と、サニンの云ふ事なら何にかぎらず同意する例となつてゐたイヴノヅは賛成した。

二人は廣やかな逞しい肩を押並べて面白さうに語合ひながら、町を通つて行つた。

が、ソロヴィイチクは不在であつた。家は戸が閉まり、庭はヒツソリして人香もなかつた。納屋の側では、シユルタンがガチャガチャと鎖を動かした。そして所以なく人の家の庭を歩いてゐる見知らぬ人々に對して吼えかゝつた。

—なんて陰氣くさい所だらう。と、イヴノヅが云つた。並木街へ行かうよ。

二人は門をしめて立去つた。シユルタンは最後に二聲三聲吠えたのち、犬小舎の前に坐つて、わ

びしさうに人氣のない庭や、活動せぬ磨粉小舎や、埃だらけな芝生へウネ／＼とついてゐる眞白な小徑を見やつた。

公園ではいつものやうに音楽が響いてゐた。並木街はもう涼しかった。散歩の人は夥しく出てゐた。恰も丈の高い廣野の草に似た眞黒な群衆は、女達の上衣や帽子に鏤められて、波のやうに動搖しながら、庭園の蔭の方へぞろ／＼と流れて行つたり、又は石門から並木街の方へ戻つて行つたりしてゐた。

サニンとイヴノヴは、手を組みながら公園へ這入ると、すぐソロヴィチクに邂逅したのである、彼は手を背中へ廻して、伏目勝に、物思はしげな様子で、木の下を逍遙してゐた。

——僕等は君の許へ行つたのだ。と、サニンが云つた。

ソロヴィチクはおづ／＼と眞赤になり、腰を低くして口籠つた。

——さうでしたか。お宥し下さい。お出でにならうとは存じませんでした………存じて居りさへすれば、お待ち申したのでムいます………一寸散歩に出て了ひましたので………。

彼れの眼は哀しげにキラめいてゐた。

——僕等と一緒に來たまへ。と、サニンは撫でるやうに彼れの手をとりながら云つた。

ソロヴィチクは陽氣に見えるやうにと努めた。で、喜ばしさうに腕を差出し、帽子を後ろへ押やりざま、サニンの腕に靠るといふよりは寧ろ何か貴重な物でも捧げてゐるやうな恰好をして歩いた。彼れの口は耳の邊まで延びてゐるやうに見えてゐた。

眞赤な顔をして、銅の樂器をば、耳も聳れるほど高々と吹奏してゐた兵士等の前には、オルケストルの樂長がもの狂はしく指揮棒を掉つてゐた。彼はいかにも氣取つたものであつた。その周圍には、群衆がおし合ひへし合ひしてゐた——單純な群衆が——書記だとか、中學生だとか、長靴を穿いた若者だとか、バツとした頭巾を被けた小娘だとかいふ、又小徑々々には、令嬢達や、大學生や、士官達が、花やかな群をなして、恰も四班舞踏のやうに錯雜してゐた。

三人の若者と出會つたのは、ゾボヴとシヤフロヴとそれからスヴロジツチであつた。彼等は互にニッコリして會釋し合つた。サニンと其二人の連とは、公園をぐるりと一週すると、又別な一群に出會つた。と、その中には、朗らかな上衣を被た、スラリと美しいカルサギナが見えた。彼女は遠くから微笑んで見せた。暫くサニンに會はなかつたので、彼女の眼の中には、何となく媚かしい色が動いてゐた。

——なぜ貴兄方ばかりで歩いていらつしやるの？ と、ゾボヴが云つた。妾達と一緒にお出でなさいよ。

——横徑へ這入りませうよ。と、シヤフロヴが云ひ出した。爰はあんまり混雜してゐますから若い男女の快活な一群は、シンとした小徑の薄暗がりへ這入つた。のべつに笑つたり喋つたりする聲で、その小徑へ訪れて來る反響もよくきこえなかつた。

彼等は庭園の盡頭まで達すると、歩を還して、跡戻りしようとした。と、其時、曲角のところから、ザルデインとタナロヴとそれからゾオロシンとが姿を現はした。

サニンは、士官が彼に會はうとは思ひもよらなかつたのでドギマギする様子をば、すぐ見てとつたのである。と、その美しい貌は曇り、その體全體は反りかへつた。タナロヴはニヤリと微笑んだ。

——あの珠雞ほろくでうの奴はまだあるんだね？ と、イヴノヴは眼でヴォロシンを指しながら、呆れたやうに云つた。

ヴォロシンはすぐ前を歩いてゐたカルサギナを見る爲に顧返つたので、彼等には氣がつかかなかつた。

——さうだ。と、サニンは笑つた。

ザルデインは自分が笑はれたやうに思つて、ギツクリした。で、或力の衝動を受けて、息が詰るほど腹が立つた。と、自分の群から離れて、大股でサニンの方へ進み寄つた。

——何ですかね？ と、サニンは彼に訊ねた。で、眞顔になつて、ザルデインがわざとらしく振廻はす小さな鞭をば、ジツと見つめてゐた。

「何といふ馬鹿野郎だ！」と、彼は考へて、又不惑な心持もした。

——私は一言君に云つて置く……と、ザルデインは皺枯聲で口籠つた。君は私の決闘狀を貰つたらう？

——さやう。と、サニンは士官の手首が動くのを見逃がさずに、われ知らず肩を聳やかした。

——して、君は拒絶するにきめたのか……堂々たる男兒がさういふ場合に方つて行ふべき筈

の事をな？ と、ザルデインは不明瞭ながら力を入れて云つた。が、その聲はもう自分の物のやうな氣がしなかつた。そして冷たい鞭の柄をば汗ばんだ指の間に思はず犇と握りしめたほど、それほど彼は怖れてゐた。怖れてはゐながらも、さすがに自分の前に打開いた不安心な道をば轉ずるだけの勇氣は出なかつたのである。と、庭園の中には空氣が全く無くなつて了つたやうに思はれた。

人々は立止まつて、何か容易ならぬ事でも起りさうな豫想をしながら、どきまぎして窺つた。

——何を……と、イヴノヴはサニンとザルデインとの間へ割つて入りながら叫んだ。

——無論、拒絶するさ。と、サニンは鋭い眼光でザルデインを眞鞞に見つめながら、いやに落ちつきはらつて答へた。士官は重い荷物でも擔いだやうにホツと溜息をついた。

——もう一度訊く……君は拒絶するか？

と、彼は一ト際聲を強めて云つた。と、其聲は金屬的に響いた。

——あッ、あッ……打たうとする……あ、いけない！……あッ、あッ！ と、ソロワイチクは眞蒼になつて考へた。考へたとよりは寧ろ感じたのである。

——何を、何をなさる……と、彼は口籠りながら自分の軀でサニンを掩ふやうにした。

ザルデインは彼を見もせず、手もなくグイと推退けて了つた。そしてその眼の前には、たゞ鋭く而も物靜かなサニンの瞳ばかりがあつたのである。

——僕は既うさう答へたよ。と、サニンは前と同じやうな聲で云つた。

ザルデインの周囲には、人や物の一切が目まぐるしく渦を巻いてゐた。慌てた足音や女の叫聲が彼れの後ろで聞こえた。と、深淵の中へでも陥る時のやうな絶望的な感じがしたので、激動のあまり、彼は威嚇するやうに高々と其鞭を振廻した。同時に、サニンは猛然と猿臂を伸ばし、拳を固めて、したゝかに彼れの顔を打ちのめしたのである。

——占めたツ！ と、イヴノヅは我知らず叫んだ。

ザルデインの頭はグタリと肩の上へ落ちた。熱い、もや／＼した或物が、キリキリと彼れの眼や脳髓を貫いて、口や鼻の上へ擴がった。

——畜生……と、苦しげな憐ッぽい聲が其唇から洩れた。と、其間に、士官は鞭や軍帽を失つて、手の上へ倒れた。そしてもう何も見ず、何もきかず、何も意識せずに、たゞ取返しのかかぬ汚辱と炎ゆるやうな目の疼痛のみを感じたのである。

蔭の深い小徑は、異常に、野蠻に、ごつた返した。

カルサギナは顛顛に手を當て、眼を閉ぢながら、魂切るやうな聲で、「あれえ、あれえ！」と叫んだ。ユリイは恐怖と侮辱との感情に襲はれつゝ、地に横たはつたザルデインを見やつた。同時に、シヤフロヅはサニンの方へ突進したゾオロシンは鼻眼鏡を失つて、荆棘の中へ躍込み、濡れた草を横ぎりつゝ、一直線に逃出したが、その眞白な穿袴は膝のところまですぐ黒くなつた。タナロヅは奮然として齒をくひ縛り、伏目になつてサニンの方へ衝と寄つたが、イヴノヅが背るか

ら彼れの肩を引捉へて、脇の方へ突戻した。

——何でもない……何でもない……と、サニンはわざとらしく快活な低聲で、胸くそが悪さうに云ひながら、股を開いて仁王立になり、苦しげに息を入れた。と、珠のやうな汗がタラタラと額から流れた。

ザルデインはよろ／＼と身を起し、濡れて脹れ上つた。ブルブル顫へる唇の間で、何か分らぬ事をポツ／＼と呟いた。その呟聲の中で、サニンに對する、冷笑的の唾吐くやうなボンヤリした嚇し文句だけが、ハッキリと分つた。ザルデインの顔は左側一面は瞬くうちに脹れ上り、片方の目は閉がつて了つた。鼻と口からは血が流れ、唇は引釣れて彼れの全身は恰も悪寒を感じるやうにわな／＼と顫へた。彼は二三分間前の閑雅な美男子とはもう似ても似つかなかつた。かの恐ろしい一撃が忽ち彼れの身内にあつた人間的の部分をば残らず奪ひ去つて、跡にはたゞ憐むべき物や醜怪な物や臆病な物ばかりが残されたやうに、彼には思はれたのである。彼は逃げる氣にも匿れる氣にもならなかつた。齒をガチ／＼云はしたり、血を吐散らしたり、打顫ふ手で無意識に膝を汚した砂埃を拂ひのけたりして、よろ／＼と立上つては又倒れた。

——怖いわねえ、怖いわねえ！ と、一刻も早く此場を立去らうとしてゐたカルサギナが繰返した。

——行かうよ。と、イヴノヅは見るにたへぬ憐れなザルデインから眼を外向けながら、サニンに向つて云つた。

——行かう、ソロヴィチク君！

が、ソロヴィチクは其場を動かかなかつた。ポカンと眼を大きく見開いて、ザルデインや血や雪のやうに眞白な上衣の上の砂などをば、ジツと眺めてゐた。彼は身顛して唇を動かした。イヴノヴは腹を立て、グイと彼れの手を引張つた。けれども、ソロヴィチクは恐しい力を出して、身を脱れさま、両手で木の幹へつかまつたのである、恰も無理に連れて行れるかとも思つたやうに。そして彼れは啜泣をはじめた。

——なぜ、貴兄はこんな事をなされたのですか……なぜ、貴兄は……

——穢らはしい！ と、ユリイは皺腹聲で眞鞆にサニンへ浴びせかけた。

サニンはもう平常の状態に還つて、ザルデインは見ずに、ニヤリと微笑んだ。

——さうな、穢らはしいね……だが、僕が殴られたよりや、此方がまだましだらう？

彼は平然として、忙ぎ足に小徑を通つて立去つた。イヴノヴは侮蔑するやうにユリイを見たが、さて紙巻烟草に火を點けて、靜々とサニンの跡に續いた。彼れの廣やかな肩や又その逆立つた髪の毛は、今起つた事件がいかに侮蔑すべきものであるかを物語つてゐるやうに見えた。

——人間は實に愚だ！ 實に卑劣だ！ と、彼は呟いた。

サニンは物も云はず顧返つたが、そのまゝに足を早めた。

——何といふ獸物どもだ！ と、ユリイは悲しげに云つた。そして公園を出ると、その暗黒な塊の方を眺めやつた。

いつも見るとほりの、物思はしげな、暗くて且つ美しい公園ではあつたけれど、あゝいふ事件があつた爲に、今や世界の他の物から引離されて、不安にも又不愉快にもなつたやうに思はれた。シヤフロヴは深い溜息をついた。そして鼻眼鏡越しに、おどろくした眼光をば、自分の周圍へ投げてゐた、恰もあれ以來刻々に又到るところに新しい襲撃が突發しさうな氣がしたので。

三十一

ザルデインの生活は瞬く間に面目を改めて了つた。これ迄がのび／＼と坦らかで、いかにも氣樂な生活であつた。けに今度の生活は醜くて怖しくて、彼にはどうにも我慢がなりかねるやうに思はれた。恰も輝々たる笑顔の假面が擲き落されたので、或猛獸の不様な獅嘴面が下からヌツと現れたものゝやうであつた。

タナロヴは彼を輕馬車ドロシユグへ乗せて家へ連れ歸つた。途々、ザルデインは大袈裟に苦痛を慇うつたへたり氣を腐らしたりしたが、それはたゞ眼を開けない算段にすぎなかつた。眼さへ閉ぢてゐれば、彼は耻辱から離れてゐるやうな氣がしたのである。そして其耻辱は何十萬といふ眼を光らして、百方から彼を窺ひ、嘲笑の語を浴びせかけようとして、彼が唯一目開くのを待設けてゐるのであつた。

ザルデインは、瘦せこけた馬車屋の脊中に、通りすがる人影に、物見高い無慈悲な顔を突出してゐる窓々に、それから彼の軀を支へてゐるタナロヴの腕にすら、さうした一切の物のうちに、

無言の而も明白な悔蔑を感じたのである。そして時々には實際に氣絶しさうであつたほど、それほ其感じが彼には意外でもあり又苦痛でもあつた。と、彼は氣が違つたのぢやないかと思つた。そして死にたくなつたり正氣に還りたくなつたりした……。

彼れの腦は現に起つた事件をば否認するのであつた。それには或誤謬があつて、又よく分らぬやうな事があつて、それが爲にあつたもので、さもなければ、あれほど手酷しい、あれほど情ない破自に陥るのぢやなかつたらうと、彼には思はれたのであるけれども事實は明白に事實なので、彼れの心はだん／＼に暗くなつて、絶望に蔽はれた。

ザルデインは自分の軀が支へられてゐるのに氣がついた。又血や埃で汚れてゐる自分の手をチラリと見た。そして一方ならぬ疼痛を感じた。と、さういふ色々な事をまだ感じ得られる事や、自分の軀が全く死にきつて了はぬ事などをば彼は自分ながら驚いたのである、美しい、閑雅な、自覺のある、楽しい士官を形成してゐた一切のものが、もう痕跡もなく消失せて了つてゐるのに。

時々、馬車が町の角々で傾いた時、ザルデインは薄目を開けながら、涙を隔て、町並や家々や人間や寺院などを見た。何もかも平生と變りはなかつたが、今、彼には凡てそれ等のものが非常に遠くの方にあつて、彼とは何の交渉もなく、彼に對して敵意でも含んでゐるやうに見えた。通りすがる人々は立どまつて、呆れたやうに馬車を仰いだ。ザルデインは耻辱と絶望とにたへず、殆ど意識を失ひつゝ、慌て、ヒタと眼を閉ぢた。

道筋は際限もなく長かつた。この道筋は永遠に續くのぢやないかと、ザルデインには考へられるほどであつた。

——もつと早く、もつと早く！ と、彼は我を忘れて唸つた。が、自分の従卒や宿舍の主婦や隣人などの事を想出すと、彼は寧ろかうしていつまでも馬車に乗つてゐたくなつた、眼をとぢたまんま、目的なしに、どこまでも／＼。

タナロヴはザルデインが耻しくて、傍目もふらず、行合ふ人、行合ふ人に、自分は何にも關係はないのだ、打たれたのは自分ではないのだ、といふ事をば、一生懸命に示さう／＼と努めた。で、眞赤になつて、キョトキョトして、ビツシヨリ冷汗をかいてゐた。

彼は最初腹を立てたり、ザルデインを勵ましたり、又くど／＼と慰めるやうな事を云つて見たりしてゐたが、やがて押黙つて了つた。が、時々、其くひしばつた齒の間から、馬車屋が忙がせゑる言葉だけ洩らした。と、さうした言葉や、又支へるとよりは寧ろ突退けると云つた方がよさうな、ブルブル顫へる其腕から推して、ザルデインは明らかにタナロヴの心持を悟つたのである。彼よりは遙に人格の低い遙に劣等なタナロヴづれが、急に彼に對して耻ぢ得る權利を持つやうになつた事實が、萬事休矣といふ觀念をば、一層強く彼れの腦中に刻込んだのである。

ザルデインは助けられずには中庭を横斷する事が出来なかつた。タナロヴとそれから仰天して馳つけた従卒とが、手を顫はしながら彼を運んで行つた。ザルデインは中庭に人がゐたかどうか、それすら氣がつかなかつた。彼等は彼を安樂椅子の上へ臥かしたが、さてどうして、ものか分

らなかつたのである。彼等が彼れの面前にゐては彼に云ひやうのない苦痛を與へるわけである。といふやうな事を考へずに、彼等がポカンと口を開いて、その前に突立つてゐたが従卒はやがてそれと氣がついて、そ、くさ身を動かしながら、湯と手拭とを持つて来て、丁寧にザルデインの顔や手を洗つた。ザルデインは従卒の眼に出會ふのを恐れた。が、従卒の顔は別段悪意も含まず侮蔑もせず又皮肉も示さず、恰も善良な婆さんのそののやうに、たゞ仰天して、いかにも氣の毒さうであつた。

——大尉殿、どこでこんな目にお會ひなさいました？ 實に、まア、どうも！ と、彼は小聲で呟いた。

——貴様の知つた事ぢやない！ と、タナロヴは眞赤になつて怒鳴つたが、すぐビクビクと周囲を見廻した。

彼は窓の方へ行つて、器械的に紙卷烟草を取出したが、ザルデインの前で喫つていゝかどうかと思案して、手早く筥を匿した。

従卒は一向に驚かず、例の軍隊的姿勢をとりながら、うるさく訊ねた。

——お醫者を招んで参りませうか？

タナロヴはうじ／＼しながら指の股を開いて、調子の變つた聲で答へた。

——分らんな、俺には、どうも……。が、ザルデインはきゝつけた。そして自分の顔を醫者に見られるかと思ふと、ゾツとした。

——誰も要らんよ！ と、彼は弱々しく云つた。で、自分は死ぬのだ、と、強ひて思はうとした。

洗はれた後の彼れの顔は、もう物凄くはなかつたけれども、醜くて且つ憐ツぽかつた。タナロヴは獸的な好奇心に驅られて、横目でチラリ彼を見やると、すぐ外方を向いた。それは人には氣のつかぬほどの動作ではあつたが、周囲の事は何でも感ずるザルデインには、非常にハッキリと分つた。で、彼は絶望のあまり息が詰まりさうになつた。そして一層ビツタリと眼瞼を閉ぢながら、金切聲で、とぎれ／＼に叫んだ。

——放ツといて……放ツといてくれ……。

タナロヴはギョツとした眼を投げたが、ふと人のわるい侮蔑の念が心の底からコミ土つて來た。

——へん、まだ泣いてるのだ！ と、残酷にも彼は思つた。

ザルデインは物も云はず、身動きもせず、ビツタリと目を閉ぢてゐた。タナロヴは指先でハタ／＼と窓匡を叩いたり、鬚を引張つたり、周囲を見廻したり、又窓を眺めたりして、いかにも出て行きたさうな、友達甲斐のない様子をしてゐた。

——チヨツ、厄介なこつた………睡るまで待つのかなア？ と考へて彼はウンザリした。

かくて十五分は過ぎた。ザルデインはモジ／＼してゐた。タナロヴは退屈でたまらなくなつたと、やがての事にザルデインは全く靜まつて了つた。

——睡つたな！ と、タナロヴはソツと彼を偷視ながら、不眞實にもさう思つた。睡つてる。

睡つてる。

彼は拍車を鳴らさないやうにして、用心しいく、一步二歩動いた。と、ザルデインは素早く目を開いた。タナロヴは一寸立止まったが、ザルデインはもう彼れの意向を悟つて了つた。タナロヴの方でも亦見つかつたなと思つた。で、二人の間は云ひやうのない變な事になつて了つたのである……ザルデインは睡つたふりをして目を閉ぢた。タナロヴは彼を睡つたものと強ひてきめた。そして双方が大目に見合つてゐる事はよく分つてはゐたのだが、彼は不器用に身を僂めて、脅かされた間諜よろしくといふ見えで、おづ／＼と耻しさうに、爪先で歩きながら、室内を脱出した。扉は再び閉まつた。二人の間を結びつけてゐた凡ゆる表面的の友情は、永久に消滅して了つた。ザルデインとタナロヴとは、爾來、二人はもう此世の中でお互に存在してゐないもの、やうに、双方ともに感じたのである。

隣室へ這入ると、タナロヴは氣が樂々して、ホツと息をついた。彼とザルデインとの交情が破れて了つた事などは、彼には更に遺憾でも何でもなかつた。

——おい。と、彼はビク／＼四邊を見廻しながら、從卒に向つて口早に云つた。これは最後の禮儀を盡すつもりであつた。俺は行くがな、若し事が起つたら、其時はな？ 分つたか？……。

——はい。分りました。と、從卒はドギマギして答へた。

——うむ、それでい、……。それから、あの……。壓着布は始終とり換へなけりやいかんぞ。彼は忙ぎ足で石階を降りた。そして人通りのない廣やかな町へ這入ると、又ホツと息をついた。

もう晩かつたので、彼れの眞赤な顔が往來の人に見られすむ事が、タナロヴには嬉しかつた。——終ひには俺まであんな面白くもない事件に引張り込まれるだらう？ と、彼は考へながらやがて並木街に達したが、俄にゾツと寒けがした。が、俺はあの事について何の關係があるのだ？ と、さう思つて彼は氣を落ちつけたが彼がサニンへ跳懸つた時、イヴノヴに突飛ばされて、殆ど倒れさうになつた事などは、努めて想出さぬやうにした。

——チヨツ！ なんて忌々しい失敗だ！ と顔を獅噛めて、タナロヴは考へた。みんなあの馬鹿のお蔭だ、彼はザルデインを想出したのである。あんな無頼漢どもと喧嘩しなけりやならぬなんて！ いや、はや、嘔吐を催す話だ！

何もかも耻かしい厭な事ばかりだつたと、考ふれば考ふるに従つて、中肉中脊の彼れの軀や、彼れの胸や、又其聳えた兩肩や、細い袴袴だとか、しやれた長靴だとか、それから灰白色の夏の軍服などが、威嚇するやうな影法師をつくりながら、一層暗中にそり返るのであつた。

通りすぎる人々が彼には何か嘲笑でもしてゐるやうに疑はれた。一寸した行違があつたら最後、彼は忽ち激怒して洋刀を抜き、盲滅法に跳懸つて行つたであらう。が、人は通るか通らないかといふほどであつた。稀たまま通る人も薄暗い並木街の垣に沿うて匿れるやうにそゝくさと通つた。

歸宅すると、タナロヴはホツと我に還つて、イヴノヴの態度を想出した。

——なぜ俺はあいつの横面を打踏してやらなかつたらう！ さうしてやらなけりやならなかつたのだ……。洋刀が許されなはいふ事は遺憾千萬だ！ 洋刀がないといふのはなア！……が、

ピストルは？ さうく、俺は衣兜の裡へ持つてゐたのだ！……奴を犬のやうに撃殺してやる事が出来たのだ……スツカリ忘れてゐた。さもなくば、俺は立所に奴を殺して了つたらう……が、忘れた方がよかつたのだ……その方が正當だつたらう……奴等の中にも亦ピストルを持つてゐる奴がゐたかも知からん……さうすると、どんな事になつたものやら……又どんな目に遭つてゐたものやら、分りやせて……同様に、俺がピストルを持つてゐた事など、誰一人氣がつかかなかつたのだ……が、まア、あんな事は皆いつとなく過去つて了ふだらう……。タナロヴはキョトくと四邊を見廻したが、やがてピストルを卓の抽斗へ納めた。

——けふは一つ聯隊長の許へ行つて、あの事件には俺は全く關係がないのだといふ事を辯明しなけりやならん。

が、彼は急にムラ／＼となつて、又いくらか外見を張る氣になつて、將校集會所へ行き、自分の目撃した一伍一什をば残らず報告したくなつた。

眞暗な市街の中央に、もの／＼しく燈火のついた將校集會所では、激昂した士官連が犇々と詰めかけた。彼等は今もう公園での出来事をば承知してゐたのである。そしてかの何時も／＼流行を追つて艶粧し立てながら彼等を眼下に見くだしてゐたザルデインの失敗が、内實彼等には満足なのであつた。彼等は好奇心を以つてタナロヴを迎へた。タナロヴは花形役者のやうな心持をしながら、其場の光影をば詳細に説明した。彼れの聲や又其細く小さな眼の中には、無慈悲な且つ復讐的な感情が讀まれた。舊友の束縛に對する、借金に對する、ザルデインの寛濶な態度に對する

又其鷹揚さにさへ對する憎惡の念がザルデインにとつてはいかにも屈辱的な叙述のうち、遺憾なく暴露されたのである。

ザルデインは自分の家であつた一人、外界とは何の交渉もなく、裝毛安樂椅子の上に横たはつてゐた。

さる饒舌家から事の経緯を教へられた従卒は、前と同じく、老婆のやうな、おど／＼した氣の毒らしい顔をしてゐた。彼は自沸鑪を用意したり、葡萄酒を捜したり、主人が歸つたので嬉しがつてゐるセツタアをば部屋の外へ追出したりした。で、瓜立をしながら、ザルデインの側へ近寄つた。

——大尉殿！……葡萄酒を少しお飲みになつた方が宜しうムいます。と、彼はきこえぬほどの聲で云つた。

——あゝ、何か？ と、ザルデインは自分ながら意久地のない、たゞもう憐ッぽい調子で云ひながら、眼を開いたが、すぐ又閉ぢて了つた。彼は脹れた唇を動かして呟いた。

——鏡を……くれ……。

従卒は溜息をついたが、従順に鏡と蠟燭とを持つて來た。

——自分の顔を見てどうするつもりだらう？ と、彼は心中に指弾した。

ザルデインは鏡の中を視ながら嘆息した。彼れの前には、テカ／＼した髭の半ば亂れた、眼の片方盲れた、青い、紅い、黒い、脹上つた顔があつた。

——取れ！……と、彼は口籠つた。そしてヒステリーのやうに啜泣をしはじめた。
——水！……。

——大尉殿！そんなに失望なさいますな……ちぎに癒ります……と、從卒は冷たい茶と砂糖の匂ひがする汚いコップの中へ水を注ぎながら云つた。

ザルデインは飲めなかつた。コップの縁へ唇を持つてゆく拍子に、齒を打突けて、胸の上へ水を溢して了つた。

——行け！と、彼は云つた。

世の中でたつた一人從卒ばかりが彼れの不幸に同情を寄せてくれるものゝやうに、彼には思はれたのである。が、さう感じた感謝の念は、忽ち、下僕でさへ今は自分を憐む事が出来るのだ、といふ觀念に妨げられて了つたのである。

從卒は泣きたいやうな顔をして、眼をパチクリさせながら、石階の上へ出た。そして其踏石の上へ腰をかけて、馳せ寄つた犬の、絹のやうな脊中を撫ではじめた。セツタアは彼れの膝の上へ其美しい頭を載せて、薄黒い意味ありげな眼で、下から上へ彼をジツと見上げるのであつた。庭の上では物云はぬ星が雲の中からキラキラと光つてゐた。從卒は恰も非常な不幸の豫測されるやうな忌はしい悲哀の念が胸の底から込上つて来るやうに感じたのである。

——世の中は面倒だ！……と、彼は苦しげに考へた。そして自分の村の事など心の中に想ひ浮べた。

ザルデインは痙攣しながら、安樂椅子デイツァンの靠背ホリカ、リの方へ身を轉じた、顔から濡手拭が沁り落ちたのも氣づかずに。

——終ひだ！と、彼は心中で啜泣きをしながら繰返した。何が終ひになつたのだ？ 何もかもだ……一切の人生……一切の俺の生活が失はれたのだ……なぜだ？ 名譽を毀損されたからだ……犬のやうに打擲されたからだ……拳骨で、顔を！……俺はもうのめのめと聯隊にゐるわけにゆかない！……。

ザルデインは無意義な力のない嚇し文句を呟きながら滑稽に小さくなつて小徑の中央で蹲まつた自分の姿をばまざ……と見たのであるか。

かの戦慄すべき瞬間が幾度となく彼れの心中を通りすぎて、その物凄い擴がりが段々に自覺されて來た。と、恰も探海燈にでも照らされたやうに、凡ゆる事が細々と彼れの眼前へ現れた。その中でも最も彼を苦しめたのは、かの愚にもつかぬ嚇し文句を口の内でブツ／＼云つた時、丁度彼れの前をばヒラ／＼と閃いた、カルサギナの眞白な上衣の、其想ひ出であつた。

——誰が俺を起してくれたらう？

ザルデインはそれを考へたくなかつた。そして強ひて他の事を思はうとした。

——タナロヴだつたか知らん？ それとも奴等と一緒にゐた、あの小ぼけな猶太人か知らん？ 結局、タナロヴかな？……奴はどこにゐるだらう？……が、そんな事はどうでもいゝのだ……

……肝腎なのは、俺の全生活が滅茶苦茶になつて了つた、といふ事だ。俺はもう聯隊にゐられな

い、といふ事だ……決闘？ 奴は決闘しないだらう……俺はもう聯隊にゐられない……
 ザルデインは、嘗て將校陪審員の一人が、(彼も列席したが)決闘を拒絶したといふ故で、一家の父親たる兩名の士官をば軍隊から放逐した事實を想ひ出した。

——奴等は俺にもあんな事を申渡すだらう……丁寧にな、手も差伸べず……奴等は俺に……
 ……そして並木街で俺に腕を握られたとて、誰一人もそれを自慢にする者なぞはゐないだらう……
 ……俺を羨む者も既うゐなからうし。

俺の風を真似る者もなくなるだらう……いや、そんな事は下らない！……肝腎なのは不名譽だ！……なぜ不名譽か？ 殴られたからか？ が、幼年校で俺は思ひきり殴られた事もあつた。その時、あの大きなシユヴルツの奴に、俺は齒を一本折られたつけ……それでさへ何事もなかつたのだ！ 俺達二人はその後親友になつた位だ！……そして誰も俺を侮蔑する者なぞ無かつたのだ？ それなのに、なぜ今ではかうなのだらう？ 同じ事ぢやないか？ 同じやうに血は流れたのだ。同じやうに俺は倒れたのだ……それなのに？

懊惱にたへかねた此間に對して、ザルデインは答を得なかつた。彼は何にも目に入らず何にも分らず、たゞ泥に塗れたやうにのみ感じたのである。

——奴が若し決闘を承諾して、俺の顔へ彈丸を打當てたら、これよりはもつと醜くなつたらう。又もつと痛かつたらう。けれどもそれが爲に誰も俺を侮蔑はしないだらう。却つて俺に同情を寄せるだらう。と、彈丸と拳骨との間にはどれだけの違があるのか知らん？ どういふ違ひがある

かな？ そしてそれは何故だらう？……

彼れの心は四度路に亂れた。と、其内心の底のどこからともなく、一種の物が、切抜けて來た苦悶や取返しのつかぬ不幸などに喚びさまされて、湧上つたのである。それは新しくてももとうから存在してゐた或物だが、かの氣樂な無内容な、遊んでばかりゐる士官生活の間に、スツカリ忘れて了つたものである。

……たとへばフォン・ダイツだ。奴はいつも俺の前で、「人若し爾の右の頬を搏たば其人に左の頬をも差向けよ、しなどと云つてゐたツけが、あのサニンの許から歸つた時にはどうだつた？ 向が決闘を拒絶したので、腕を振廻して、怒つたり、叫んだり……つまり、俺が鞭で相手を打たうとしたのは、奴等に罪があるのだ……俺の失策つたのはたゞ機を失したばかりなのだ……が、そいつは愚なのだ、正當ぢやないのだ……どうしたつて不名譽だ！……俺は聯隊にゐられない……

ザルデインは両手に抱へた頭をば毛布圍の上でゴロリ／＼と轉がした。と、眼のうちにチクチクする痛みを感じた。同時に、自分ながら驚かるゝやうな憎惡の念が、むら／＼と彼れの心頭を壓したのである。

……ピストルを取つて、跳懸つて、奴を撃殺してやる……一發か二發でな……そし

て奴が倒れたら、顔でも眼でも齒でも、靴の踵で滅茶々に蹂躪つてやる……
 壓着布が床の上へパチャリと落ちた。ザルデインは吃驚した眼を開いて、ほの白い室内にある

水の這入つた盥や濡れた手拭や、黒く口を開いた窓などを見やつた。と、其窓は恰も謎を含んだ目玉のやうにジツと彼を見つめてゐたのである。

——いや、同じこつた……どうしたつて取返しはつきやしない！と、彼は弱々と絶望して考へた。同じこつた、皆に見られたのだ、俺が顔を殴られて、四ン這ひになつた事はな……實に不面目だ……殴られたのだ殴られたのだこのシャツ面をな……回復する方法はない、全くない……俺はもう自由ではなからう、幸福ではなからう……

非常にハッキリした鋭い或考が、彼れの脳中に湧上つた。

——が、俺は結局そんなに自由であつたか？ 自由ではなかつたのだ。それだから、俺は今から破滅しなけりやならぬのだ。俺の生活は決して自由ではなかつたからな。俺は決して俺自身の生活に生きては來なかつたからな……俺が若し自發的に決闘しようと思ひ立つたり又鞭を握つたりしたのなら？……誰も俺を殴る者はなかつたらう。そして何もかも順序よく行つたらう……耻辱は血を以つて雪げとは、何時誰が考へたのか？ 俺は考へないぢやないか？……で、俺はそれを雪いだのだ……云ひ換れば、人が俺の爲に血でそれを雪いでくれたのだ……然る時は？……俺には分らない。併し聯隊は出なけりやならん……

無能力な勢のない考が起上らうとしては、翼を切られた鳥のやうに倒れた。で、其考がいかなる方向を指しても、それはいつも、この不名譽の爲には聯隊を去らなければならぬ、といふ出發點に歸着するのであつた。

ザルデインは嘗て濃い痰唾の上へ落ちた一疋の蠅を見た事をば想出した。蠅は床の上で一生懸命に身を跳きながら、その手足や翅の上へ膠着いた、息のつまりさうな粘液をば、自分の後ろへ引擦つてゐた。そして其憐れな小動物がいかに死力を竭して立上らうとしても、彼にとつて萬事休してゐる事は明らかであつた。ザルデインは嘔きたいやうな想ひをして、この追憶を逐ひやらうとしたけれども、一種の秘密な良心めいたものがあつて、それが彼を衝いて其不幸な小動物を想出させるのであつた。が、これは疑もなく精神錯亂であつた。ザルデインは自分の眼の前で罵り合ひ搏ち合してゐる二人の百姓を見た。一人は敵手の顔を殴つた。と、斑白の老人なる其敵手は袖裏で鼻から流れ出る血を拭ひながら立上つて、『馬鹿ッ！……』と、肝に銘じたやうな聲で云つた。

——さうだ。いつだつたか、俺はその有様を黙つてゐたのだ。と、ザルデインはハッキリと想出したのである。それから奴等は酒屋で仲善くウイスキーを酌みかはしてゐたつけ。

彼は又意識を失つたに違ひなかつた、なぜといふと、部屋も光もどこへやら消滅して了つたのであるから。が、考はどこ迄もどこまでも働いて行つた。で、蠟燭の明りが再び黒闇裡から浮び出した時彼は自分の考を纏めようと努めた。

——こんな不名譽を擔つては、この上生きてゐられるものぢやない。きまりきつた事だ、俺は死ななければならん！が、死にたくない。俺が死んだら誰の役に立つか？ 俺の役には慥かに立たない。が、俺の評判？ 俺が死ななければならぬ事と俺の評判とは何の関係があらう？ 俺は

聯隊を出なけりやならんのだ……とすると、どうしてこの上生きてゆかれよう？
 未來が恰も霧の深い譯のわからぬ、見た事もない或物のやうな形をして彼れの前に横たはつた。それを見ると、彼は力なく憎^恨えた。で、幸福や生活に對する炎ゆるやうな渴望が、其霧の如き物を吹散らさうとする度毎に、それがすぐ又その憐れに苦しむ腦髓の上へ蔽ひかゝるのであつた。そして彼れの前には一ト筋の道もない無窮の空虚ばかりが見えてゐた。夜は更けた。窓の裏ろには、恰も生きて苦しむ者は世の中でザルデイン一人きりでもあるかのやうに、沈黙が重苦しく壓した。

卓子の上には、蠟燭が滴りながら燃えてゐた。そして其平らな焰は身動きもせず立騰つてゐた。ザルデインは熱病のやうな又絶望したキラ／＼する隻眼でジツと其焰を見つめたが、こんがらかつた彼れの思想の、その眞黒な霧の中に、何もかも没し去つて、彼にはそれが見えなかつたのである。

と、そのボロ／＼な追憶や觀念や思想や感情などの混沌たる中で、他の一切の物よりは遙かに明瞭な一つの感じが、音波のやうに彼れの心を通りすぎた。それは自分が絶対に孤獨だといふ病的な知覺であつた。かしこでは數千の人間が生きて、楽しんで、笑つて、恐らく彼れの事でも噂してゐたのである。そして彼ばかりが孤獨であつた。ザルデインは無益にも見知り越しの顔をば一つ々々想ひ出した。彼等は蒼白くて、外國人のやうに、冷然としてゐた。又彼等の容貌には好奇心と嗤笑ばかりが現はれてゐた。と、リダの事がそゞろに想ひ出されるのであつた。

彼女は彼が最後に彼女を見た時のまんまで彼れの前に現れた。悲しげな大きな眼をして、平常着に包まれた弱々とした肉體で、又辮髪を亂しながら……ザルデインは其顔の中に惡意をも侮蔑をも感じなかつた。が、悲しげに叱りつけるやうな眼光をば感じた。彼女の最も悲痛な刹那に、彼はいかに彼女を逐ひ斥けたか、其時の光景がまさ／＼と想ひ浮べられたのである。彼はその大失敗をば考へた。そしてそれが及のやうに彼れの心を刺^さるのであつた。

——彼女は必と俺よりは餘計に苦しんだに違ひない……俺は彼女を逐ひ出したのだ……そして身投をして死ねばいゝとさへ俺は思つたのだ……

恰も最後の隠れ場所でも見つけたやうに、彼れの全生命は彼女の方へ牽きよせられた。彼は饑ゑ渴くが如く彼女の愛に同情に憧れた。と、彼の現在の苦痛が凡ゆる過去の事どもを償つたものゝやうに、彼には思はれたのである。けれども、リダのもう決して／＼還つて來ぬ事も、萬事の休した事も、ザルデインはよく知つてゐた。そしてたゞ底知れぬ空虚ばかりが彼れの周圍に口を開いてゐた……

ザルデインは手を舉げて、ソツと頭を抑へた。そして目を閉ぢ、齒をくひしぱり、身動もせず、もう何も見たくも聞きたくも感じたくもなくなつて了つた。が、手を落すと、彼は立上つて又腰をかけた。彼れの頭は惱ましくグラ／＼した。彼れの口は炎えた。彼れの手足は顫へた。ザルデインは立上つて、重い頭を抱へながら、ヨロ／＼と卓子の方へ行つた。

——俺は何もかも失つたのだ。何もかも失つたのだ……俺の生活も、リダも、何もかも……

何もかも……。

忽ち或考が電光のやうに彼れの心中に閃いた。彼れの生活には、もう美しい物も、善い物も、喜ばしい物も、全く存在しなくなつて、たゞ穢い物や顛倒した物や愚な物ばかりが残つたのである。いかなる歡樂をも味ふ權利を有つてゐた、かの美しいザルデインは、もう跡方もなくなつて了つて、そこにはたゞ苦痛と屈辱とに悩まざるゝ、力の無い、棄られた一箇の肉體のみが横たはるのであつた。

もうこの上生きてゐられない。と、ザルデインは決然として考へた。この上生きてゆくについで、一切の過去を脱却して、新生涯を開始し、全く別な人間に成らなければならぬ。俺にやそれは出来ない！

ザルデインは卓子の上へツシリと頭を落した。蠟燭の焰に物凄く照らされて、彼はグタリとして身動きもしなかつた。

三十二

丁度その晩、サニンはソロヴィイチクの許へ行つた。

若きイスラエル人はたゞ一人自分の家の石段の上へ腰かけて、人香のない物悲しげな中庭をばジツと見つめてゐた。そこには凋れかへつた草の間に、無用な小徑がほの白く縦横に透つてゐた。錆びた巨大な錠の下りた納屋、磨粉小屋の薄暗い窓、永年來生活が杜絶えてゐたやうに見ゆる

此宏大な空地は、漫ろに人をして遺瀨ない悒鬱を催さしめた。

サニンはソロヴィイチクの異様な顔貌に愕かされた。若者はいつもの感慙さに引換へて、ニコリともしなければ、齒も露はさず、悲しげに憔悴してゐた。そして其黒い眼の底には、感激した不安な思想の焰がキラめいてゐた。

——今日は。と、彼は軽くサニンの手を握りながら、冷然と云つた。そして蒼白い空の方へ眼を向けた。と、その空には眞黒な納屋の家根が悲しげに浮上つてゐた。

サニンは石段の一方へ腰かけて、紙巻煙草に火を點け、さて何か異つた事でもあるのだなと直覺しながら、まじくソロヴィイチクを見た。

——君は爰で何をしてゐるのかね？ と、彼は訊いた。

ソロヴィイチクは彼れの方へ徐かに其悲しげな眼を差向けた。

私はたゞ爰にかうしてゐるのです……風車の動いてゐました時には、私は帳場で働いて、やはり爰に住んでゐました。ところが、風車は動かなくなり、皆去つて了つても、私は只一人取残されてゐるのです……。

——さう孤獨では淋しいね？

ソロヴィイチクは微に腕を動かした。

——が、私には凡て同じです。と、一寸間を置いて、彼は云つた。

二人は押黙つた。たゞ犬小舎でガチャ／＼と鎖の觸れ合ふ音ばかりが沈黙を破つた。

——私を苦しめるのは孤獨ではありません。と、ソロヴィチクはイラついた聲でふと云ひ出した。孤獨ではありません。他の事です………爰と爰とが私を苦しめるのですよ。彼は額と胸とを交るべく指さした。

——すると、どこが悪いの？ と、サニンは物靜かに訊いた。

——あなた。と、ソロヴィチクは段々聲高になつて、熱心に續けた。あなたは今日人をお搏ちになりましたね。顔に創をおつけになりましたね………あなたはあの人の生涯を滅茶苦茶に壊してお了ひなされたものです………こんな事を申上げても、どうかお怒りのないやうに願ひます………私はその事を考へつゞけてゐたのです………かうやつて爰に腰かけたまんま、それはもう考へぬいたのです。そしてたうとう氣分さへ悪くなつたのです………お願ひですから、答へて下さい？

と、例の歡心を求むるやうな微笑が一寸彼れの顔を引歪めた。

——何でも君の思ふ事を訊きたまへ。と、サニンはニッコリした………君は僕の感情を害するかと思つてビク／＼してゐるんだね？ そんな事で僕の感情など害しはしないよ………僕がした事は僕がしたのさ………若し僕が悪い事をしたと思つたら、僕は自白するだらう………

——私は貴兄にそれをお訊ねしたいと思つたのです。貴兄はあの人を殺して了つたやうなものでせう？と、ソロヴィチクは昂奮して云つた。

——先づさうだね。と、サニンは答へた。ザルデインのやうな人間に取つちやね、僕を殺すか

或は自分が死ぬかその二つより外にや出る道がなかつたのさ………が、僕と其事を行ふについて、奴は心理的の時機を逸したんだね？ 殴られると、すぐ其場で僕を殺すには、奴はあまりひどく遣つづけられすぎて了つたのさ。そして其時機を逸しちや、奴にやもう勇氣など出やしない………奴は自分の役目を果たしたのさ。

——貴兄はよく平氣でそんな事が云へますね？

——「平氣で」とはどういふ意味かね。と、サニンは訊いた。僕は鶏が締められるのだつて平氣では見ちやゐられないよ。まして奴は人間だ………殴るのは心苦しいさ………尤も自分自身の力を驗すのに、事實ちツとは心持もいゝわけだがね………が、悪い事だよ。悪いといふのは、野蠻な行爲だからさ。但し僕の良心は平氣だね………僕は運命の道具さ。ザルデインは奴の全生存が其阪路で傾いたのだから屈るわけだよ………そして奴と同じ類の者共は誰もそんな破目へは陥らぬのに奴ばかり陥るといふのも不思議さね………奴等は自分等の同類を殺したり又自分等自身の肉體を愛護したりする事には慣れてゐる。なぜかといふ事は分らずにね………奴等は氣違ひだ。低能兒だ………若し氣違ひを町中へ突放したら、奴等はお互ひに咽喉を斬りツとするだらう………さういふ氣違ひの一人に對して自家防衛をしたからと云つて、僕に何の罪があるだらう？

——でも、貴兄はあの人を破滅させたのです。と、ソロヴィチクは頑固に云ひ張つた。

——それは神様に恕へるより外に致方はあるまいね。神様が僕等兩人をば同じ道の上へ追立てられたものだからね

——でも、貴兄には手を捉へてあの人を押留める事が出来たでせう……。

——あゝ、いふ場合には分別など出るものぢやないよ。と、彼は云つた。そしてそんな事が何の役に立つだらう？ 奴の生命の法則は奴に命じて如何なる價を拂つても復讐させるにきまつて……。僕だつて永遠に奴の腕を捉へてるわけにもゆくまいよ……。又そんな事をされりや、奴にとつちや却つて一層侮辱を蒙つた事になるばかりさ……。

ソロヴィチクはドキ／＼して押黙つた。

闇は八方から彼等を引包んだ。夕日の朗らかな光線は薄黒い家根に斷切られて、蒼白くボオツと消えて行つた。眞黒な影が納屋の上や中庭に充ち溢れた。それは恰も其神秘的な生活に委せられた場所に夜通し棲息すべく集つて來た氣味の悪い物凄い生物のやうであつた。二人の微かな蹙音はシユルタンの耳には不安にきこえたので、彼は不意と犬小舎から這ひ出して、その鎖をガチャ／＼云はした。

——そりやさうかも知れません。と、ソロヴィチクは悲痛な聲で云つた。ですが、どうしても其必要があつたんでせうか？……。打つのを我慢した方がよつほど良くはなかつたでせうか？

——よつほど良い！ と、サニンは云つた。殴られるのは良くないにきまつてるさ。そして何故？……。如何なる原因で？……。

——いや、あなた。と、ソロヴィチクは手で嘆願するやうな恰好をしながら遮つた。とにかく

其方がよかつのでせう……。

——さう、ザルデインにはね、恐らく。

——そして貴方にも……。

——あゝ、ソロヴィチク君。と、サニンはヤ／＼ムツとして云つた。道徳的勝利のお伽噺はやめたまへ……。さういふ噺は要するに粗造極まるものさ……。道徳的勝利なるものは、左の頬を差向ける事ぢやないか。我々自身の良心に慙へて正理と感ずる事だよ。では、どうして正理に到達するかと云へばね、そいつは偶然の事さ、境遇の問題さ……。世の中で奴隷の境遇ほど身の毛の逆立つものはないが——たとへば爰に一人があつて、其人間の全存在が、壓迫や權勢に對して、骨髓までも反抗しながら、而も自己よりは強い或物の名に於いて、彼等に服従してゐるとしたら其人間の奴隷的境遇は就中戦慄すべきものだね。

ソロヴィチクは兩手で頭を抱へた。が、暗闇の中なので、サニンには其顔の表情がよく見えなかつた。

——私は弱い人間です。と、彼は悲しげな聲で云つた。私には今もうそれ以上の何事も分りません。そしてどうして生きてゆくべきかさへ全く見當がつかないのです。

——なんだつてそんな事を知る必要があるのかね？ 鳥が飛ぶやうに生きたまへよ。右の翼を動かしたけりや、右の翼を動かすのさ。立木を避けたけりや、避けるのさ。

——ですが、それは鳥です。私は、人間です。と、ソロヴィチクは無邪氣に眞面目くさつて云

つた。
サニンは笑ひ出した。と、その男らしい笑聲は淋しい中庭の薄暗い隅々へ一寸の間生氣を漲らした。

ソロヴィチクは頭を振動かした。

——いゝえ。と、彼は惱ましげな聲で云つた。そんな事はミンな言葉だけにすぎません……私がどうして生きてゆくべきかといふ事について、貴兄は何にも教へては下さらないのです……それを教へて下さるお方は誰もありません……誰れも……

——全くだ！ 誰も教へるものなんぞあるまいよ……生きるといふ藝術は一の才能だからね。そして其才能を持つてゐない者は滅亡するか或は自己の生命を破るのさ……

——貴兄はほんとに平氣ですね。そして何でも分つてゐらッしやるやうな事を仰しやいますね……どうか、怒らないで下さい……ですが、貴兄はいつでもさういふ風に……さういふ風に平氣であられたのですか？ と、ソロヴィチクは炎ゆるやうな好奇心に驅られながら訊いた。

——あゝ、いや。と、サニンは頭を振動かした。成程、僕は昔から平氣な素質だったがね、これでも中々種々様な疑惑に苦しめられた時もあったものさ。大眞面目になつて基督教徒の理想的生活なんて事を夢みた時代さへあつた位だからね……

サニンは物思はしげに口を嚙んだ。ソロヴィチクは彼れの方へ頸を伸ばして、恰も彼にとつては重要な且つ未聞な或事でも期待するやうに、ジツと相手の顔を見つめた。

——其時代僕に一人の友人があつた。イワン・ランデといふ數學科の大學生だが、そりや驚くべき人物だつたね。その道念の強さは匹敵し難いほど基督教教的でね、而もそれが概念などから來たものぢやなくて、天性からしてさうなんだ。奴の全生活はね、基督教の凡ゆる使徒の行ひが反映したものだつたよ。人が奴を殴つても、奴は自分の身を防がぬばかりぢやなく、却つて其敵を宥したさ。如何なる男をも兄弟のやうに思ひ、又女に對しては性の存在を認めなかつた……君はセメノヅを憶えてゐるかね？

ソロヴィチクは罪もなく嬉しさうに頭で領いた。彼れの耳に這入つた事は、彼にとつては凡べて非常に緊要であつた。と、見覚えのある澤山の人のうちから、忽ち一つの影像が浮き上つたのである。その影像は臍氣に彼れの考へてゐたものであつたが、恰も花やかな燭光が胡蝶を牽きつけるやうに、彼れの心を引きつけるのであつた。彼れの眼は氣遣はしげに又待ちかねるやうに輝いた。

——さう、そのころ、セメノヅはひどく病るかつた……クリメで人に物なぞ教へながら、たつた一人で暮らしてゐたがね、さういふ孤獨生活とそれから死の近いといふ豫感の爲に苦しめられて、奴はその土地で痛々しいまで絶望に陥つてゐたものさ。ランデはその事をきくと、病人の靈魂を救はうと決心したのだ。で、すぐさま出發した。もとより金のあらう筈もないし、又さういふ『きちがひ』に金など貸してくれる者もなかつたから、奴は千露里以上もある道程をばテクテク徒歩でやりはじめたのさ……ところが其途中のどこかで奴は死んで了つたんだ……つま

り奴は自分の生涯をば他人の爲に献げたわけだね……。
 —あなた……どうか仰しやつて下さい……あなたはさういふお方をば尊敬なさいますかと、ソロヴィチクは眼をパチパチやりながら、夢中になつて叫んだ。

—當時その事について人はさまざまに論じ合つたものさ。と、サニンは物思はしげに答へた。或者は奴の基督教徒たる事をば充分に信じないので、その點からして奴を非難した。又或者は奴をば單に天性高慢な氣ちがひだと看做した。なほ其他の或物は、奴は闘はなかつたから豫言者でも何でも無い、などと云つて、奴の道念を承認しなかつた……併し僕はね、僕はそれ等とは異なる考を持つてゐたよ……そのころ僕は愚かしいほど奴の影響を蒙つてゐたものさ……或時ね、僕は或大學生に面を殴られた事があつた……すると僕は忽ち赫ツとなつた。けれどもランダが其席に居合はしたので、僕は奴の顔を見るとね……どんな思ひをしたか、もう覺えてもゐないが、物も云はずに立上つて、其部屋を出て了つたものだよ……最初、この行爲は自分ながら大得意だつたさ。が、其後、僕は僕を殴つた其大學生が心の底から憎くなつたね……それは奴が僕を殴つたからぢやないのだ。僕の態度が奴に非常な愉快を與へたに違ひないからさ……で、僕の心的状態の虚偽な事が、だんだんにハッキリして來たので、僕は反省しはじめたね。そして壹週間ばかりといふものは、まるで氣狂のやうになつてゐたが、結局、僕の得たやうな虚偽の道德的勝利に對して、僕はもう誇れなくなつた始末さ。そこで其後其大學生が僕を冷笑した時僕は意識を失ふほどに奴を打踏してやつたのだ……それがランダと僕との間に於ける道德的破

裂だつたさ。で、僕は一層深く奴の生涯を注意して見たが、奴の生涯は實に目も當てられぬほど貧弱で且つ不幸なものだつたと認めずにはゐられなかつたよ……。

—あれ！ あなたは何を仰しやるのです？と、ソロヴィチクは叫んだ。あなたには其お方の尊い精神生活が御想像なされたんぢやありませんか？

奴の精神生活は眞似の出來ぬほど一本調子だつたよ。奴の生涯の幸福はね、凡ゆる不幸をば天命と諦めて承認する點にあつたのさ。又奴の道德上の富はね、いかなる世の中の歡喜をも財寶をも斥けるといふ點にあつたのさ。奴は自由意志からの貧民だつたね。又自分自身には絶対に不案内な或觀念の爲に生きてゐた畸人だつたね。

ソロヴィチクは手を振つた。

—あなたはどんなに私をお苦しめなさるか御存じないのです！

—ソロヴィチク君！ 君はヒステリックだよ。と、サニンは呆れて注意した。僕は君に何も格別な事など云ひはしなかつたのだが、僕の言葉は君を苦しめたと見えるね……。

—え、もう、非常に！……私は考へて、考へて、頭が破れるほど考へます……さういふ事にすべてたゞ單純な誤謬にすぎないなどと云へるものでせうか？……私は暗い室のうちに閉込められてゐるやうなものです……そして誰も私に爲なければならぬ事を教へてはくれません……何のために人間は生きるのか、それを云つて下さい！ それを私に云つて下さい！

—何のために？ それは誰にもわからない……。

——すると、人は未來の爲に生きてはいけなかつたのでせうか？ 少くとも人間が後になつて黄金時代を有するといふ事の爲に！

——黄金時代なんてものは決して存在しやしないよ。若し人生や人間が一朝にして改善され得るものだつたら、黄金時代も可能だらうさ。けれどもそんな事は出来ない相談だ。改良なんでものは、殆どわからぬ位の程度で、のろ／＼と生じて来るものだから、人間に見えるのは、たゞ登るべき階段とそれから過ぎて来た階段ばかりだね……我々は羅馬の奴隸生活をしなかつたさ。又石器時代の野蠻生活もやらなかつたさ。けれども、それが爲に我々時代の文明の幸福が味へるといふ譯でもないのだよ。若し黄金時代になるものがあつたら、其時代の人間は自分達の父と異つてあるとは考へないだらう。其父は其祖父と異つてあるとは思はないだらう。其祖父は其曾祖父とも同様に異つてあるとは信じないだらう……人間は恒に永遠の道を歩いてゐるのだ。そして幸福に赴くべき道路を舗くなどといふ事は、恰も無窮の數へ持つていつて新しい單位を加へようと欲する事と全く同じだよ……

——すると、一切は空なんですね……何にもないんですね……

——僕は何も無いと思ふよ。

——で、そのランデといふお方は？ あなたはどう説明なさいます？……

——僕はランデを愛したよ。と、サニンは重々しく云つた。僕が奴を愛したのは、奴の行ひの爲にぢやないのだ。奴が *Sincere* だつたからだ。いかなる嘲笑もいかなる苦痛も奴を沮む事が出

來なかつたからだ……僕に云はせれば、ランデは奴自身價值があつたのだ。そして其價值は奴の死と共に全々消滅して了ふのだ……

——そして貴兄はさういふ人々が人生を向上させるとはお思ひになりませんか？ 又さういふ人々には模倣者があるとはお考へになりませんか……

——何の爲に人生が向上されなければならぬのか？それが一さ。第二に、模倣者などは決してないよ。ランデを模倣するには、ランデと同じ性情を有たなければならぬ。今一人のランデが生まれなければならぬ。キリストは崇高だつたさ。併しキリスト教徒は悲惨を極めた種族だつたよ。彼等は彼の教訓の至醇至美なる觀念から死んだ *Dogma* を造つたのだ。

サニンはやゝ喋り勞れたので口を噤んだ。ソロヴィチクも亦押黙つた。四邊はシンと静まり返つた。たゞ星ばかりが洪大無邊の空の上にキラめいて、恰も言葉のない無窮の會話を續けてゐるやうに思はれた。

と、ソロヴィチクは何事か呟きはじめた。そしてその呟き聲は異様に不愉快なものであつた。

——君は何を云つてるの？ と、サニンはブル／＼顫へながら訊いた。

——私に云つて下さい。と、ソロヴィチク呟いた。あなたはどうかお考へになりますか、それを私に云つて下さい。

……どこへ行つていゝか分らぬといふやうな人間があつたとしましたら……そして人間はいつもたゞ考へてばかりゐるのです。いつもたゞ苦しんでばかりゐるのです。一切の物が其人間